

日本名勝記下卷目次

|          |     |
|----------|-----|
| 濱の松風     | 一   |
| 伊良湖崎     | 一三  |
| 熱田神宮名古屋城 | 一六  |
| 長良川      | 二一  |
| 岐蘇川      | 二五  |
| 志賀の浦     | 二九  |
| 伊勢大廟二見ヶ浦 | 四〇  |
| 月ヶ瀬の梅    | 四六  |
| 笠置山      | 五四  |
| 奈良の舊都    | 五八  |
| 西京       | 六六  |
| 京都四時の行樂  | 九四  |
| 宇治の平等院   | 一〇三 |
| 吉野山      | 一〇七 |
| 那智山の瀧    | 一一二 |
| 高野山      | 一二〇 |
| 淡路の松帆浦   | 一二五 |





日本名勝記卷の下

濱の松風



秋葉山

秋葉山〇いろは川〇阪下村〇秋葉神社〇濱松町〇さゝんざの  
 松〇三方原〇濱名〇今切〇濱名湖に遊ぶの記〇本興寺の法華  
 堂〇渦山〇さゝれ石〇濱名郷〇箱山寺〇引佐入江〇潮見坂〇  
 観音堂〇窟の観音〇岩頭の巨観音〇秋葉山へは掛川停車場  
 より森町、三倉、秋葉山阪下まで都て十里弱、阪下茶屋町に數  
 軒の旅館あり、歸途天龍川の岸に出で川舟を雇ひて流を下れ  
 ば三時間餘にして東海道の池田村に達し更に三十町にして中  
 泉停車場に至るべし、濱松は東海道の名邑、旅館に大米屋花  
 屋尤も佳なり、濱松より西北五里半にして奥山の半僧坊あ  
 り堂宇壯麗、十名勝あり、濱名湖の鰻鮓味太だ美なり、此他

遅塚麗水著

|        |     |
|--------|-----|
| 阿波の鳴門  | 一二七 |
| 津の國の名所 | 一二九 |
| 須磨明石   | 一三七 |
| 備山藝水   | 一四八 |
| 嚴島     | 一六五 |
| 錦川     | 一七一 |
| 讃と阿と   | 一七六 |
| 天橋立    | 一九〇 |
| 松江     | 一九三 |
| 筑紫の北   | 一九五 |
| 芥屋大門   | 二〇四 |
| 日向神の奇勝 | 二〇六 |
| 耶馬溪    | 二〇七 |
| 敦賀     | 二一四 |
| 金澤     | 二一七 |
| 那谷寺    | 二二〇 |
| 白山     | 二二四 |
| 能州半島   | 二二八 |



の道程は皆な記中に在り  
 山は遠州の鎮、廟は千年以外のもの、老檜古杉盡々として天に參す、月  
 明らかに河漢低く垂るゝのところ、天壇の邊、彷彿として羽客の嘯遊す  
 るかを想ふものを秋葉山となす  
 掛川停車場を下り、更に腕車を驅ること三里にして森町に至り、車を捨  
 て徒歩し若くは竹兜子を備ふて一の瀬に至る、溪流紛糾し、澗石磊落た  
 り、景物既に凡にあらす、凡そ衣を褰げて清瀬のところを渡ること四十  
 八回、石潤ふて玉の如く、水滑らかにして膏の如し、類嵐嶠緑人の衣袂  
 を青殺す、其の渡ること四十八回するを以て土人は呼んで「いろは川」  
 といふ、亦た佳名にあらすや、秋葉山に近き石打村の邊には、多く椎木  
 を斫つてこれを溪邊に排列し、米泔汁を澆いで椎茸を生せしむ、露香馥  
 郁たり、既にして一瀬より子奈良安に至るの間は乃ち天龍川の支流にし  
 て亦た水石の奇あり、畫圖も若かず、古渡に船を呼んで流を横ざり、終  
 に犬居に至り、阪下の村に入る、石華表あり、これを過ぎれば則ち秋葉  
 山なり、掛川より凡そ九里と半、終に山に入る  
 傳へ曰ふ養老二年僧行基、此の山に登攀して清淨の區なるを相、老杉を

斫て聖觀音、勝軍地藏、十一面大悲の三像を作り此に伽藍を置けりど、  
 元大登山秋葉寺と稱せり、鎮守は大己貴命、延喜式内小國神社なるもの  
 是れなり、天正年間僧光幡中興し、秋葉の三尺坊の名天下に聞えしが、  
 明治の六年寺を可睡齋に移し、今縣社となる、寺は曾て武田氏の爲めに  
 焚れたるも、猛火の中に獨り秋葉神社と觀音堂とを存せり、是れより鎮  
 火の靈神となり、萬人崇拜し、秋葉講の名天下に遍ねし、今は本社、幣  
 殿、拜殿、樓門、大葉表あり、皆な甚だ壯麗、毎歲十二月十五日の大祭  
 には賽客雲の如く集る、行基曾て此の山を相し、上峯を八葉の蓮華臺に  
 擬す、今絶巔を龍頭山と稱す、幽邃寂寞にして、實に羽客逍遙のところ  
 かと思はしむ  
 風流の古將軍が吟賞に入りし「さゝんぎの松」の聲は、今も昔に變らず、  
 海道の名邑今は更に新繁華を添へ來る、濱松の古城趾は、高阜に據て街  
 衢を俯瞰し、東照廟、諏訪神社、五社明神結構壯麗、龍祥寺、太安寺、  
 皆な千年外の寺、町を匝れる三方の原、犀が崖は武田徳川兩氏の古戰場、  
 「引馬野爾、仁保布榛原入亂、衣爾保波勢、多鼻能知師爾」と歌はれし引  
 馬野は則ち三方が原の古名なり、



史を按ずるに曰ふ元龜三年十二月、信玄兵四萬を將ひ、三形が原に陣し、火を濱松城外に放つ、家康怒て出で、これを撃んとす、織田氏の客將佐久間信盛其の衣を牽きて諫めて曰ふ、寡君、臣等を戒めて曰ふ、信玄は老将なり、其兵精強にして天下に敵なし、徳川出で戦かはんとせば汝當に固くこれを止むべしと、家康曰く嚮に信玄小田原に入り、旗其の門を摩するも氏康出ず、世傳へてこれを嗤へり、今敵に我が城下を踏藉されて敢て一矢をも放たざるは丈夫にあらざるなり、果して然らば吾は尙に髪を削り縊を被るべきのみと、諸將同く諫めて止む、二十二日信玄退て井伊谷に入る、家康遂に出で、三方原に陣す、日已に晡す、兵八千を分ちて九隊とし、鳥居忠廣を遣はして往て敵狀を視はしむ、忠廣郎黨と共に出で、敵情を見る、旌旗天を蔽ひ、軍容甚だ盛なり、乃ち馳歸り曰く、信玄軍を返し來る、陣堅く勢ひ鋭し、戦かはし必ず利なけん、請ふ速やかに兵を收めよと、家康聽かず、更に渡部守綱をして往かしむ、亦た報じて曰ふ、與に戦ふなかれと、家康叱して曰ふ、人我が室に入り我が枕を蹴るも、猶臥して較せざるものあらんやと、大久保忠佐、柴田康忠をして往て戦ひを挑ましむ、守綱これを止む、肯ずして馳す、石川數正、

本田忠勝、榊原康政と共に敵將小山昌行を撃ちてこれを走らす、家康麾下を以つて酒井忠次大須賀康高と山縣昌景を撃ちて亦たこれを走らす、北るを追ふて進む、武田勝頼、馬場信房と傍らより進みて家康の麾下に逼り、昌行昌景皆兵を返す、信玄自から奇兵を縦ちて横さまに家康の軍を撃つ、軍亂る、信玄乃ち全軍に鼓して徐ろに進む、山岳爲めに震ふ、終に大敗す、信盛走り平手汎秀死し、數正松平家忠と止まり戦かふも支えず、家康齒を切して口より沫を出し、衆を厲まして歸り撃つ、成瀬正義、本多忠真、安藤基能、鳥居忠廣等死するもの二百餘人、敵兵益す進む、家康自から脱する能はざるを度り、返して死を決せんとす、士多くは馬を喪ひて歩従す、夏目正吉濱松に在り、急を聞いて馳せ至り諫めて曰ふ、勝敗は常事のみ、此れ大將の命を授くるの日にあらず、君第速かに走れ臣請ふこれに代らん、乃はち其の馬を控へて南向せしめ、槍鐵を以つて馬に策つ、馬走る、正吉畔柳武重を呼んで曰ふ、子我君を以つて免れよ、武重止まりて共に死せんとす、正吉揮つてこれを去しむ、自ら槍を揮つて敵を拒ぎ苦戦して死す、家康間を得て走り、忠世をして旗を屏が崖に樹て以つて敗軍を收めしむ、敵以爲らく大將ならんと、争ふ



てこれに赴く、家康因て城に達することを得たり、城門闔たり、武重大に呼んで曰ふ君歸る、盍ぞ開かざると、開いて入る、一城敗を聞いて大に擾る、高木廣正、一髯首を得て還る、家康命じて之を刀鋒に貫ぬき御へて曰ふ、兩軍鬪亂、吾信立を獲たりと、衆則ち定まる、家康馬を下り槍を杖いて慨然として從者に謂て曰ふ、吾恨むらくば尾張の人の沮むところとなり、戦ひ其の時を失ひ、乃ちこの敗衄を取ると、腰間の扇を取て武重に賜ふ、都築秀綱の妻、豫じめ粥を煮て士卒に犒す、これに衣服を賜ふ、時已に昏し、或門を關せんと請ふ、家康曰く後るゝもの安くにか歸らん、且敵に怯を示す、計にあらざるなり、命じて門を開かしむ火を箒して而うして自から飽食酣睡し、鼻息雷の如し、敵方に逃るを追ひて城に逼る、城の門の開くを見て其の伏兵あるを恐れ敢て入らず、鳥居元忠、波部守綱等三百人、門を出で、戦ふ、敗兵敵軍の後より謀して還る、信立乃ち退舍す、忠世康政行く、敵兵を破りて城に入る、本多重次、馬を喪ひ敵の一騎を殖し其の馬を奪つて還る、初め重次多く糧仗を儲ふ、是に於いて衆頼て以て安す、家康諸將を召て守禦を議す、忠世曰く敵新に勝つ、當に其の鋒を挫いて以つて我軍氣を振ふべし、家康

これを然とし城内の銃手を收めて十六人を得たり、忠世及び天野康景を以つてこれに將とし五更扉が崖に登り甲斐の營を亂射す、營亂れ多く谷に陥つて死す、信立曰く家康の兵何ぞ強項なる、石川家成掛川より入り援くるに會ふて我軍稍や振ふ、家康城樓に上り甲斐の軍を望み、富永某を顧みて曰ふ汝以て敵の去留如何となす、對へて曰ふ、軍に輜重なく竈に烟を見ず、是れ必らず去らん、明日信立果して去り刑部に陣す、馬場信房これに謂て曰ふ、臣敵の屍を検するに北首するものは俯し、南首するものは仰ぐ、以つて、家康の訓練を見るべし、向に主公にして家康と和し、結ぶに婚姻を以つてし先鋒となさしむれば、即ち天下何か圖るに足らんやと

三方が原は町の北凡そ一里、同じ名の村に屬せり、當時甲斐武士と三河武士とが肉薄格鬪して流血立黃たりしところ、今は麥秀で、漸々たるあるのみ、而かも風雨陰寒の夜、往々にして陰火低迷して野狐の啼くとを聞くといふ、路三州に入りて乃はち二川の驛、瀛車の扉より望めば遙かに百尺岩頭に觀世音の古銅佛ありて、曉には斷霞を帯び夕には落日を啣みて挺然として紺碧の空に懸るを見る、これ窟の觀世音なり



寺は驛の西北二十餘町、大川村の大岩山に在り龜見山窟堂と稱す、松路委蛇、路の窮まるところ危磴あり、登り盡せば則ち觀音堂、堂の後に洞窟あり、往昔、窟中に行基作るどころの尺一の觀音を安せり、後堂に移安すと、堂の大額『施無畏』の三字は姫路の酒井侯の寄進せるもの、堂後に大岩あり、高さ八十尺横を二百尺、瀛車の牖中より見るところの觀音の銅像はこの岩の最高處に在り、明和二年、江戸谷中の人の建るところといふ、夜深く風涼しく三四五六の青星低く垂れて寶冠の瓔珞となり、半弦の素月啣んで肩に在り、游雲の徂徠して宛がら輕羅を絶けるが如きの時の觀、人をして覺えず仰いで拜せしむ

濱名湖

東海五十三長短亭、山水の尤とも明媚なるもの、駿に興津清見ヶ關三保の勝あり、遠には濱名湖の勝あり、汽車の舞坂より今切の鐵橋を渡りて驚津に至るの間、左右の玻璃窓は宛然たる横披の大活畫を作る、北に平湖を看、南に大洋を望み、國道逶迤として其の間に通じ、軟沙白く亂松青く路の絶ゆるどころ長橋虹の如く漣漪と波瀾とを截斷し、漁舟のノへ

たる蟹莊の參差たる、誠に詩境なり、若し夫れ月明らかに星稀れに沙邊松陰に水禽の相喚ぶの時、喩へば青春處女の夢を布けるが如し、濱名の湖、東西凡そ二里餘、南北は三里弱、水光滉漾天と一色、數十村落を涵す、元は猪牙の湖と呼び、海に近きところ流れて一清瀨をなせしが、明應の八年六月十日、海嘯ありて海と湖と相通ず、其の缺くるところを今切といふ、國の名は近江の知加津阿不美に對して、とはつあふみといふ、前人會て此の湖に遊ぶの記あり、

『さらば是れより浦めぐりせめと、舟漕ぎ戻させて小人見、大人見、乙若村などといふを他所にこぎ行に、小舟多くうかみて春は海に秋の本木の葉ちらせるやうなり、どかくするうち舟は驚津の浦につきて本興寺にまうづ、中頃飛鳥井雅康卿この法華堂の柱に書附けたまふ歌にたびころもわしづの里にきてとへば

靈山說法場にぞありける

汀より寺に入ること二町許左に雙樹の櫻あり、たどは津の國の生田の杜の花に似たり、門に常靈山の額をかゝげしは、彼の御經の常在靈鷲山の文によれりや



佛のおはする堂も僧の籠れるころもみな蓋もてふけるは浦里めきて哀  
 れなり―此浦は高砂山の背に當れりとかや、新居の浦は濱の松ともこ  
 どくく渚にかぶきて松の梢を洗ふ白波と見ゆ、思ふうたの風とひて  
 船の行くこと早く入出の浦つたひして正大寺にのぼる、山を渦山とい  
 ふ、湖にのぞめり、左に太田の江、右に大知波の江たゝねたり、寺の  
 前の櫻のけふこすはあすはとばかりに咲きみだれたるを見下すに、花  
 の木の間に波の立かゝれば、いづれを櫻いづれを波の花とも見も分が  
 たし、つねに見慣れしに嵯峨醍醐の花の下雫にかわりて目ざまし、岩  
 崎千貫松といふあたりをたゞすぎに過ぎて礫石といふ小さき島に着く、  
 さばかりの湖の中に一つの礫石投げたらんやうなればならん、島の木  
 立くらきままでに繁れり、辨財天女の祠在す、近江の湖の中に竹生の鳥  
 を見る如し、此處より奥のかたを濱名郷といふ、島山せまりし中に僅  
 かに開けたる所より船は出入るなり、其處を迫門口とはいふ、水うみ  
 の奥の方にて殊に世はなれたる處にて村里に故多事く残りりぞ、元  
 は伊勢の神領神戸の庄なりし、其の餘波とは古き神明の宮あり、岡本  
 といふ里に神奈太夫といふ者あり、そが家に年毎の十一月家のうちき

らくしくいものぬし、一日の中に麻をうみ布を織り成して、伊勢へ奉  
 る事絶へず、これなん神衣料なるべし、今も公より太夫が家に米たま  
 はるとなん、又濱納豆てふものは調じて公にたてまつる、大福摩訶耶  
 寺といふ寺あり、莊園給はりて故ある古寺ともなり、また鶴代といふ  
 里の名あり、和名鈔に濱名郡の贊代の郷名あるをいひあやまれるなる  
 べけれど、里人は頼政といひし大將の鶴といふ化鳥を射たる勸賞に賜  
 ひける地なれば斯く名づくといひ傳ふと、げにも奈良の八重櫻の料に  
 寄られし地を花垣の庄とよべるためしもあり、其の鶴をさしたる猪の  
 隼太といひし兵も、此邊の者なりとぞ、近きあたりに猪鼻井伊谷の名  
 あれば、さはいひたりや、三ヶ日の里あり、いとめすらかなる名なり、  
 榛間の國にこそ三ヶ月といふ處はあるを、此わたりに行きて尋んまは  
 しければ、けふ吹く風のあの迫門へ舟を入れんはたよりなしと楫取の  
 むつかれば、行かずなりぬ、島風こゝろよく舟を追ふこといと早くし  
 て、三里あまりの海の上を、ひたはしりに走りて、館山寺に着く、こ  
 れは湖の中へつと差し出でたる山崎にて、寺は山の中央に在り、山の  
 めぐり赤き岩をば立てり、山も高くけはしきにもあらねど、怪しかる



岩重なりえもいへぬ松老ひかゝりて、唐繪見るやうなり、人々其の岩に尻うたぎし、其の松に面杖つきて、いこひながめ渡すに、例の主人のおのこがいふ、まづ奥の方の山は引佐峠といふ、引佐郡の山なればなり、麓を流るゝ水の江に入るを引佐細江といへば、傍の人のいふは、其山より此の江の細く見ゆれば、細江とはいふものをとあらさふ、古歌多きところなり

實に舞坂より新居、慈津へかけて繪の如き此の風景、舞坂の松は舞ふが如く千様の趣態あり、松の中なる観音堂は松華落るところ人の訪ふこと誹すしからず「夕暮はみなどもとことしらすげの入海かけて霞む松原」と宗良親王の歌ひしは此の濱なり、湖の山は入るところ「浅けれと吾がとのははめをつくし、いなさ細江を見しゑるしなる」と歌はれし引佐細江、何ぞ其の名の優美なる、「高師山こえ来て見れば濱松の一すじ遠き浦の入海」と詠せられたる今切の邊橋本のあたり、昔は濱名の橋の在りしところ、其の花香の町は鎌倉の時の小楊州、娉婷欄に凭りて徂徠の人を招く、頼朝上洛の途次、曾つて此に宿して游燕す、堀江村の館山寺、山を背ひて湖に枕む、汀岩岸松平波と相映帯す、観音堂あり、寶樹庵あり、

落日水に入るの時、湖は美酒の如し、木石堂觀歸馬行人をして善く醺醺せしむ、景尤ども美なり、橋本の長者邸の跡に風爐の井あり、水清冽なり、曰ふ頼朝の曾つて茶を煮たるのところに、更に紅葉寺あり、足利義教の看岳の途次、此の寺に憩ひて於紅を賞したるのところに、白須賀の町に湖見坂あり、路を挾さんで皆な松、松の缺くるところ奔瀾を見る、御前岬西に遙碧を舒べ、東北萬松の上に高く富士を出す、坂の中央に湖見の觀音あり、承應の年、漁夫夜海中より觀音の木像を獲、堂を作りて祀るものはれど、松聲波聲も天鼓の聲をなす

### 伊良湖の崎

三河の地角の斜めに尾張の師崎に相對て大津に斗出したるところ、風景絶佳なり、豊橋停車場より下りて幸呂まで一里の間を車を走らせ、其處より出づる漁船に乗りて田原に入り、更らに船にて海上を十里ばかり渡りて島さいふに着く、此より岬の盡頭まで二里餘なり。

「鷹一つ見つけて嬉し伊良湖崎」と蕉翁の歌ひたるこの崎の大觀は、實に豆相の南端石廊が崎の勝と馳騁して後先なきを想ふ、而も雨つながら海



驛々として都邑に相隔離し、逸居安息をのみ思ふの人の、出るに輕車あり、翳すに絹傘あり、車馬の通ずるところ船船の行くところ、美酒あるのところ、佳肴のあるところならんには、扇頭の小景といへども籍々として其の勝概を説くの輩の、行き看るを難するのところ、又行き看るを欲せざるのところ、若し一たびこの大觀を看るあらば、必らずや應に叱を裂き氣を屏め、心を拊ち足を跋だてて驚異するなるべし

島よりして伊良湖の盡頭に到る、一帶の沙路明淨のところ碧波來り撃つ、喩へば猶ほ珠を碎いて散ずるが如く、帛を裂いて飛すが如し、路に傍ふて青草多く無名の野花楚々として自から咲く、可憐にして踏み行くに堪えず、行くこと三町にして峯あり雄然として立つ、これ實に伊良湖崎の極端、其の域外より來たるところ波濤と闘ひ我が版圖の中なる一拳石一搦土をも失はざらんとする巨鐵楯なり、而も其の名の何ぞ賤小なる、唯だ小山と名けらる、低樹と亂草とあり、登ること二町にして其の絶頂に至る、石あり坐して山水の奇を觀るべし、亂濤の中、巨龜の浮ぶることきものは是れ答志、神の兩嶼、遙かに志州の鳥羽と相對し、朝隈山の青嵐寄びて海に入るところ、海氣の氤氳たるの中に隱々として瓦壁を簇らひ

ものは二見の浦なり、勢州の山尾州の山三州の山は宛がら波瀾の如く起伏して陸と水とを相割す、遙水は碧、盤上敗碁の依るところなきが如きものは、篠の島か日間加島か佐久島か、近水は青、岸に至りて一道の素練を作る、汀沙、岩松、一曲更に一曲、一灣又は一灣、斷續の漁家其の間に點綴す、二湖光を見る、湖に蓮多し、

小山を下りて亂礁の間を過ぎり、懸路が浦を度り、浦の東南端なる骨山に登覽すれば、正に外洋に臨む、前に牛の首の巨岩あり、亂濤を排して出づ、波の鳴ること奔雷の如し、渺漫たる太平洋千里際涯なし、襟を披いて胸を露はし以て萬斛の海風に當る、氣、牛を呑んとするの概を生ず、山を下れば二大石門を得、一は海中に在りて峭立し、一は海岸の千礁を壓して立つ、高さこと百尺ばかり、呀然として無扉門を作し海風を吞吐す、此の地盛暑なく唯だ涼秋あり、久しく居るものをして衣の薄さを覺ぬしむ、明月惠來、推敲するを須ぬす、此の門邊に徂徠するの時は、雲濤微茫、上銀漢と相連なる、颯望皆詩、飄々然として髪を散し風に御して虚明を度るの想ひあらしむ、



### 熱田神宮、名古屋城

豊川の吒枳尼天社○前芝海水浴○蒲郡海水浴○熱田神宮○境域○雲見山○夜寒里○鷺峯山  
 ○寢覚里○松風の里○白鳥陵○名古屋○天主閣○金の鯨○小牧山○秀吉誕生の村○吒枳尼  
 天社は豊橋より二里、小阪井より右折して半久保、それより豊川、蒲郡には旅館、健翁館、  
 海月樓等あり熱田の旅館の重なるもの岡田屋、伊勢屋、大森升屋、紀之國屋、桔梗屋、神  
 戸屋等、海濱木芽浦には毎朝魚市あり、熱田港より四日市、桑名、津、神社港等の間を往  
 復する船舶日に數回發着す、名古屋には秋琴樓、名古屋ホテル、丸文、信忠、鶴鳴館、松  
 宗、山田屋、丸屋、田原等あり、旗亭には得月樓、河文、魚半等あり、名産には扇、七寶  
 焼、一閑張、漆器、陶器等、小牧山公園には創垂館あり

豊川の妙嚴寺といへば人は知ること普ねからねど、豊川稻荷といへば知  
 らぬ者なき吒枳尼天社は、豊橋停車場を距ると北の方二里のところ豊川  
 村に在り、寺域方四千餘弓、賽客四方より簇がり香花甚だ盛に、堂宇は  
 華麗なりといへども、亦た没風流の境たるを、免かれざるなり、御油停  
 車場の東南一里半にして前芝の海水浴場あり、海山の勝、亦た佳囑とな  
 す、瀛車の蒲郡の驛を度るに及びて晴灣の水の太だ明淨なるを見る、蒲

郡の海水浴場の在るところ、三面に青嶂を環らし前に竹島、大島、小島  
 あり、海は宛がら平湖の看をなし、波喧嘩ならず、松は甚だ静寂、落日  
 には泥金、平旦には淡墨、活畫たるを失はず、瀛車の熱田の停車場を度  
 れば、長松落落々の中、遽然として熱田神宮を見る、  
 神宮は日本武尊を祀り、天照大神、素盞雄尊、宮簀媛命、建稻種命を配  
 祀し、正殿は草薙の御劔を齋祀して神體とす、境域極めて廣大にして石  
 道四通し地に織埃を留めず、八方に華表を立て鎮皇、春敲、海藏、清雪  
 の諸門を置く、瑞垣長く匝りて、内に本殿あり、明治二十六年に改築せ  
 るもの、些の丹碧を施さずして莊麗森嚴、本殿の前、拜殿、勅使殿、祭  
 文殿、左右樂所、舞樂殿、神輿舎、神庫、及び渡殿、釣殿、廻廊等參差  
 相連なり、攝社末社左右相望む、境の靜かなること太古の如く、神苑に  
 鳥啼くも喧嘩ならず、神樹に風度るも颺颺たらず、人の石道を歩趨する  
 や疾語せず回看せず、俯して神威の炳焉を思ひ、仰いで廟殿の莊哉と看  
 油然として虔敬の心を發し、氣を屏け情を遠ざけ、肅然として拜跪して  
 而うして後退ぞく、誠に伊勢の大廟に次ぐの大社なり、  
 神さびていやかけ高き松杉に雲見の山は幾世へぬらんと歌はれたる雲見



山は神宮の背の森に在り、あらし吹く夜寒の里の寝覺にはいと人こそ戀しかりけれと歌はれし衣寒の里は、春敵門の北の木立の邊に在り、夕立の一むら返る草の葉に置く白露の玉井の里は雲見山の陰をいひ、阿波手の杜の平なる涙川は清雪門の前の一泓池なり、鶯の聲するほどは急がれてといふ道中の杜は、其の一泓池の邊どか、郭公己が禰山の椎柴にかへり來ねばや音信もせぬといふなる鷲峯山、風の音にをどろかされて吾妹子が寢覺の里は濱の鳥居の東に在り、鈴音の邊なる松風の里、笠寺村の邊なる呼續濱、さても鳴海の濱掛けて打ち續きたる愛知瀉、皆な詩あり題あり逸史あるもの、

所謂白鳥の陵なるものは熱田白鳥明法持寺の本堂の背後に在る長阜にして、老木天に參し鬱乎として蒼々然たり、日本武尊、草薙の劔を杖いて東夷を討勦し、終に大旆を返して信濃より尾張に入り、建稻種の宿禰の妹宮簀姫を納れて妃となし淹留す、會々五十葺の山に惡神あると聞き、行いてこれを討つ、山神化して小蛇となりて路に横ふ、尊踏へて行く、其の毒氣に中りて昏迷す、山を下り湧泉に飲み始めて醒覺す、醒が井といふは是れ、然も終に疾ひを獲て伊勢の能褒野に薨じたまふ、天皇宸

悼し、群卿百僚を能褒野に會して厚くこれを葬る、葬るの日白鳥あり、起て大和琴彈原に翔り此に留まると、其の留まりしところ又陵を作る、白鳥更に河内の古市に至りて復た留まり終に天に登る、此に亦た陵を作る、三陵共に白鳥の陵といふ、熱田の白鳥の陵は、宮簀姫の家に殘留したる尊の手澤に存せしものを瘞めたるところとなす、

蒼瓦粉壁、巍々たる五層の樓閣、高く美霧の中霄に向つて、さながら繪くが如く屹立するものは、名古屋城の天主閣となす、屋上更に一雙の金鯨を置く、朝暎に映じ夕暉を帯び金光陸離たり、城は加藤清正の自から指揮して作るどころ、其の髪を散じ帳を額にし、茜紅の袍を被り繪日扇を揮ひ、群牛百卒に推挽せしめたる巨石の上に踴躍して、以て工人を鼓舞したる此の美髯將軍の風采を憶はしむ、閣の邊、長松落落、雉牒直ちに度りて濠水は紺碧、雄鎮の氣象今に存す、金鯨の高さ各八尺有半、胴の周圍七尺三寸、其の一隻を鑄るに、實に黄金一千九百四十枚を熔解したりといふ、曾て澳國の世界大博覽會に出品せられて、葡萄眼睛の人をして瞳若せしめたりき、

名古屋市は實に三府に次げる大都市にして市廛賑富なり、本願寺の佛堂



は、結構莊大に、大洲の観音は市人遊戯を移すのところ太だ繁華なり、小牧山は、名古屋市を距ること正北四里、東春日井郡の小牧町に在り、曾て徳川康家の織田右府の舊誼を重んじ僅かに参遠二州の力を以て豊太閣百萬の軍と對峙したるのところ、今は公園となる、山は田勝の間に在り、形の覆荷の如し、檜松列植し、葱翠陰を交え獨り東南の一面を缺く、一葦帯水あり、東北より來り、迂餘紫回すこれ勝川なり、曠世の英雄豊臣秀吉の誕生の村は、則ち市を距ること西一里、知多郡、織豊村字上中村是れなり、村に古銀杏樹多し、豊國神社あり、廟に秀吉の木主を安置す、別に加藤清正の廟あり、虎之助會棲の宅跡なるもの、尙ほ田隴の間存す、秀吉既に九州に島津氏を降し、新たに關東に北條氏を亡ぼし、意氣八荒を呑む、振旅して還るの途次、黄袍を着け黒馬に騎し、其の扈從の士を揮ひ斥け、獨り一團人を隨がへ村巷の中を周馳し、出で、父老を召し、歡然として笑つて告げて曰く、吾は頑童藤吉なりと、酒及び物を賜ふて故舊を話して去りたるの逸話は、人をして數々聽くも怡然として娛しましむ、

### 長良川鶴飼、養老瀧

長良川○鶴飼○鶴飼の故事○養老山○養老瀧○菊水天神祠○養老寺○素心庵○長良川は岐早市の北を流る、市は明治二十四年九月の地震の爲めに荒廢せしが復た舊觀に復す市街賑富なり旅館の重なるもの玉井屋、津國屋、菊瓶、天駒、伊勢屋あり、外に旗亭、松畔樓、水琴亭、徳文樓、十八樓、雙美樓、松田屋等あり皆な鶴飼案内をなす、養老公園は大垣を距ること西南三里、山麓まで人車を通ず、山に豆馬亭、掬水樓あり

巨筆に數斛の青緑を啣せ、一氣に空際に向つて潑描せるが如きものを金華の山となす、更に童兀の百々峰其の東北に峙ち、船覆、簸野の諸峯寒嵐相重るのところに、碧流迢々として來り、水色透明にして倒影繪くが如く浮ぶものは、是を岐卓の長良川となす、其の水石の清淨なるが爲めに多く香魚を生じ、其の美人口に膾炙す、川の北岸の福光村には鶴匠なるものあり、鶴を養ひ縦つて香魚を捕らしむ、其の魚を捕ふるや舟を浮べて篝火を置き、常に夜色昏陰の時を卜す、主絃の夜は月の没するを俟ちて出で、下絃の夜は月のいまだ出でざるに先づ、舟數隻を中流のところ縦つて或は遡ぼり或は下る、宵氣陰凄のところ、火光水に映じて燕脂



を流すが如し、其の岸柳汀蘆の邊に陰見するに當りてや、山色は黯澹として水聲は幽咽し、食頃にして篝火取次に去ること遠く、煙冥く波黒く、看るものをして一味蒼涼凄酸の情に禁えざらしむ、凡そ一舟四人を載す、一人は船に在り鶴十二羽を操縦す、中央にまた一人あり鶴四羽を役す、傍に一人あり魚を魚釜に吐しめ、又た篙手をも兼ぬ、艫邊の一人は楫を執りて船の進退を掌る、舳頭の人、仔細に魚の篝火を望んで集り來るを察し、左手に鶴を繋げる十二條の繩を持し、嗟に鶴を水中に放てば、中なる一人亦た齊しく鶴を放つ、此の時篙手は篙を執つて舷を亂敲し、叱々聲を發して以つて鶴を勵ます、鶴は氣を得て波を截り流れを絶ち、或は沈み或は浮び其の疾きこと端睨すべからず、香魚逸するに違わらず、鶴既に七八尾を啣めば則ち波上に浮び出づ、鶴匠は直ちに繩を曳いて鶴を捉へ、嘴を開きて魚を釜中に吐かしむ、其の十數羽の鶴を役すること意の如くし、或は縦ち或は操り、更に繩の紛糾を整理し、篝火に脂松を添へ、篙手と舵手とを指揮する等、人をして左右指顧應酬に違わらざらしむるもの、彼に在りては納々として餘裕あり、機巧驚くべし、觀る人、別に舟を倩ひ酒肴を齎らし行いてこれを見

る、凡そ漁すること三時にして、一舟獲るところ三千數百尾の多きに上るといふ、  
 鶴飼の事甚だ古し、延喜帝の時、藍見川（長良川）鶴飼の鮎を禁厨に納れしより、方縣郡の内七郷を篋料として鶴飼七人に賜ふとあり、仁平年間鶴飼の長白明なるもの、官に請ふて一郷一戸なりしを二十一戸となす、是より世々襲祿あり、毎歲三月より九月に至るを捕魚の候となし、更來りて魚鮓を作るを監し、天朝と幕府とに獻せしむ、維新の後鶴匠祿を失ふて困窮すといふ、  
 飛瀑一夜醜泉に化して、樵家の孝子をして儘汲んで老父を養はしめたりと傳ふる養老の瀑は、大垣を距ること西南三里強なる多藝郡白石村の養老山中に在り、山甚だ高からずといへども、老樹鬱葱石逕磊落、登ること十餘町にして鞆鞆として瀑聲の層翠峭嶽の中に震ふを聞く、山の缺くるところ瀑布懸る、高さ九十尺、横丈九尺許り、削成の石壁些の支吾するものなく、水瀧々として落つ、瀑脚は唯だ一片石のみ、激して大濤を作り、霏微空濛、日華横々に散落して時に斷霓を作る、水既に平石に流布し漣漪笑めるが如く、寂然として聲を收めて竹簾の中に入る、人、衣



を塞げて清淺のどころを歩し、直ちに瀑下に至るべし、水味甘列なり、史に稱す、當者郡の樵夫、父に事へて孝なり、其父酒を嗜む、家貧にして財なし、力作して錢を得て、市を過ぎ酒を估ひ以つて進む、一日山に樵採す、酒氣あり鼻より腦に入る、怪しみて回顧すれば、石間の沸泉、其の色美黄にして醜の如し、掬してこれを嘗れば、味ひ太だ芳烈なり、雀躍して汲で父に供す、事朝廷に聞ゆ、靈龜三年、元正帝美濃に幸し、變興當者郡を過ぎて親しく醜泉を觀たまひ、以て孝感の致すところとなし、泉を名づけて老養の瀑といひ、元を改ためて老養といひ、樵夫に官を與ふと、是也、

瀧を距ること四町にして菊水天神祠あり、祠背の岩罅に涌泉あり、石を登してこれを湛ふ、祠畔樹古りて石頑に、景趣寂寥なり、更に老養寺あり、落莫たる一伽藍なり、紹巴の太閤の命を奉じて作るどころ謠曲老養の註本を藏す、其の眺望の佳絶なるどころ旗亭あり、危欄に凭つて眺望すれば、濃尾の沃野方数十里を下瞰し、某の山、某の水、某の市邑皆な指點すべく、近く金華山の翠嶂あり、遠く伊勢の海の碧海に對す、襟懷の中、緜々として心安く體の肝かなるを覺ゆ、菊水天神祠の邊に素心庵

あり、老媪名は素心、歌を好んで風流三昧す、游客の爲めに茶を賣る、風月の話ならざれば語らず、

岐蘇川

岐蘇川を下るの奇は猶ほ富士川を下るの奇の如し、齋藤拙堂、記あり曰ふ、

天保丁酉四月、余役を竣り、兩藩士と俱に江戸より還り、路を東山に取リ、輿を捨て歩行し、旁ら名勝を探る、五月四日、十三嶺を下り、晩に伏見驛に宿す、連日崎嶇、山間を経渉して頗ぶる疲る、奴輩、槍を把り鏡を荷ふ者に至ては、或は猪痛起つ能はず、且つ水路の勝を聞くこと熟せり矣、因て謀る、舟を賃して岐蘇川を下れば、桑名に至るまで殆んど二十里、一日ならずして而して達すと、乃ち舟人を召して之を戒む、翌日夙起、水濱に趨て舟を求む、舟人の家、前岸樹林の中に在り、戸を閉ぢて未だ起きず、阻むに灘聲の喧底なるを以てす、累呼達せず、唇焦し舌燥く、之を久ふして乃ち應じ、其兒と舟を舩して來り迎ふ、日巳に辰に加はる、乃ち發す、舟狭長、薄板之を爲る、呼



で鷓鴣と爲す、兒纒に十三歳耳、父は舳に在り、兒は艫に在り、各櫓  
 を持す、操縦甚だ習ふ、灘急にして舟走る、兩崖の巒巒、一時に皆搖  
 ぎ、當前見る所、倏忽後へに在り、唯だ岸行き山走るを見、而して舟  
 の移るを覺へず、山皆石身載土、松之が髪と爲り、而して紅杜鵑、其  
 間に粧點し、腥血滴たる如し、又處々に水簾有りて懸る焉、綏々瀼々、  
 潭石上に墜つ、石皆奇狀、兩岸に羅列す、或は特立して柱の若く、或  
 は拆裂して門の如く、或は渴驥の淵に飲む若く、或は臥牛の道に横た  
 はる如く、五色陸離として相間はり、斂率ね大小の斧劈を作す、間々  
 荷葉披麻を作す者有り、波浪を濯ふて以て出づ、交替去來、應接に暇  
 わらず、蓋し譎詭變幻中、清秀深穩の態を帶ふ、荆關の筆、倪黃の手  
 に非れば、狀する能はざる也、僕隸輩、山水の趣を解せざる者と雖も  
 も、皆連りに奇と呼んで聲を絶たず、忽ち一大岩、水中に屹立するに  
 遇ふ、舟殆んど之に觸れんとす、少しく誤れば則ち粉壘矣、衆愾れて  
 而して黙す、舟人笑ふて柁を振して之を避く、輒ち岩角を掠めて過ぐ、  
 如此者數處、未だ嘗て糸毫を差はず、但だ岩際を経る、波激し船舞ひ、  
 飛沫人を撲ち、衣袂盡く濕る、僕從を回視すれば、各兩把の汗を握り、

殆んど人色無し、舟人甚だ閑暇、從容、烟を吹て而して坐す、上流の  
 船の力を併せて挽き上ぐる者を視れば、難易懸絶、已にして而して峽  
 を離る、漸く平遠なり、犬山城翠微の上に露はれ、粉壁鮮明、衆望み  
 見て歡然、城下に至るに比び、又暗礁有て舟を驚み、蒼然裂んと欲す、  
 衆復た相顧みて瞿然たり、此を過ぎて以往は、漁舟相望み、歌唱互に  
 答へ、衆心始て降る、蓋し始め發して此に抵る、陸行半日の程たり、  
 一餉時ならずして而して至る、其快知る可し矣、嘗て盛廣之鄕道元が  
 記する所を讀む、江水迅急の狀を誇稱す、唐の李白に至て其意を述て  
 云ふ、千里の江陵一日にして還ると、平生竊に疑ひ以て文人の虚談と  
 爲す、今此際を過ぎ、始て其誣ひざるを知る也、但だ舟行甚だ迅、深  
 く峽中の勝を玩ぶ能はざるを恨む可しと爲す、已にして又三里、笠松  
 に抵る、鳴鐘方に已を報ず、登つて岸上の店に憩ふ、目猶ほ眩し、仰  
 いで屋椽を見る、動搖定らず、瞑坐良久ふして乃ち止む、鱗を進む、  
 脆美、口に媚ぶ、此行、山谷を跋渉し、蔬食旬に彌る、之を獲て以て  
 菜を解く、飯已み、復た舟に入る、岸愈よ濶く、水愈よ緩く、險阻已  
 に遠ざかりて、復た觀る可き無く、枕藉して而して臥す、風方に逆、



舟人力を用ひ、櫂々甚だ勞す、艦聲喧聒、人をして煩冤せしむ、午下、  
 稍や風便を得、帆を揚げて復た走る、衆乃ち睡熟す、醒むるに比べば、  
 桑名に達して日尙高し、舟人を謝遣し、陸に登つて而して行き、四日  
 市に至て宿す焉、伏見より此に至る、殆んど二日半の路程たり、道上  
 行く家々の菖蒲を挿み、彩旗翩然として風に翻るを見る、衆行旅に在  
 り、倥偬日を涉り、殆んど月日を忘る、是に至て乃ち端午の節に屬す  
 るを知る、圖らざりき今日舟行、吊屈の擧を爲さんとは、斯れ亦奇な  
 り矣、且つ舟危険を凌ぎ、布帆恙無く、汨羅の鬼たるを免る、亦厚幸  
 ならず乎、蓋し天下の至奇至美なる者は、毎に艱難危険の地に在り、  
 獨り山水の勝のみならずる也、之を求むる者、虎穴に入り、龍領を採  
 るに比す、危くして而して後に獲る所有り矣、余是に於て感ずる所有  
 り焉、未だ以て千金の子に語る可からざる也、姑らく之れを記し、以  
 て苦學勵行の人に示す、

志賀の浦

琵琶湖○大津町○三井寺○近江八景○奥の院○古鐘○辨慶曳すり鐘○三帝の産湯○辨慶の



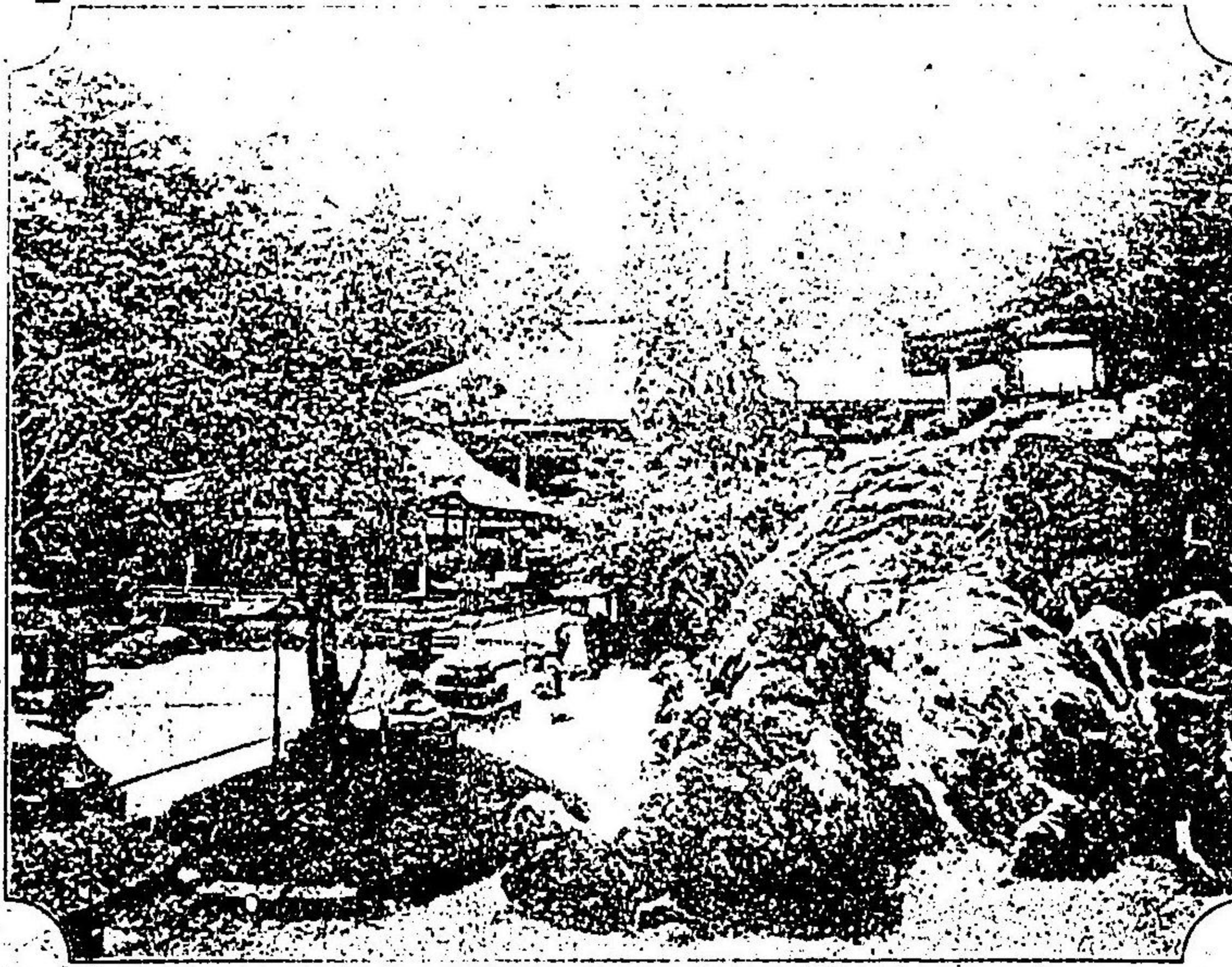
琵琶湖の月夜



大鍋○名畫○志賀の菟都○義仲寺○唐崎の一つ松○石山寺の本堂○月見亭○石山の盤○源  
 氏の間○紫式部の硯○堅田の浦○浮御堂○竹生島○小竹生島○大津の町は滋賀縣廳の在る  
 ところ、甚だ繁華なり、三井寺、義仲寺、唐崎の松、石山寺、堅田、竹生島の諸勝への道  
 程は皆な本記中に詳記せり、大津と、長濱とには有名の旅宿多し、長濱より竹生へと舟を  
 出せば、やがて姉川の古戦場の下を通る、此にて漁夫に鯉、鮎等を捕へしめて舟中にて割  
 烹し杯を啣て湖山の勝を見る、亦た逸興なるべし

周園七十餘里の烟波、洗洋として終古碧落を涵し、世に詩あるの後、幾  
 代の詩人が吟詠を捻断する幾百千丈なるも、いまだ此の琵琶の湖の晴好  
 雨奇の勝を道破し盡すこと能はず、僅かに八景なるもの世に傳ふ、  
 湖南の大津町、町の西に長等山園城寺あり、所謂三井寺なるもの是れな  
 り、二王門、本堂、大講堂、金堂、勸學院、法輪院、唐院、青龍院及び  
 南北中の三院都て四十三坊あり、門に入る石磴數百級、登り盡せば則ち  
 平地、伽藍あり、結構老蒼、古寺たるを知る、佛殿の中法幔低く垂る、  
 の邊、端麗なる古佛を見る、西國十二番の札所なるが爲めに賽客常に多  
 し、佛に賽し終りて眺望の甚だ空濶なる磴頭の茶亭に入り、危欄に凭つ  
 て琵琶の湖に對し、所謂八景を見る、茶亭の主婦は賽客の爲めに八景

を示説するに慣れたり、示説すること甚だ詳細、曰く湖の左、さながら  
 六摺屏風を立つるが如きものこれ比  
 良の山なり、峯頭の雪の全たく消え  
 ざるの時は、則ち春風尙いまだ江州  
 に吹き遍ねからざるなり、一曲の碧  
 湖を隔て、路斜に西方より湖に傍入  
 て走るの邊、さながら盆に栽たる  
 董よりも少なるもの行いてこれに  
 の人家、風帆敬仄して相趁ふて行くものは是れ矢馳の村、



寺山石州江

湖の左、さながら葱々然として其の陰數十牛を掩ふに足るの唐崎の松なり、墨拙雲龍の戦袍を穿ちたる古勇士の湖を度り岸に上り、馬を立て扇を揮ふて敵を壓ねき、自から名をしどころも此低坡に傍ふて参差の野樹、數行鬱然として湖



に枕んで高く峙ち、縮遠鏡を執つてこれを窺ふに、依稀として岩樹と堂  
 御とを見るものこれ石山寺、紫式  
 部の浄机に凭り月明に對し、形管  
 を執りて源氏物語を作りしは此、  
 湖水漸く盛りて、終に川となるの  
 ところ、橋あり、中を絶えて一  
 嶋に通じ、更に又た一橋を起すも  
 の是れ瀬田の唐橋なりと、更に林  
 樾の間を行き、幾個の僧院の邊を  
 過れば則ち奥の院なり  
 奥の院の堂右、湖に臨み高きに據  
 りて鐘樓あり、古鐘を懸く、暮色  
 蒼然として遠きより到るの時、鳴  
 りて人の懐中に詩興を送り來るも  
 の是れなり、堂の左、小丘の上に  
 西塔の辨慶曳すり鐘あり、小堂の中  
 に安置せらる、古色蒼然、人の顔色



橋 唐 田 勢

を照す、堂の背後に、天智、天武、持統三帝の降誕の時、産湯を汲みし  
 といひ傳ふる三井なるものを觀る、屋を以てこれを蔽ふ、清泉岩罅より  
 湧き、涓々として小渠の内に入る、佛堂の中、辨慶の大鍋と稱する大鐵  
 鍋あり、中院の日光院に、元信、探幽合作の猛虎抱兒の圖一幀あり、傳  
 へ曰ふ初め元信、虎を描く、夜闌け人定むるの頃、畫虎時に嘯く、人驚  
 異す、探幽乃ち虎兒を描き添ふ、虎終に咆かずと、蓋し逸品なり、此の  
 山明治十一年の十月、今上の變興を駐めたまひしより、呼んで御幸の山  
 といふ、此の地は天智帝の皇子大友の殿舎たりしところ、天皇の七年、  
 大友詔を奉じて寺を立つ、これ園城寺の始元なりといふ、  
 小々波や志賀のみやこはあれにしを昔ながらの山櫻かなと歌はれたる  
 志賀の都の舊蹟は滋賀村錦織の邊に在り、人呼んで御所内といふ、廣さ  
 二町四方ばかりの上壇の地あり、此に會て禁掖のありしところと、大津  
 町の字馬場に義仲寺あり、壽永の三年、木曾義仲粟津に敗死す、其の屍  
 を此に瘞む、後寺を作り義仲寺と稱す、墳の邊、更に芭蕉の墳あり、「木  
 曾殿と脊中合せの寒さかな」なるもの、「さい波やまがの濱松ふりにけり  
 誰世にいける子日なるらん」と歌はれたる唐崎の一本松に、大津の町よ



り北二里のところに在り、地、湖に入りて小半島を成し、古松、其の半を掩ふ、幹の周圍五尋、高さは三丈許、其の陰に唐崎神社あり、鐵枝四方に擴がり、或は社頭を  
 掠め或は湖上に舒び、  
 遠く望めば翠巒の如く、就て看れば、蟠龍に似たり、木を植て、枝を支え以て風雪を護る、誠に希有の松なり、近年に至り稍や枯色を帶ふ、風雅の士大いにこれを愛み、護松會なるもの、善くこの松を歌ひ盡せり、傳へ曰ふ昔し吾孫君の手栽せしもの、枝幹の漸やく長大なるに及ぶごとに、更に湖中に向つて磯岸を築き出す、既に三たび



唐崎孤松

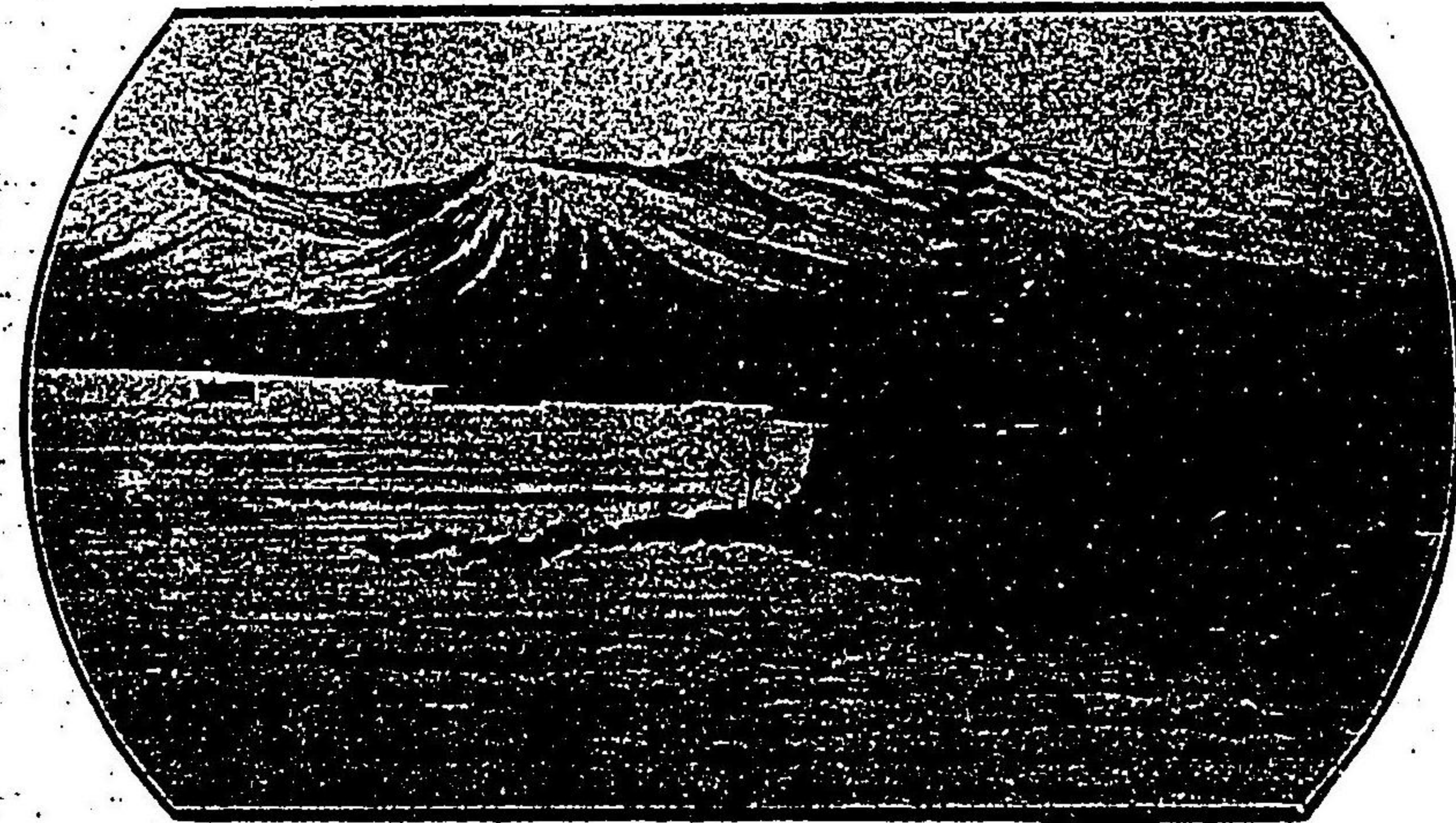
唐崎孤松  
 見ゆる真砂地に紛ふ色なき一本の松

に速く、磯岸の趾僅かに存すといふ、明智左馬助既に山崎に敗れ走りて坂本城に行く、大津に至る頃、堀秀政の軍に逢ふ、一鞭馬を躍らせて湖に入り、度りて唐崎の松の汀に至る、三峰の兜を戴き、狩野永徳繪がくところ黒猫雲龍の戦袍を着け、軍容甚だ盛に、追ふもの覺えず緩歩し、弦を鳴して嘆稱せしと、此の松ありしが爲めに此の武士の名猶ほ未だ朽ちず、  
 観月するに名ある石山寺は、番場の停車場を距ること南一里強、山皆石、其の名に負かず、太湖の煙波縹渺として前に在り、右に湖水の流れて瀬田の川となるどころより、三上の山、鏡の山を望み、幾個の青嶂を背にして眺望甚だ佳、湖濱の勝地なり、寺は天平勝寶の年僧良辨の肇めて基趾を開きしが承暦の二年回祿の災に遇ひ建久の年源頼朝再興し、元龜天正の頃、頗ぶる荒廢したりしを、後豊臣秀頼の母淀君安民治世の誓願の爲めに伽藍を修し庄園を復す、今の本堂是れなり、本堂に安置するところの二臂如意輪觀音は、丈六の巨佛の肚裏に在り、聖徳太子の持佛といふ、坐するところの八葉巖石は、山骨の露出したるもの、金輪際より起ると傳ふ、古礎紫迂し石疋これに續ぎ、岩樹の安排、佛堂の布置、自づ



から清浄の一區を作す、山の高きところ月見亭あり、風清らかに星稀れなるの夜、中霄の玉蟾湖心に落ち、山水蒼茫、欄頭の客をして神澄氣平らかならしむ、月見亭の南に二層の多寶塔あり、四柱に三十七佛を畫く、丹青、妙嚴なりといふ、七八月の交、日暮烟青きのところ、大日山の邊より流螢幾千萬、飛んで去來す、此地の螢はこれを他州の物に比すれば大にして且光り強し、汀岩岸樹の邊一面の銀砂子を撒布するが如し、游び看るもの皆な舟を浮べて酒を置き、夜半に穿つて行き、執扇を輕舟に小燈を置き、故さらに流螢尤も多きところを穿つて行き、執扇をれを打つて紗籠に盛る、誠に盛觀なり、本堂の傍に源氏の間あり、寛弘の年「一條院の御伯母選子内親王より、珍らしからん物語やあると女院へ申されたりけるを式部に仰せて作らせられければ、此の事を祈り申さんどて當山に七ヶ日籠り侍りけるに、湖のかたはるくと見わたされて心澄みてさまゝの風情眼を遮ぎり心に浮びけるを、取りあへず大般若の料紙の内陣にあるを本尊に申請けて、思ひあへぬ風情を書きつゝけたまふ」といふは此處なり、寺の什寶の中、式部の古硯あり、硯箱の形、堅六寸二分、横八寸四分、厚さ一寸三分、黒漆を塗り周邊に唐草の螺鈿

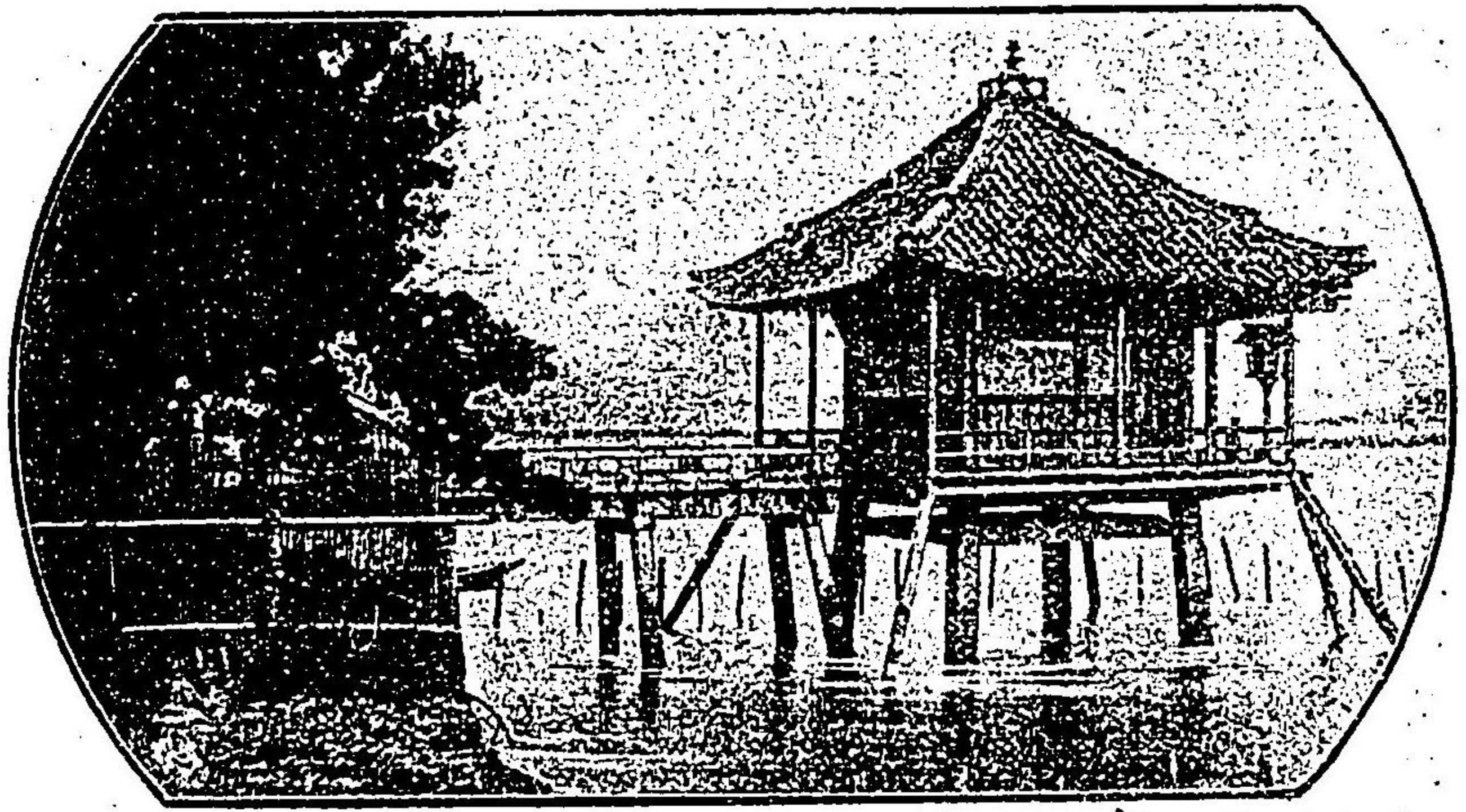
あり、硯並び置き、上に銀製の臥牛と躍鯉のの斗を載す、此の制を世に石山形と稱す、堅田の浦は、大津より三里、水に枕のり、満月寺より、汀岸をの邊一橋を通じ湖中に觀音堂を置



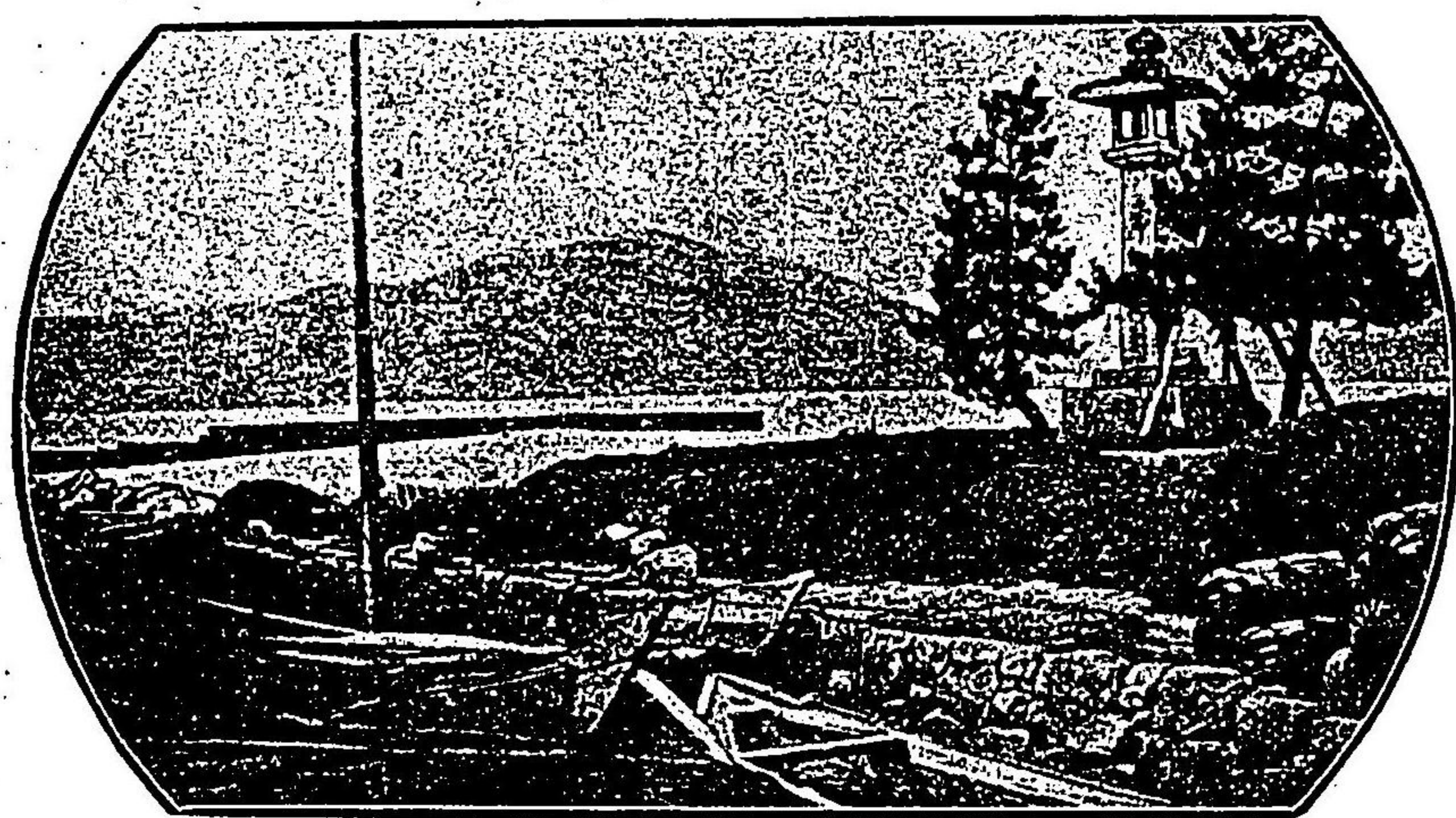
く、波の上に浮ぶが如し、浮御堂とは是れなり、黄蘆霜寒きの邊、澹雲微雨二十五絃の遺韻を曳いて雁影水に落つるの時、人をして一味の新愁を添へしむ、竹生島は、湖を渡れば大津より十六里、東海道鐵道の米原停車場より更に敦賀線の汽車に乗じ、湖東に沿ふて長濱停車場に至れば、船を僦ふて湖を渡り三里にして島に達すべし、全島皆岩、峭壁數十尺、登るべからず唯だ島東に一澳あり、僅かに船を容るべし、木あり皆な數百年外のもの、



石を攫んで立つ、嵯岬として巖と其の奇を争さふ、都久夫須摩神社あり、蒼巖を礎にしてこれを構ふ、社殿壯嚴、殿に續いて廊を廻らす、豊太閤桃山殿の一邊を移し構へたるものといふ、島の廣さ二十六町、其の最も高きところ水を抽くこと六十尺、傳へ曰ふ、孝靈の御宇四十年、一夜江州の地裂けて湖となり、駿州の富士山忽焉として地より抜く、景行の御宇十年にして竹生島出づと、島を貫いて資洞あり、毎歳祭時、祝氏淨繩を執りて内に入り、左右よりこれを繋ぐ、島繋の神事とは是れなり、此は伊吹山と對し、西に比叡、比良の諸峯を望む、碧落を上下にし、遂然として孤寂、靜かなると、太古の如し、誠に人間にあらざるを覺ゆ、



堂見浮田堅



橋 尖

多景の島は彦根を距ること僅かに里餘の湖上に在り、小艇を倩ふて行けば一時間を出ずして島に達す、島は周圍五六町、四圍皆な絶壁、怪松これに點綴し、舟を泊するのどころなし、纜を松枝に結んで僅かに岸に上れば、島を掩ふて一伽藍あり、堂宇落莫、一有髮僧あり堂を守る、堂背に出れば小地峽をなし、之れを渡りて其の廣さ數歩に過ぎざるの地に一祠の立てるを見、祠の傍に一大石の斜めに湖に向ひて傾立するあり、自然の物といへども其の形は全く碑に作られたるもの、如し、面に南無妙法蓮華經の七大字を刻せり、僧は曰ふ、天下第一の大石碑なりと堂を守る人は彼の有髮僧一個のみ、彼は數月に充つべき米鹽を携さへ來りて



此處に棲居し、朝夕佛に事ゐて些の煩惱苦痛なく香烟搖曳の中に澹然泊如として安心立命の地を得たるなり、風流なること言語に絶わたり、僧は客に語りて曰く、予は村の人に頼まれて、此の堂を守るのみ、米鹽既に匱しきの時を計りて、村の人は則ち呪り來る、若し急疾を發するがどとき嗅緊の事あらば、島の最高處に就いて火を燃き烟を揚ぐ、村人遙かに之れを望見し、以て變ありとなし、輕舸櫓を鼓して快駛し來ると、日暮れ波白きの時、身は湖心に在り、四顧微茫、誠に仙郷なり、

伊勢大廣二見が浦

宇治山田○宇治橋○内宮○神苑○五十鈴川○玉串門○正廟○風の宮○外宮○伊勢音頭○二見が浦○其の眺望○朝熊山○兜率院○本堂の香海庵○其の眺望○鏡の宮○山田に到り太廟を拜せんとするには先づ名古屋より關西鐵道にて津に至り津驛より更に參宮鐵道に乗すれば瀛車 止まるころ乃ち宮川なり宮川を度れば山田町、旅館の重なるものは古市に油屋、志久保町に宇仁館、吸護園外宮前に北村屋、尾上町に十文字屋、藤屋等あり、伊勢音頭を看るには備前屋、杉本の二軒あるのみ、二見が浦に海水浴場清浄亭あり、朝熊村には角屋、豆腐屋等あり

五十鈴の川は天潢を分ちて終古碧なる神路の山を抱きて清く流るゝのはとり、昔しながらの山の姿、水の態、神寂びたる一區の清淨地は、これ天祖天照大神を奉祀せる大廟の在るところなり、日の本の土に生れ、其の禾を食ひ其の桑を衣るもの、誰れか誠恐誠惶して神徳を尊崇せざるものあらんや、宇治橋を渡りて第一華表あり、華表の中は即ち神苑、杉檜森然として立ち、地に寸埃なし、老碧古翠、蒼涼の一氣を吹いて人をして情を却ぞけ氣を屏け、肅然として身の太古に在るを思はしむ、乃ち先づ御裳川の岸に下り立ちて手を淨め、鞠躬して進みて玉串御門の下に跪づき、遙かに正殿の邃幽たるところを望みて稽首すれば、虔敬の念油然而起り、心地清潔の些の度すところなし、更に廟の四方なる攝社を巡り拜しつゝ、御稻の御倉御池を看、五十鈴川に架けたる御橋を渡れば則ち風の宮、橋の上より上流下流を見渡したる其の景色は、山のうねく水のうねうね神世ながらの態見えて神々しさ言はん方なし、大神は、崇神帝の時、威靈を瀆し奉まつらんことを懼れ、大和笠縫の里に奉祀したりしを、垂仁帝の御宇三十六年、倭姫命、神勅によりて此の



五十鈴川の邊に移し、八咫の御鏡をもて神體と崇めたてまつる、今に至るまで一千九百年所を經、外宮は山田町の南、高倉山に在り、内宮と相距ること三十町、路右に下乗の木標あり、之れを過ぎれば則ち外宮あり、賽道の左右に奇卉美木を列栽す、細草平布して日温たかに翠り烟る、所謂の神苑なり、進むこと更に二町ばかり、小流あり、橋を渡りて華表より入れば老杉森立し、人をして覺えず敬意を起さしむ、斜めに左方に向ふて進めば、右に千木堅魚木の、老樹蒼鬱の間に隠見するを望む、前に神池ありて其南を高倉山となす、正殿は南面し、茅屋白木造、彫繪を施さず、但千木堅魚木には金を以て之を飾り、高欄には装ふに五色の珠を以てするのみ、宮門には白絹の戸帳を垂下したり、豊受大神を祀り、雄略帝の廿二年これ建つ、大神宮に後る、實に四百八十二年といふ、凡そ内宮に在るところの別宮は、荒祭宮、月讀宮、月讀荒魂宮、伊佐奈岐宮、伊佐奈彌宮、瀧原宮、伊雜宮、風日祈宮、及び攝社三十五、末社十六、外宮に在るところ多賀宮、土宮、月讀宮、風宮、及び攝社十六末社八、天武帝の二年毎二十一年遷宮の典儀を定めらる、之を久しうして國事多端、儀を擧げざるもの

明治に至る、二十二年、憲法發布の大典あるや、毎二十一年遷宮の典例を復す、其の遷宮の新殿に用ゐらる、淨材は、木曾山中の森林より撰擇し、神宮所在の地に附屬する各町村民に齋戒して之を曳へて五十鈴川を溯り神域の中に入る、往古より典例あり、これを御木曳の式といふ、今年の春、御木曳の時、歌ひし道歌に曰ふ、  
 (一) 港海邊に拾ふも嬉し、御代も豊かに、人のうき世も、いさんで忘れ貝、もろともに、白髪が生へるまで、さアさ、ひけく、曳けやア曳け！  
 (二) 過ぎし昔を花橋、御代も豊かに、まのふ袂に、いさんで、風薫るもろともに、白髪が生へるまで、さアさ、ひけく、曳けやア曳け！  
 (三) 酒はほろ酔、娘は二八、御代も豊かに、花はさくらの、いさんで、さかりまへ、もろともに、白髪が生へるまで、さアさ、ひけく、曳けやア曳け！  
 (四) 沙のみちひに、清ひる網場、みよも豊かに、御木に玉散る、いさんで、浪の花、もろともに、白髪が生へるまで、さアさ、ひけく、



曳けやア曳けー、  
 (五) 神の御苑の、花さく頃や、みよも豊かに、心うき立つ、いさんで、  
 春景色、もろともに、白髪しろがみの生ゆるまで、さアさ、曳けー、ひけ  
 やア曳けー、  
 (六) 宮木曳みやぎひきにと、出ていさむ日は、御代も豊かに、老も若やく、いさ  
 んで、春の空、とふともに、白髪しろがみの生ゆるまで、さアさ、曳けー、  
 ひけやア曳けー、  
 (七) ためし變かはらず、千代萬代も、みよも豊かに、小野の港の、いさん  
 で、車くるまひき、もろともに、白髪しろがみの生ゆるまで、さアさ、曳けー、  
 ひけやア曳けー、  
 (八) 木曳きひき歸りに、いざ立寄らん、みよも豊かに、車くるまにえんある、いさ  
 んで、櫻花樓あけぼの、もろともに、白髪しろがみの生ゆるまで、さアさ、曳けー、  
 ひけやア曳けー、  
 古市の町に伊勢音頭なるものあり、大室の四もに廊を回らし、中央に數  
 人あり琴、三弦、鼓弓を執つて鼓奏す、擊橋一聲すれば勾欄こうらん自から湧き  
 更に一柝すれば楯間より懸燈垂下し、復た一柝すれば、琴、三弦、胡弓

高低たかひ彈奏し、麗衣れいかしたる妓女きよ十數人左右より翩々として舞ひ出で、音頭  
 の歌に隨したがふて漫舞まんぶし左より來るものは右、右より來るものは左、遞次ていじに  
 舞ひ去る、其の舞ふや交るゝ、手を舒べて頓足とんそくするのみ、翠袖すいそく軽く颯あり、  
 金扇きんせん徐ろに度るの趣態しゆたいなし  
 二見が浦は山田町を距ること東二里強、海に二つ岩なるものあり、大な  
 るもの二十九尺、小なるもの十二尺、岩の色蒼潤にして解索かいさく皺しわをなし一  
 は仰ぐがごとく一は俯すがごとし、相距ること二丈ばかり、二岩の間に  
 注連しゆめを張る、退潮たいしうの時は歩いて平沙へいさを涉りて岩角がんかくに攀よぢ、四方しやうを眺望てうぼうす  
 べし、近く屏風びやうぶが岩、鶏冠岩けいがん、鯨岩くじろい、鼻石はないし等あり、遠く參尾さんびの山を烟波えんぱ  
 の上に見る、甚だ佳處かじよとなす、出日の東溟とうめいに浴するの時、尤も壯觀さうくわん、海  
 濱ひんに賓日館ひんじくわんあり、潮清しうせいく沙軟さなんかに、夏時海水浴かじみずよくの客を簇むららす、  
 浦の背うらのせに雄然ゆうぜんとして聳ゆるものは朝熊山、宇治山田よりすれば二里にし  
 て近く海抜かいぼく一千七百尺、山に勝峯山、金剛證寺、兜率院あり、仁王門、十三  
 佛堂、護摩堂、舍利堂、鐘樓あり、石磴せきだう縈回して仁王門に通ず、一池あ  
 り、一橋影を涵ひたし天女祠あり、これを過ぎて本堂、本堂は九間四面、虚  
 空藏菩薩を安置し結構壯麗なり、吞海庵あり、地藏菩薩を安置す、峭岬せうさ



に傍ふて廊を構ふ、危欄は空外に懸るが如し下に喬木の梢頭と飛鶴の背  
 を見る、皆を決すれば伊勢の海晶々として一大鏡を磨し、飛鳥、泳島の  
 遊り日明らかに波媚び、篠島の外は雲濤千里、布帆天邊より来る、天露  
 れ氣澄むの時は、遙空に富士を見るとき、富士見臺の名あり、風景甚だ佳  
 なり、兜率院は欽明帝の時の創建、後聖徳太子の行啓ありて佛舍利を安  
 置すと傳ふ、二見よりすれば一里にして近し、山麓の朝熊村、萬金丹を  
 賣るの家あり「神代より光をとめて朝熊や鏡の宮にすめる月影」と歌は  
 れたる鏡の宮は、村を距ること數町に在り、青蘆淺水、中流にして石多  
 く、山様水態また尋常にあらず、

月が瀬の梅

○伊賀の上野○白樫○石打○天満山○一目千本○杜鵑花○躑躅川○尾山○長引○渡舟○月  
 が瀬○舟遊○月瀬記勝○關西鐵道の上野停車場より下りて一里半強にして白樫村なり夫よ  
 り十二三町行けば「のぞき鐘」とて脚下皆な梅、普く梅花を見るには道路六里に亘り、半は  
 は嶮路なれば一日には看盡されず、尾山、月が瀬には旅舎旗亭あり、元は野朴なりしが今  
 は歌妓なき入り來り漸く俗に陥りぬ

香は二州に度り花は九村八谷に亘る、月が瀬の梅天下に藉甚す、旅客既  
 に伊勢の大廟に詣り朝熊の山二見が浦の勝を見て、更に瀛車に乗じて還  
 つて龜山の停車場に至り、關、加太、柘植、佐那具を歴て上野停車場よ  
 り下り、車を傲ふて行くこと二里すれば白樫村、即ち月が瀬の第一村な  
 り、名張の川、青嶂の間より出で、青嵐翠微を浮べて水色縹碧、淵とな  
 り、潭となり淵となり瀬となり、以つて梅あるの村を貫ぬく、水の南には  
 廣瀬、嵩、遅瀬、月が瀬の村あり、北には治田、白樫、石打、尾山、長  
 引の村あり、  
 白樫を過ぎて足指漸く仰ぐ、石打に至りて稍や梅を見る、路を挾んで茶  
 圃多し、行くこと半里ばかり山腰を迂餘す、峯あり路を欄め溪あり路を  
 奪ふ、路窮するが加くにして亦た通ず、丘あり赤松扶疎甚だ趣態あり、  
 伊賀大和の山を看るべし、更に長阪を上下すること一再、阪の盡るとこ  
 ろ下瞰すれば一望皆な梅、山を繞り、村を埋め、溪に度り、さながら冷  
 雲の凝りて流れざるが如し、萬梅の中に一道の碧流を見る、誠に絶景な  
 り、天神山を下れば梅ますく多し、老幹嵯牙として花を着くこと尤  
 も稠密、山隈水澗、花にあらざるはなし、稱して一目千本といふ、吹い



て舞雪をなして蒼巖に點と碧溪に落れば、溪水渾白、掬びてこれを飲まば齒牙も亦た香しからん、天神社の畔、望み尤も奇絶なり、此の溪、杜鵑花多し、一に躑躅川といふ、晩春の時、山燃へんとし、水の縹碧と相映帶し、其の眺め多く梅時に譲らずと、尾山村を過り、長引村に至る、崖を下れば、鶯の瀧あり、此邊梅尤も多く、白雲の中を行くが如し、溪邊に渡頭あり、流れの甚だ駛きが爲めに、彼岸より一條の太綱を張り、舟子二人、一人は其の綱を執り、一人棹を執つて以つて舟を行る、中流のところに舟を小留して、溪山を看れば、萬梅底中、心は杳然として碧水と共に逝かん、梅を壓して翠幃立ち、白雲搖曳して梅と色を同ふす、其の景繪よりも美しく、彼岸は則ち月が瀬、一村白盡し、希れに松杉を見れば、翠色の殊に鮮明なるを覺ゆ、月が瀬の村下に桃野の渡口あり、梅の旅館に吟附して、輕舟を渡口に、若し夫れ月色黄昏の時に至れば、疎影横斜、梅を看るも、亦た逸興なり、若し夫れ月色黄昏の時に至れば、疎影横斜、水清淺、冷雲月を罩めて月に微暈を描き、滿身の花影奇香骨に沁し、仙人せんとす、此地今は花時頗る雑沓し、白面翠袖の人、客に酒を侑め、香世界中、絃歌を聞くといふ、齋藤拙堂の月瀬紀勝の數節を抄出して、

いまだ遊ばざるの人に觀めず、一目千本とは尾山八谷の一也、花最も饒し、故に此名有り、蓋し吉野の櫻谷に比すと云ふ、余、同人と院を出で、前崖を下る、山水、梅花と皆既に佳絶なるを覺ゆ、意に任せて而して行く、一大谷に至る、文稼識て而して之を云ふ、徑詰曲して而して上り、花之を夾み、歩々其間に、出づ、白雲を籜んで而して行く如し、數百歩にして巔に達す、下し、願みれば、彌望嶠然、谿山と相輝映す、余嘗て芳野に遊び、其一目千本を觀る、其盛有て而して此勝無し、又嘗て嵐山の櫻花を觀る、此勝有りて而して此盛無き也、更に之を西土に求むるに、梅花を以て名ある者、抗の孤山は、境蓋し幽、花は則ち寥々たり、蘇の鄧尉、花頗ぶる多ければ、地は則ち熱鬧、唯だ羅浮の梅花村、峻峰に對して寒谿に臨み、而して花尤も饒く、庶幾くば我梅溪に比す可き歟、日既に歛昏、花淡煙中に隠れ、千樹依約、其極まる所を見ず、暗香翁勃として人を襲ひ、溪聲を聞くと益す近くして且つ大、咫尺色を辨せざるに至て而て後に去る、(其二)

昏黒、還つて院に入る、月升るを俟て復た出で、花を觀んと欲する也、



余平生溪梅月夜の奇を想ひ、一遊して之を併せんと欲すると毎歳、春人の伊よりして来る者有れば輒ち之を詢る、花の開謝と、月の虧盈と、毎に齟齬して相合はず、之を遅つと七八年、今歳に至り、今月望前を以て來らんと欲す、然れども地、山中に在るを以て、花を着くると殊に晩く、其盛開常に春分の前に在ると數日、而して春分は今月の末に見離披と、私に謂ふ、半開に及べば則ち可、何ぞ其燼爛を待んと、遂に望後三日を以て來る、豈に意はんや、花の開く已に七八分、或は將に十分ならんとせんとは、實に望外の幸也、獨り奈んせん、月已に落つるも、黒雲、天を覆ふを、意殊に悵々、燭を張て飲んと欲す、此行樽の五升を容る者を購ひ、滿に酒を貯へ、奴に命じて負荷せしむ、呼んで之を取て酌みしに、數巡ならずして而して竭く、怪んで之を詰れば、即ち知る、奴、酔ふて地に墜して傾覆を致せしなるを、益す悵悵して村酒を買はしむ、數升を得て來り、盞を洗ふて更に酌む、甜口に適はずと雖ども、亦自ら燼然たり、文稼は風流の士、公圖は詩を以て海内に名あり、而して半香善く山水を畫き、餘人亦皆吟咏揮灑、少

しく愁悶を慰む、俄にして而して小奚來り報じて曰く、雲破れて月出づ矣と、衆驚喜、狂せんと欲し、盞を捨て走り出づ、時將に二更なりんとし、月色清朗なり、歩して眞福寺に抵る、枝々月を帯び、玲瓏透徹、影盡く横斜し、寶鈿玉釵、錯落地に滿ち、水其下を流れて鏘然聲有り、人境に非るかど覺ゆ、岸に傍ふて西行せしに、前には月瀬を望み、水清くして寒玉の如く、月影を漾はし、盛めて銀鱗と作す、而して西山の花其上に倒蕪し、隱約見る可く、一棹中流、山水俱に動ん、吾平生の願、是に至て酬ゆ矣、(其三)

既にして而して天晴れ日出で、午に近きころ雪盡く消ゆ、乃ち往て南岸の勝を覽んと欲し、行て一目千本の下に到る、舟南岸に横たはるを見る、即ち嵩村の渡也、水を隔て之を呼びしに、老篙夫一聲にして應答し、叢竹中よりして出で、舟を撐して來り載す、余衆に謂て曰く、北岸は山路崎嶇として行き難く、未だ其勝を悉す能はず、請ふ先づ之を觀、而る後に南に及べば如何、衆曰く、可なり矣と、乃ち命じて溪を泝らしめ、眞福寺の下に抵る、岳石斲礫として舟を齧む、乃ち反る、尾山の梅、谷を以て量る、八谷各數百千樹、眞福其極西に在り、其下



を初谷と爲す、名を傲谷と曰ふ、第二を鹿飛と曰ひ、第三を搜窪と曰ふ、其上に天狗巖有り、羽客の棲止する所と謂ふ、第四を祝谷と曰ひ、第五を菅蒲谷と曰ひ、第六を杉谷と曰ふ、第七は即ち一目千本、第八を大谷と曰ふ、花の多きと一目千本と相頡頏し、相距ると皆數十歩に過ぎざれども、其勝各異なりて、盡く状す可からず、唯だ諸谷の花、前岸の山と、谿を夾んで相映じ、舟其間を行き、杳然として仙路遠からざるかと覺ゆ、最も奇と爲す也、公圖嘗て此に遊び、句有り云ふ、梅花亦自有標源と、信に然り、余之に謂て曰く、桃花は凡俗、未だ仙源を標するに足らず、世をして真に桃源なる者有らしむるも、竟に梅溪の仙趣を得たるに若かず、彼彭澤の記、徒らに力を費す耳、恨むらくは此くの如きの勝を目撃せしめざる也と、公圖首肯するもの之を久ふせり、(其五)

舟中既に尾山諸谷を覽る、又西して桃野を觀んと欲す、纒に棹を轉ずれば、則ち北岸に未だ見ざる所の山、突兀として、躍り出づ、樹石雜焉、蚪龍虎豹、譎詭天矯、一石有り、人の冠して而して立つ如く、鳥帽子巖と曰ふ、水益す駛く、激搏礮礮、稍緩き處、俯して而して之を

窺ふに、澄徹、底を見、游魚數ふ可し、花片波に點す、輒ち就て之を嘍はんとし、得る所無くして而して逝く、之が爲めに一笑す、仰ぎ見れば桃野前に在り、地勢徒絶、黄茅數家、縹渺として梅花爛熳の間に現出し、瑤宮瓊闕の白雲中に在る如く望む可く而して即く可からざる也、篙夫云ふ、此溪、夏月毎に、躑躅花開き、水變じて猩血色を作す、亦奇絶たり、故に名づけて躑躅川と爲す也と、嗚呼、溪之奇、一に何ぞ多きや、恨むらくは一時に併せ觀ると能はざるを焉、之を記して以て他日を俟つ、(其六)

天復た晴る、杉谷を過ぐ、尾山の第六谷也、岡阜陂陁、徑を得て而して上り、俯して花の谷中に堆積するを見、疑ふて殘雪と爲す、土人、導を爲す者曰ふ、雪若し消へざれば、花蕊凍瘁して、實を獲ると饒からず、幸に消釋し盡す、今年必ず豊ならん矣と、余因て詳に一歳の入を問ふ、曰く尾山一村にして、上熟には乾梅二百駄を得、每駄一斛伍斗、重さ貳陌斤なり、此間十餘村を併せば、中熟にして大抵千四百駄を得、上熟なれば二千駄なり、每駄の價、銀玖什錢、或は陌錢と云ふと、蓋し地既に境塙、耕す可からず、此を以て穀に當つ、實熟するに



及んで採乾し、京都の染肆に送る、獲銭、萬石の入に減せず、亦山中の經濟也、聞く、備後三原に大梅林有り、未だ此れど如何なるを知らず、公圖曰く、吾れ三原に遊ぶ者再び、地爲る平遠、此間と趣を異にす、花の饒なるは或は相頡頏す可きも、地の勝は則ち及ばざると遠し矣と、愈よ上る、則ち一目千本左に見はれ、又前に南岸の花を望み、月瀬の觀に減せず、斜日之を射て、花光煥發し、芳霧山谷に噴き、殆んど人目をして眩して正視すると能はざらしむ、亦一奇也、(其八)

### 笠置山

鷄鳴の森○福壽院○忠臣を夢みし處○城門趾○地獄谷○行宮の趾○文殊岩○樂師岩○彌勒

岩○石門○太鼓石○觀音谷○飛鳥路○動石○具吹岩○木津の川○笠置は關西鐵道の一停車場なり、

月が瀬より行かんには桃香野より高尾を歴て名張川を下り南大原に出で笠置山に至る、凡そ七里、今は流車通ゼリ、笠置の町には旅館多し、欄頭の眺め美しく、夜更けて

松聲、瀬壁の夢に入り來り、悵然として元弘の昔を憶はしむ

月が瀬より、桃が野、桃が野より奥が原、其の間、峻岨なるは二里半ばかりなり、柳生村を過ぎりて而うして笠置山、其の間凡そ七里、今は氣

車通じ、此の地に停車場あり、

此の山曾て伽藍あり、白鳳十一年の創置

なり、天平勝寶の四年、又た正月堂を創

立し、歴代の修建を歴て終に巨刹となり

しが、元弘の兵燹の後、廢殘して舊觀に

復すること能はず、唯だ古鐘の業火を免

かる、あり、福壽院の傍に在り、形甚だ

古雅、建久の年間鑄るところといふ、山

は木津川の南に欵だち、高さ十町、阪路

繁迂して鷄鳴の森に入る、青松路を挟み

風度りて隕露多し、憶ふ元弘の年、後醍

醐帝蒙塵、此の山に幸きせられたりしを、

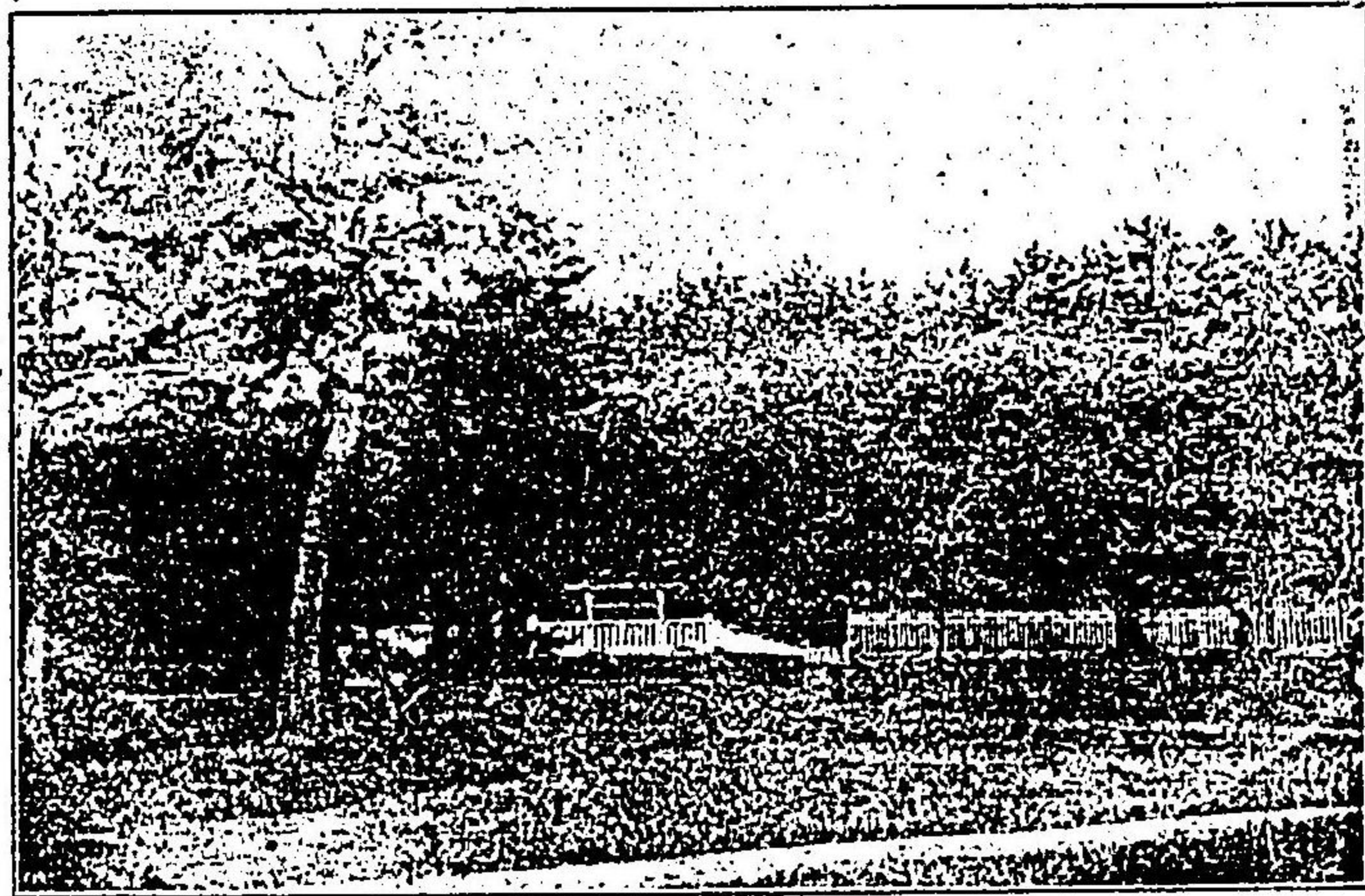
北條氏の兵復た來りてこの山城を攻め、

城終に陥り、帝は藤原藤房と共に夜る此

の山を出で、迷ふて路を失なひ、この松

林の中に來たまひし時、東方將に白から

少時憩はせたまひ「さして行く笠置の山



垂仁天皇の陵

んとす、松蔭に就き草を藉いて



を出でしより天が下には  
 隠れ家もなし』と歌はせ  
 たまふ、藤房泣哭し『い  
 かにせんたのむこかげと  
 立寄ればなほ袖ぬらす松  
 の下露』と、唱和の際、  
 金翼雞あり、嗥々として  
 啼いて山下の里に向ふ、  
 藤房始めて路あるを知り、  
 帝を扶けて山を下る、鶏  
 鳴の森とは則ち是なり、  
 笠置寺の畔小丘の上に毘  
 沙門天の小祠あり、帝の  
 夢に二童子と語りて忠臣  
 ふ賊の陣に逼るに及び、  
 人馬壘粉し、因つて自から  
 敗潰し積屍谷を填むと、



陵の皇天武聖

\*楠子を得、楠子の  
 の感激して進謁  
 したるのところ  
 は此と、阪上に  
 二石の相對して  
 立てるは、曾て  
 城門の在りしと  
 ころなり、大平  
 記にいふ、參河  
 の人足助二郎重  
 範、城門を守り、  
 勁弓長箭を以つ  
 て賊將二人を射  
 殪すと、更に曰  
 城門の外に地獄

谷といふあり、行宮の在りしところは、今や荒草離々として方三百歩ばかりなり、大石あり懸崖の上に横はる、薬師岩といふ、其の西に彌勒岩あり、魏々として十丈ばかり、其の右に又た高さ其の半ばに及ぶの石あり、文珠岩といふ、昔は皆な石面に佛像を鑿せり、燹後皆な滅し見るべからず、彌勒石の下に一基の卒塔婆あり、元弘戦死の忠臣の靈を供養す、あり、彌勒石の下に一基の卒塔婆あり、元弘戦死の忠臣の靈を供養す、石門を渡り太鼓石を過ぐ、これを敲けば琴々として聲あり、下に觀音谷を見る、當時賊の來り攻めたるの間道なり、山の東北に一村あり、飛鳥路といふ、村の桶屋某の媪、賊を此の間路に導いて終に城を陥る、近村の人其の大逆無道を惡み、今に至るまで婚嫁を通せず、村人亦た癩疾を病むもの多しと、蟻の逕を過ぎ動石あり、一大圓石なり、嚴上に在り、手を以てこれを推せば搖々として動いて止まず、林を穿つて貝吹岩といふに至る、高さ十六尺廣さ三十六尺、官軍の軍螺を吹いて進退を指揮したるのところに、下に木津の清瀬を見、水を隔て、笠置の町を望む、山高く水長く風光畫くが如し、笠置の町の旅館に就いて、船を僦ふて清瀬を下り木津町に至るは、亦た甚だ風流、松青く水白きのところ長橋を架



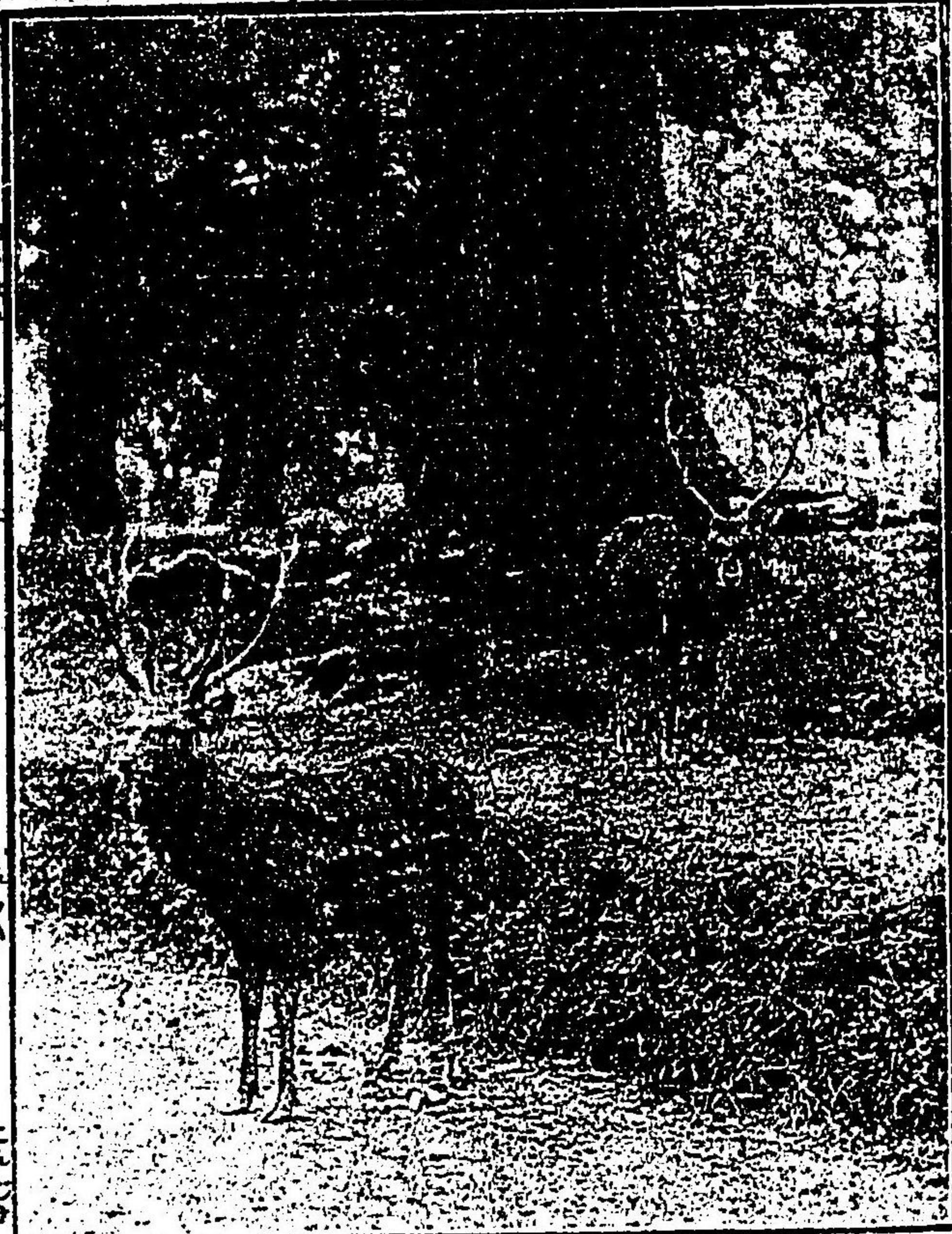
す、自此馬車あり奈良の古都に至るべし、而も笠置の停車場より瀛車に上れば、一時間ならずして奈良の大佛停車場に至るべし、

### 奈良の舊都

○興福寺○南園堂○東金堂○古佛○本堂○古鐘○火燭大鼓○金剛山城の門柱○佛殿の古佛  
 ○花の松○五層の寶塔○猿澤池○博物館○東大寺○三笠山○東大寺の樓門○仁王○大佛殿  
 ○古燈籠○大佛○佛殿の什寶○聖武帝の宸額○二月堂○三月堂○手向山神社○嫩草山○奈良名物○刀屋○御溝の趾○群鹿○春日神社○古燈籠○若宮○巫女○春日野○般若寺○京都の七條停車場よりは一時半、大坂の天王寺驛よりするも同じく一時半ばかりにして奈良停車場場に達す、近時關西鐵道の瀛車も奈良の大佛驛に通ず、旅館の重なるもの嫩草山の麓に武藏野あり、春日の大鳥居の前に菊水樓あり、其の他猿澤の池畔に旅館の佳なるもの多し

洋客の曾て奈良に遊べるものあり、其の山容水態の温藉優雅なるを看て稱して曰ふ、奈良の風物は佳酒のごとし、人をして美慵煦々、睡りを思はしむと、實に奈良の停車場より下りて、先づ温然たる嫩草の山に對する時は、趨歩自づから緩漫となり、衣帶自づから寛廣なるを覺ゆ、霞酒を賣り、線香と墨とを賣り、青丹よしの菓子を賣り、根來塗の器物

を賣り、奈良人形を賣るの市廛の間を過ぎりて、先づ猿澤の池の邊に出で、小阪を度り石磴を登れば則ち興福寺趾なり、南園堂なるものあり、弘仁四年、藤原冬嗣の創建したるもの、堂は八稜寶形をなし、丹老ひ碧褪し、古意の人の襟懷に滿るを覺ゆ、欄や扉や千箇寺詣りの紙片狼藉たり、銅鱷口を撃つて佛に賽し、堂に上つて内を窺へば、法幔の深く垂るゝところ隱々として金色佛あり、堂の傍の家に佛符を賣る、更に東金堂あり、中央に釋迦佛を置き、左右に增長天、持國天、仁王、金剛、の木像あり、古奇老怪、其の制凡



鹿神の日春



にあらざるを覺ゆ、日遽かにして香烟低迷し、佛燈一點炯然として人の

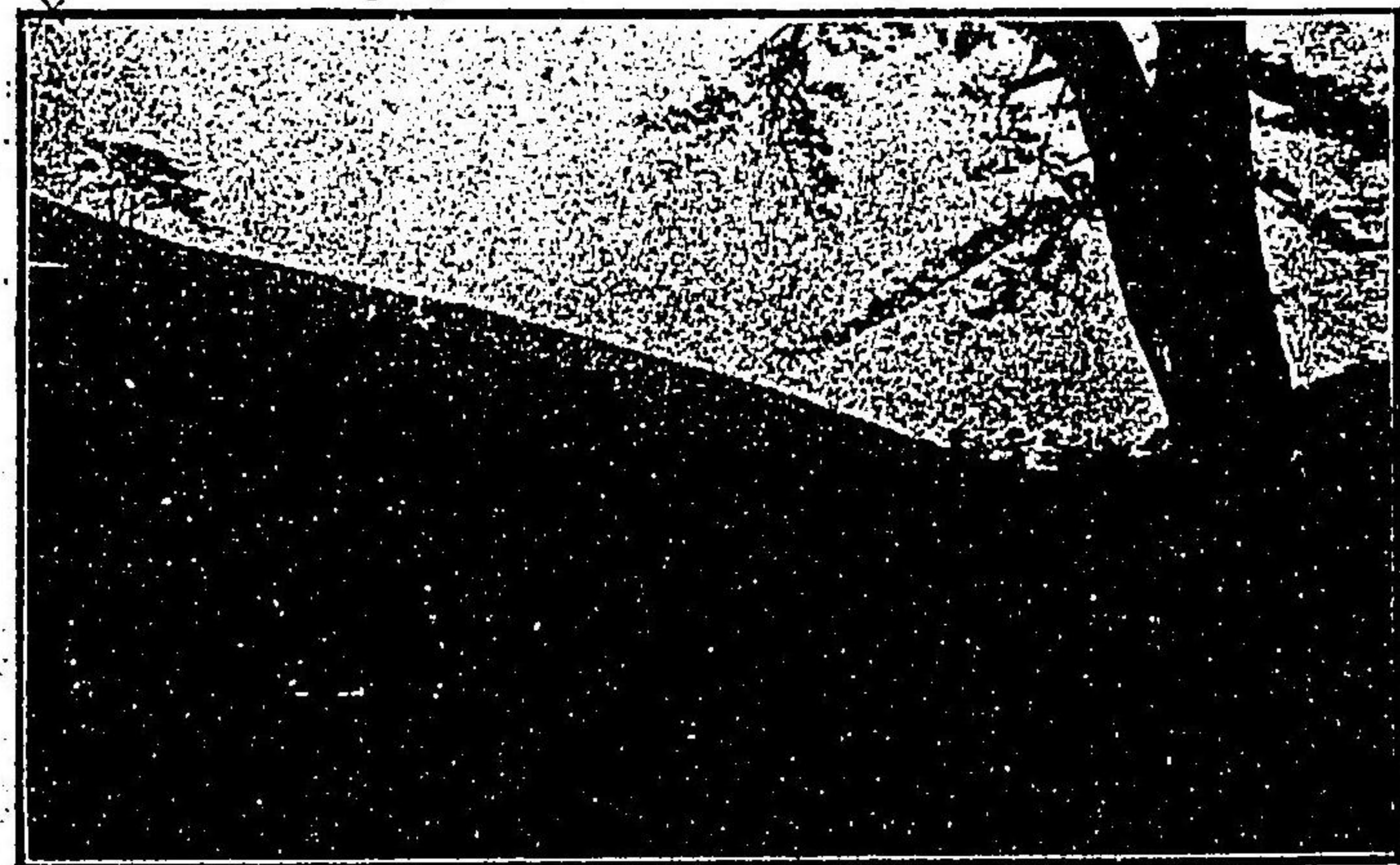


春の日の丸窓

に臨み、微風水を吹いて漣漪を織り、日色笑るが如く塔に反照して塔の

の鼓一たび鳴りて七堂伽藍の屋瓦盡く震ひ  
しかを、金剛山千窟城の門柱あり、曾て忠  
臣を寒嵐深きところに護りしものは是か、  
佛殿には薬師如来を安置す、乾清の維摩、  
文珠の像あり、制作凡にあらざるとぞ、殿  
の前に古松あり高さ數丈、清陰を百歩の  
地に散布す、礼して華の松といふ、十數歩  
を隔て、五重の寶塔立たり、晚翠と相映帶  
して綺麗なること繪の如く、下は猿澤の池

楣扉に奇紋を浮動す、繪といへども這般の景は描き難からん、  
奈良博物館は興福寺趾の前數町、青蕪烟らんとするの中に在りて、  
洋風の館なり、博物館を看て後、巡覽の路は  
自づから東大寺に向ふ、一路の長松、東に走り  
て東大寺の樓門の下に通ず、南に三千里外の  
征客の泣いて故郷の月を歌ひし三笠の山あり、  
高うして烟霞を帯ぶ、東大寺の樓門には、仁  
王の巨像あり、人はいするあり、氣魄を動かさざるものなし、



三笠山

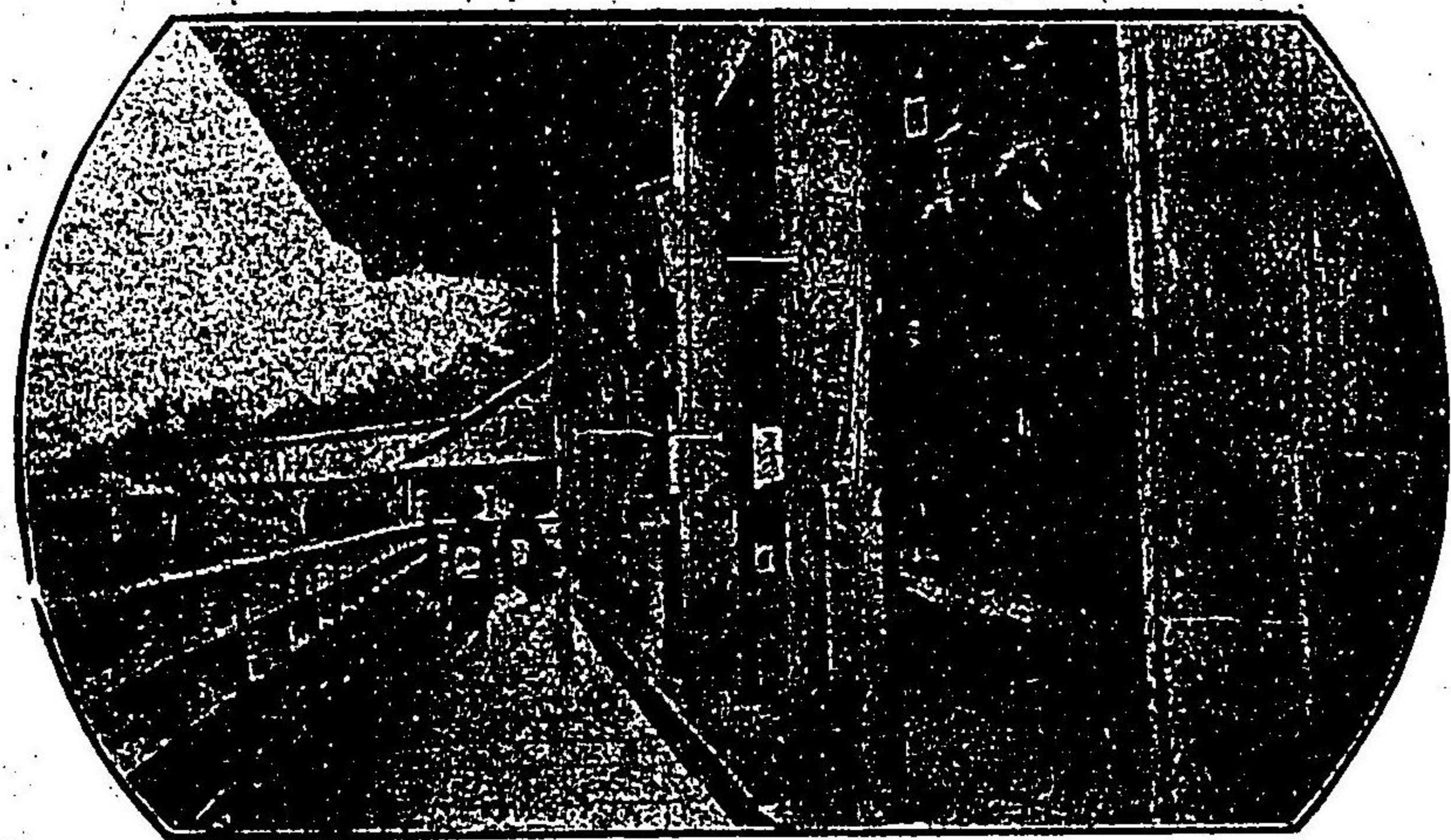
聖武帝の僧行基に勅して天下に勸  
垂れ、内に金銅盧遮那佛の人を壓して坐  
入れば、法幔左右に  
の陳和卿の作るど  
奇愛すべし、謂ふ宋  
古鋼の燈籠あり、諸  
殿堂に至る、堂前に  
り、巍々十五丈の大  
入れば石缸直ちに走  
梧なるに驚く、門を  
に、先づこの雄偉槐



進して鑄ること八回、三年を閲して僅かに成る、實に熟銅七十萬斤、白錫一萬斤、練金一萬四千兩、銅五萬八千兩を費し、二萬七千餘斛の炭火を燃して作るどころといふ、其の壯大なる知るべきなり、其の後兵燹に罹りて佛首熔爛したりしを、近古に至り、首のみを改鑄して莊嚴なる舊觀に復す、傘を披ひて鼻孔の中に入るも、些しの支吾もなしといふは、唯だ其の大なるを假喩したるに過ぎざれども、掌上には十數人を載せて尙ほ餘地ありとは真ことなり、此くの如く佛の大いに、佛殿の高きにより、佛の前に置ける青銅の蓮葉の、直徑三尺數寸なるものも、尋常一様の池に生ゆる荷の葉ほどの觀をなす、案内者の長竿にて計り示すに正しく三尺數寸あり、その殿の圓柱また大にして、三抱に幾し、佛の前に什物を安置せり、聖武帝の宸額あり、金光明四天王護國之寺の十個大字なり、憶ふ大佛の開眼の時、千幡は霞の如く萬僧潮の如く、香爐の烟は散じて四山の雲となり、讀經の聲は鐘鼓の聲と相和して、人天隨喜の涙は凝りて雨となりしかを、東大寺の大佛殿より左りして石磴を登れば鐘樓あり、松和幽邃のところを渡る、仰いで二月堂を望めば蒼畦に倚りて空外に懸るが如し、危磴斜

めに走りて直ちに堂に通ず、堂は絹索院と稱して、天平勝寶の年實忠和尚の創立するところ、難波の浦より獲たる觀音を安置すといふ、風堂外の千松の上を度れば、鈴鐸自づから鏘々然たり、境甚だ幽邃なり、欄干に凭つて下瞰すれば、九衢の塔觀歷々として指點の中に在り、更に三月堂あり、不定絹索觀音を安置し、別に地藏菩薩、不動明王の像を置く、光明皇后の作るどころといふ、石樹落莫、これを二月堂に比するに一段の幽趣あり、松林の缺くるところ丹廂を露出す、これ手向山神社、廟邊に老楓多し、秋晚林燃えんとす、小池あり落泉鳴つて琴筑の如し、石橋を度り華表を過れば、一路の青松、自づから人を嫩草山の麓に導き、終に春日神社に至る、嫩草の山は、其の姿溫和にして、笠を覆たるが如く、満山皆な短草、巔に青松五六株あり、この山に對すれば、人は睡氣を催うさんとす、誠にをかしく優しき容なり、春日和煦、草烟の如きの時、女兒の麗衣して翠を拾ふの様を憶へば空さに一幅の繪の如どかるべし、山に對して簇々數十家あり、奈良人形、鹿の角細工、筆墨を賣る、更に三條小鍛冶宗近の





堂月二

玉蟾と彫れるもの尤も希品、凡そ廻廊に懸けたる古燈籠は都て九百八十八個ありとぞ、其の祠廟の邊に立てる石燈籠一千七百八十九基といふ、正廟の南數町にして若宮あり、天押雲命を祀る、若宮の前に巫祝の家あり、几帳の下、巫女數人あり、齡十五六、白絹衣を着け、緋袴を穿ち、粉黛して髪を垂れ、容儀甚だ端麗なり、傍らに琴箏を安排し、几に兜つて字を讀む、

春日野の平蕪、草色煙の如く、中に麋鹿の優游自如するあり、雪消澤、野守池皆なこの間に在り、奈良町の北、大宇般若寺村に般若寺あり、元弘の年、大塔宮護良親王の難を大般若經の唐櫃の中に避け、今尚ほ唐櫃を存

末葉と號せる家ありて、刀劔、仕込杖、小刀、剪刀の類を鬻ぐ、其の隣家に、又た宗近の末葉と名のれる刀劔座あり、曉舌の店、客を見て抵掌して歡笑し、刀を抜きて其の烈霜の如き色を誇り示し、強てこれを買はしむ、凡そ此の舖に入りて善く一物をも購なひ還へらざるの人あらば、其の人は誠に智者なり、幾人かこの店人の口舌より脱し得るものぞ、春日神社の社背に、會て宮禁たりし時の御溝の跡あり、一橋を架す、橋畔の茶亭に名物の燧石焼なるものを買ふ、唯だ小餅を炙りしものゝみ、老松古柏の中を行けば、幾群の麋鹿、人を見て走り來り、首を揺かして揮するものゝ如く、食餌を乞ふ、食餌を賣るの家あり、餌は石花菜の團子なり、これを掌上に載せて食すれば、麋鹿少しも怖れず、馴れ近いて餘滓をも剩さず、

春日神社の廟宇、華麗なること復た言ふを須ぬず、神護景雲二年の創建にして、正殿四宇あり、一は武甕槌命、一は經津主命、一は天兒屋命、一は姫神を祀る、官幣大社の一なり、畫の如き春日野の中に在りて、樓門は南嚮す、百五間の廻廊、左右に度り、幾多の祠宇は境内に散在す、廻廊に懸るところの古鐵燈籠、鏽華花の如く古色掬すべし、中に就て金鳥と



すといふ、其の他寺の古佛あるもの、山の逸史あるもの、數ふるに違わらず、而も盡くこれを記さんには百紙を重ねるもまた足らず、奈良の記終る、

西京

山紫水明、人をして淹留數日なるも尙ほ戀々として歸去來を歌はざらしむるものは西の都の風物なり、今其の勝概を記すに先だちて、先づ余が明治二十六年の春遊びたりし時の紀行『雪の西京』を掲げて、而る後、徐ろに其の佳麗なる山川を讀者に紹介すべし、

雪の西京

雲を車となし、風を馬となして、毎々夢に舊部の地に行きて、其山に敖嘯し、其の水に招搖し、紫なるもの高く、明なるもの長きところに神遊するもの茲に年あり、今茲一月二十五日、事ありて京都に赴く、乃ち別に社の先輩同人に謀りて數日の閑を乞ひ、宿昔の懐を遂げつ、以て其の山川佳麗の地に遊ぶとを得たるを欣舞せり、

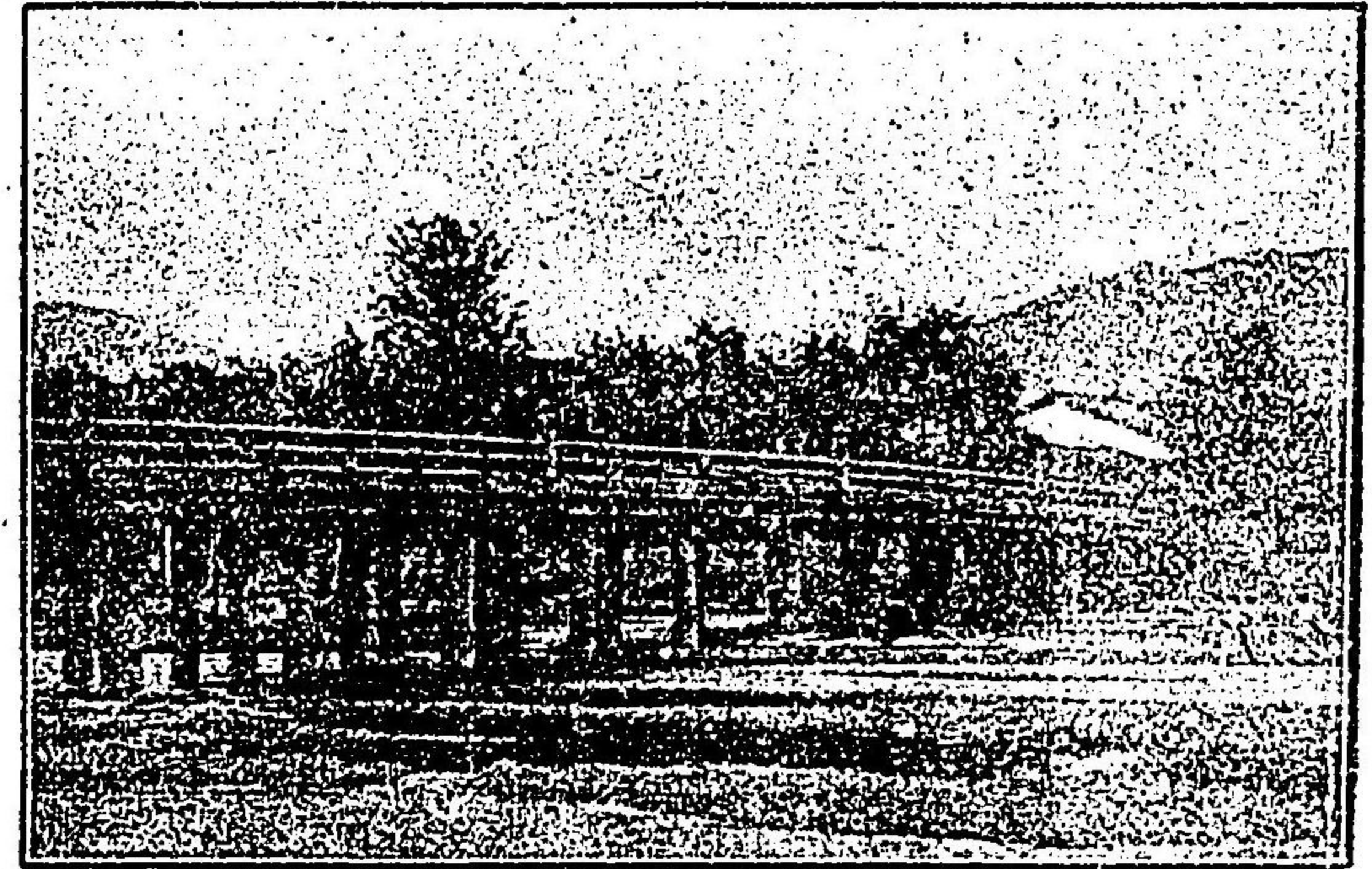
宵に行李を理め、初更に發して汽車に上り、午夜函嶺の故關を度る、雪光月色雨つながら、銀の如く、夜山の趣、殊に寂寞なるを覺ゆ、更に御殿場の\*望む、月は徘徊し、雲は搖曳し、薄むらさきの岳影飛ばんとす、高崇なること甚だし、静岡にして天明、名古屋にして亭午、其間の山光水色頗る人を怡ばしむるものあり、友人鐵城氏の名古屋に在るを懐ひて、車を下り之を訪ふ、下午鐵城氏予を旗亭に招飲す、醉中に別を叙し夢中に手を分ちて、再び車に上り、幾個の長亭短亭を度りて夜十時終に西京に入る、風は急にして微霞を飛ばせり、尾州の醺始て醒め乃ち水を思ふ、車を驅り旅館の門を敲く、管頭容れず、主人謝す、皆な曰く、旅客填咽



北野天士の雪、高きと千丈なるを天半に



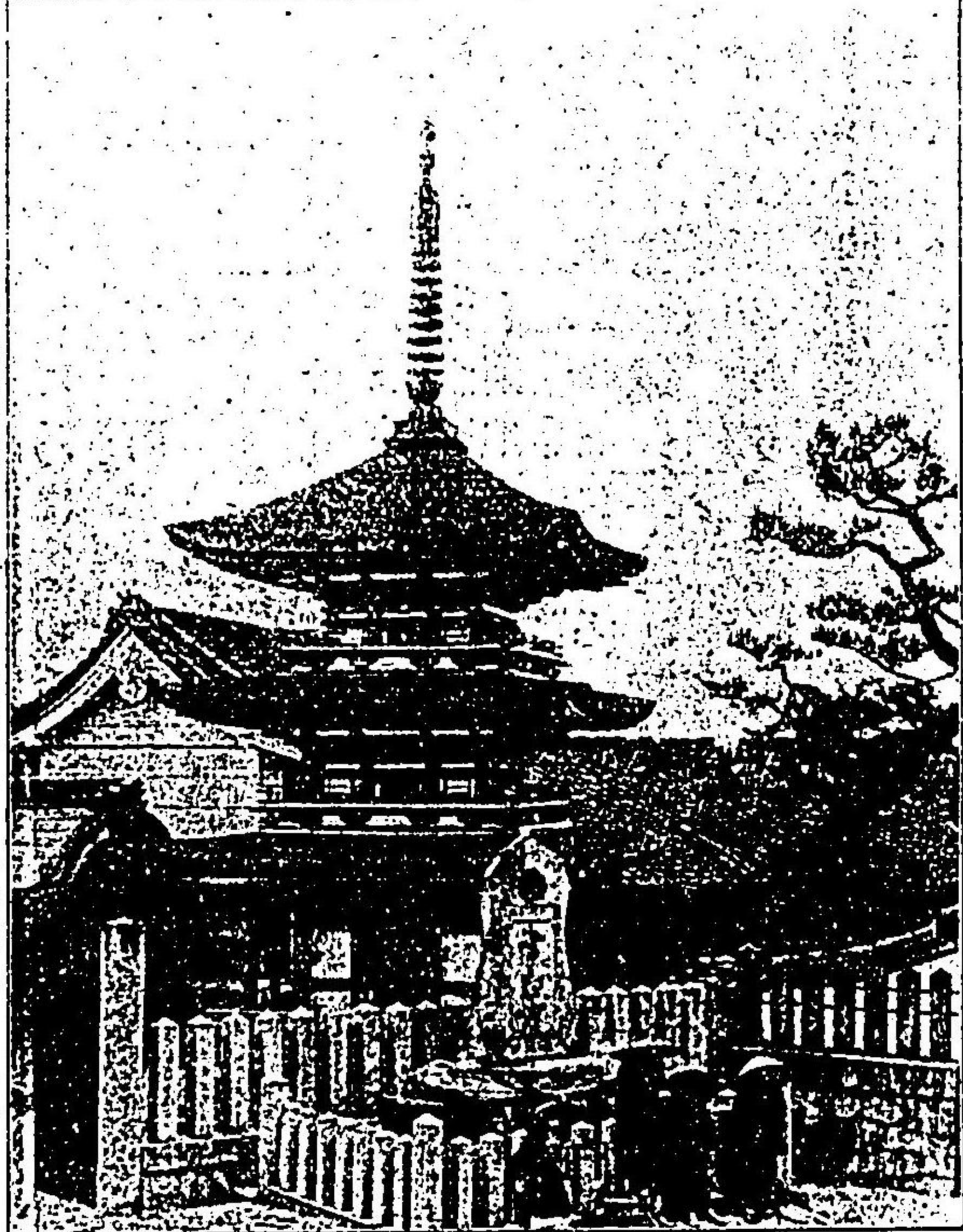
一の閑室あるなしと、蓋し東本願寺前門主の葬に會せんとする者の爲に、占有せられ居るなり、夜は深し人は静かなり、起す、車夫は早くも予が京人の所謂「お登りさん」なるを視て、奇貨居くべしとなし、行燈の影豆の如き一小旅館に誘なうて、錢を乞ふと頗る多し、既に人りて飯を命ずれば、粗糲にして口に上すに勝えず、寢具も亦た汚樓は鳴水に沈み、東山の翠微は近く欄干を照す、



橋大條三都京

日落つれば山漸く紫に、清暉樓主人に介す、主人即ち余を鳴涯の華庵主を訪ひ、語るに、曩昔の事を以てす、去て先づ三本木の松皇して去る、眠れば、困夢頻りに來る、黎明に起き倉成りがたし、僅かに眠れれば、余冷やかとすれば、鉄の如く、眠き、弓臥して眠らん、勉強して寢に就せんとする者の爲に、

水漸く明かに、詩興を人の懷中に推す、山陽氏の故莊は近く樓の北隣に在り、松菊氏の舊樓、彼の葛籠の中に藏れて以て刺客の匕首を脱れたるどころは、樓の西隣に在り、雪白比良山の一角は、遙かに如意峯の缺くところ、露はれて、曾て詩人の歌ひつる春風江州に入るの關をなしぬ、山全く紫に、水全く明かなる黄昏の時に至れば、鳴の水聲漸く高く、小千鳥の啼く音、聴きて漸く遠く、華胥の人安車を以て予を迎へ去る、欠伸して起せば、東窓既に白し、戸を推せば、東山の諸峯皆な淡粧し、比良峰の一角、昨に比すれば雪更に多し、其人を玉にし、其の布を雪にする、鴨の水は、曉來み



塔重三安子都京



どり深きと一尺、簷影を其の清淺のところに鉸めて、倒涵せる翠微の色  
 と相合し、渾沌として一様の碧を成す、時に南禪寺の華鯨吼ゆると數聲  
 千鳥驚き起ちて亂れ啼き、倒景皆な動く、  
 前數日より、温静優雅なる京都の九衢は、常に紅塵を起せり、中に就き  
 て東の本願寺邊最も多し、而かも三樹里の一區は宛も別寰のごとく、人  
 語稀少水聲獨り樓に滿つ、予や居を多閑地に占むるといへども大忙事の  
 責を負ふ、數日事に之れに従ひ終に三十日に至る、此宵始めて沐浴す、  
 煩累全く解脱し、體胖に心寛く、髪を散じて風に駕し、遠く青天に沖り  
 雙手に雲を披きて、日月を觀るの想ひあり、飯後更に茗を煎て悠然とし  
 て夜山に對し、夜闌に至り、以て明日遊ぶところの山川寺社のことを憶  
 ひ、身は雪白の蒲團の上に横ふれども、神は既に往けり、  
 黎明夢覺むれば、枕頭の青紗燈、火小なること豆のごとし、起て火桶の  
 残灰を撥し、微火の殘星のごときを吹きて暖を取る、寒むきこと甚し、  
 朝餐既に終る頃はひ、雪霏々として下り、須臾にして地に積むこと寸許  
 主人曰ふ生憎の雪なる哉と、予や遊心禁すべからず、箭の弦より發した  
 るが如し、頭を掉うて曰ふ好哉の雪と、門を出れば車夫既に俟つこと多

時、甍を被り寒を怕れてさながら狸怖ごとし、直ちに嵐山に向ふて走る  
 行く、二條の城邊を過ぐ、時に風吹き起りて雪は回舞して下る、城上  
 松籟あり、城中笳聲あり、悵然として當年の事を憶ふ、既にして竹樹一  
 路、雪深くして車輪に聲なし、竹聲水聲、予を迎へ且つ送る、遙かに亂  
 松の亭々たるるところ、半ば雪に掩はれたる高き寺門を望む、曰ふ是れ太  
 秦の古寺、  
 雪は一千五百年古寺の碧瓦を掩ふ、仰ぎ視れば、扉の龍、楹の鳳、人巧  
 以外別に雨鏤霜刻の痕あり、落々たる長松の下に車を捨て、獨り堂に  
 上れば、鶴のごとき一癩僧、肅然として堂を守る、  
 僧語るらく、此寺推古帝の御宇、聖德太子其侍臣秦川勝に命じて創造す  
 るところ、初め寺を名けて蜂岡といふ、多くの古佛像を安置す、觀音堂  
 に在ますところの觀世音佛は、帝の御宇百濟王の貢獻せし物、彌像勒は  
 新羅王より貢獻せし者、寺を隔つること西のかた一町許のところ、桂宮  
 院安置するところの二臂如意輪佛は、則ち是れ聖德太子の刀を執りて親  
 から刻したまひしもの、阿彌陀佛は、隋の煬帝が天皇に獻じたるものな  
 りと



僧に乞ふて堂内安置するところの佛像を観る、遽然として深く垂れたる

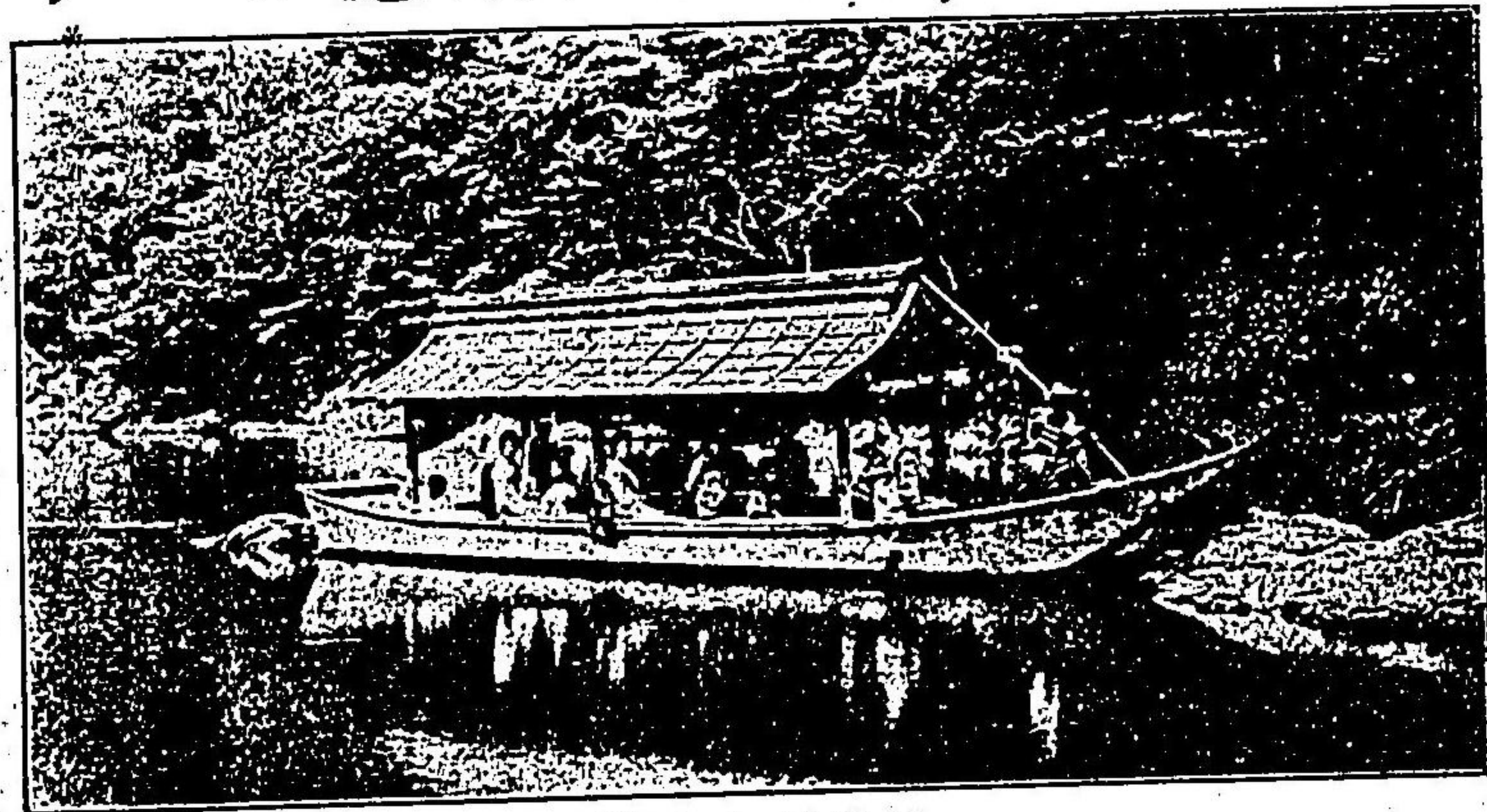


城 條 二

宮院の屋を望み、走りて嵐山に向ふ、村を過ぎること幾個、清瀬傍に流

帷帳を掲げて進めば、隨風の雪はさながら白蛾のごとく飛んで佛前の燈を吹き、鈴鐸鏘然として自から鳴る、壁間の畫、龕前の像、火を以て之を照さざるも、皆な楹前の雪によりて、分明に看取するを得、中に就きて龕を守るところの四天王、十二神皆な躍如たり、舞雪時に來りて襟に入る、肅然として氣の自から屏くを覺えざるなり、凡そ堂中の物、古色の人顔を照らさるはなし、僧に謝して堂を下れば雪既に深し、松や楓や、梢に寒鴉あり、蔭に凍雀あり、梵唄微妙かに度りて境更に寂寞、車に上りて寺門を出で、深塙のうちに桂

れて色は藍のごとし、篋笠の人、時に後に棹し、歌うて且つ流を下る、水は烟を生じ山は雲を吐く、近山、遠水、低林、遙村、看るとして詩にあらざるはなし、更にこの詩に千百の詩を添うの雪あり、千百の詩中に人あり、遠く京より筆を載せて來る、而かも亦たこの詩中に同化せられて、此の景を叙し此境を描くこと能はず、曾て詩人が江上の漁翁の詩を作らざるを憫みしを笑はんと欲するなり、嵐山は既に近し、まかれども飛雪に隔てられて山影淡きと烟のごとし、時に雪をすく急なり、一路の長松、颯々として宿雪を震ひ落し、鳴りて人を逐ふ、その地に落つるもの、圓々として走る、渡月橋のはどり



遊舟の川津保

に至り乃ち車を停めて、車夫を橋邊の旗亭に俟しめ、予獨り重裘を被りて橋を度り以て雪の奇を観る、橋下、奔流、箭のごとし、水底の石、玉のごときもの皆な活



く、仰ぎて嵐山を望めば、



香西の古城址、の勝ありと、

大堰川

低雲の徂くと甚だ急なるが爲めに、寒嵐頽れ  
飛び、山影奔りて儼れんとす、  
大堰の川、嵐の山、曾て幾たびか詩人の品題  
を歴て、其美を天下に擅にす、而かも多くは  
陽春三四月の美を歌はるゝのみ、風流縁あり  
天翁今まこの遠來の客の爲めに、故らに六花  
を降して、以て古人の多く歌はざるところの  
雪の奇を看せしむ、予や渡月の橋上に立もの  
之を久らす、雪ますく急にして四望白模糊  
たり、雲飛び嵐碎けて風に隨ふて上下し、無  
頼の雪は千萬片の珠璣となりて、帽や裘や皆  
な白盡す、回顧すれば橋影看すく消えんと  
し、身は宛も断虹のうへを渡るがごとし、聞  
く、この川に千鳥が淵、保津の急瀬の勝あり  
山に戸難瀬の流、夢窓國師座禪石、大悲閣、  
雪高く風急なるを以て往き觀ると能はず、

遙かに其の在るところを想ひ、徘徊觀望して去るに忍びず忽ち後に喚ぶ  
ものあり、願れば人あり青箆を頭より被り、手を掲げて予を麾く、彼の  
人、予を見て被り居たる青箆を脱し、慇懃に辭を呈して曰ふ、旗亭の主  
人、酒を温めて貴客を俟つと久し、朝來の風雪、恐くは貴客路に凍えん、  
雪を冑して行くの苦は、火を擁し、酒を酌み、以て雪を弄ぶの娛しきに  
如かず、敵亭の一室、山に對し水に枕み、坐ながら雪の奇を看るに適す  
るの所あり、主人既に貴客の爲めに掃清して、箆を掲げ屏を退け、行爐  
机卓を安排せり、今ま主人の命を啣みて、來りて貴客を迎ふと、予は其  
の何の故なるを知らず、言ふがまゝに導かれて旗亭に至る、旗亭は渡月  
橋を距る數十武のところにて、所謂三軒屋と稱するもの是  
亭に入れば車夫は既に酒を被りて顔は暎より紅し、是に於て予は車夫に  
賣られたりと猜せり、車夫は予を以て所謂「お登りさん」となし、大に  
「剝」がんと謀りしなり、お登りさんとは東京の人の田舎漢といふが如く、  
剝ぐとは、囊を傾け盡さしむるの謂なるなり、予や既に敵地に入れり、  
潤歩して亭に上る、火桶に紅炭あり、茶瓶に聲あり、座に就けば酒陶羹  
炙次第に進む、酒は芳烈に肴は新鮮なり、風興しきりに揚る



欄に凭りて看望すれば嵐山は簷を壓せり、その雪急に雲走るの時に當りては、山は鳴號しつゝ、起きて復た仆る、さながら巨魔王がこの雲物の奇を観て啞然として絶倒するもの、如し、主人傍に去り、予が爲めに某の山、某の水、某の里を指點し、説くと甚だ詳かなり、更に予が爲に其の保津の急瀬の勝を説て曰く、保津の川、丹波の龜山より發し、水奇巖に觸れて下る、流れて渦となり停りて潭となり懸けて泉となり激して湍となる、舟子手に一竿を持ち、舳に立て以て舟を行る、舟の下るや箭よりも疾し、兩岸の景物一瞬にして百變す、初夏新緑の候、杜鵑花溪を掩ふ、尤も此の水を下るに奇なりと、飽まで山水を見て、乃ち旗亭を出づ、門を出づれば、漫々一白、靴を脱せんとす、車を走せて二尊院の邊を過ぎり、



清水堂



扉を叩く、應ずるものなし、定家卿の時雨の亭、終りに看ることを得ず、更に院下の竹林盡くるところを過ぎりて、去來の落柿舎を訪ふ、雪は蓬門を掩ふて扉は深く開せり、門を敲けば舎を守るもの應じて半扉を開き、面を露はし問ふて曰く、貴客は遠く京より來りしものかど、蓋し昨、友の簡して余の來り訪ふとを報せるなり、刺を通じて舎に入れば、舍主歡ふと甚し、導きて茅屋松椽の一室に誘ふ、庭除の竹樹皆な幽趣あり、「柿主や梢は近き嵐山」の句を刻みたる一片の石は、静かに其蔭に立

院 恩 智  
 然として語なし、  
 黙の静、境の静と  
 冥契す、平常聴く  
 に聲なき落雪の音  
 も此際分明に聴取  
 するを得、是に於  
 て謝して門を出で、



大澤の池の邊を過ぎり、終に大覺寺を訪ふ、此地舊嵯峨帝の常に燕居し給ひしところにして、嵯峨院と稱せしもの則ち是なり、寺に未だ老ひざるの松なし、落々として靜かに佛閣を護る、皆な是れ曾つて御覽を歴

たるもの、更に清凉寺を訪ふ、嵯峨の釋迦堂と呼びて、日本無二の釋迦如來の像を安置するところ、毘首竭摩天が赤梅檀の木に刻したるものといふ、堂の東に栖霞寺なるものあり、嵯峨帝の皇子融公の山莊、栖霞館たりしところ、共に嵯峨離宮の舊趾、一樹一草皆な是れ甘棠なり、寺の樓門の傍に二輪の塔あり、金碧剝落して古雅老蒼の趣を極む、此の時に當りて飛雪尤も急に、寺門のうち一白、寸青なし、長松時に風に鳴りて虬髯を掀げ、晚翠の色、太だ鮮明なるを露はす、猿飛んで一枝蒼し峰の松の趣、殆ど是なり、會て聞く、寺傍の竹林のうち小楠公及び足利義詮の墓ありと、門前の茶亭に就きて其の在るところを問訊す、茶亭の婦、路を教うると叮嚀なり、車を舍て歩すると數十武、一竹林あり、琅玕憂々として鳴る、林下に一石碑あり、雪を掃ふて之を讀み、乃ち小楠公の墓の在るところを知

り、竹を排して進む、隕雪帽に觸れ、散じて衣襟に入る、奇寒甚し、路窮りて二個の石塔を見る



右なるものは小楠公、左なるものは足利義詮、説くものあり、小楠公の四條畷に陣歿するや、默庵禪師な公の墓を看るに、高さ七尺ばかり、地に方石二尺ばかりのものを重ね、上に圓石を加へ、圓石の上更に方石を置き、上に二小圓石を積む、石の



四面皆な梵字を刻せり、字畫模糊、指を以て掌に描くも、其の字體を得ず、五百年來風飢し雪虐し、苔や蝕盡す、雪を掃ふて細かに見れば、蟻篆狼藉して、刻字の凹めるところ、乾蝸牛あり、死蟬皮あり、更に義詮の墓を看れば、地に一方石を置き、上に交る、屋形を成せる石と方石とを加へ、頂に至りて漸く小なり、高さ七尺有餘、而して其石皆な缺損して完形あるなし、石片四もに散す、蓋し行客往々石を以て墓を毀ち、唾して以て快を取るものあればなり、小楠公の墓には香華常に新たに其の寂寞を守る、千歳の恩讎、其の壁域を隣りて、幾畝の竹林中に在り、黄壤の下、重泉のはどり、兩雄其れ手を握りて歡笑するか、抑も亦た臂を載して漫罵するか、吊客懐古の情、此に於て大に起り、立ち盡すもの之を久うし、雪の帽廂に積むと一寸なるを覺えざりき、低徊願望するもの之を久うして終に竹林を出で、車に上りて更に廣澤の池畔を走らす、昔より月を看るに佳し、若し夫れ天心に玉蟾懸りて、影は漣漪に落ちて十里蒼茫、遍照寺の門前、木魚の月明に聲り、坐禪石のはどり桂花散來りて清僧趺坐のところを掩ふの時を思へば、悠然として

神往かんとす、今や乃ち一白漫漫、對岸の寺影塔影澹として消えんとし、其うち棲鳩の時に亂鳴するを聞くのみ、一路斜に池畔を走りて御室の仁和寺門前に通す、車を停めて入らんと欲すれば樓門深く鎖せり、小門より入れば、佛堂層塔瑩然として廣寒宮に入るの想あり、數十株の老櫻、枝々の雪、花のごとし、寺門を出で、遙かに三箇相雙べる平阜を望んで車を走らす、皆な寒嵐を帯びて異態あり、車夫指して曰ふ、雙が岡是なりと、是れ會て兼好法師棲遲のこの山の也、行く、一寺院の門前を過ぎる、車夫曰く等持院是なりと、是れ會て壯士が足利三代の木主を誦りしどころの寺か、幾度か風雪のうち去路を失して、終に北野の天満宮に賽す、松の翠、廟の丹碧、雪と相映帶す、莊麗なると甚し、終に金閣寺に詣る、是れ會て足利義滿の作るところ後ち捨て、寺となし鹿苑寺と號するもの是なり、金閣は苑の中央に在りて三層の樓をなす、一層を法水院といひ、二層を潮音洞といひ、三層を究竟頂といふ、欄や壁や天井や、今ま猶ほ泥金の痕を留む、池あり鏡のごとし鏡湖といふ、石あり水上に在り、游龜の落花を吹きて或は出で或は没するがごとし、有名なる夕佳亭は小丘の上に在り、亭の床の柱に



は周圍八寸許の南天燭樹を用ゐ、更に胡枝花の枝を以て柵を編む、甚は  
 だ雅致あり、寺僧予が爲に、庭中の勝を指示し、終にその茶亭に誘ふて、  
 一碗の茶を進め、茶  
 を媒するに菓子數枚  
 を以てす、茶を啜り  
 て静坐すれば殆ど機  
 を忘れんとす、風時  
 に竹樹を搖かし、隕  
 雪砌に散して竹樹更  
 に清新、  
 紫野の大徳寺を過ぎ  
 りて、眞珠庵に一休  
 禪師の高逸を憶ひ、  
 更に糺の森を過りて、  
 加茂御祖神社に詣で神廟の崇高莊嚴なるを拜し、巴戟天神社のところ  
 至りて、不可思議なる土地の化養が、栽舎てたる萬の樹木を次第に化



寺開金

して、皆な巴戟天に變成せしむとの車夫の説話を聴き、眼のわたり一茶



を踏ぬて、以て山靈の背上に炙する大文字、其の壯觀は久しく耳にして

大徳寺

樹の葉の、刺稜漸く疎く、將に巴戟天の  
 葉に化せんとするを看、風の爲めに妬ま  
 れて連理の枝を裂かれたる夫婦樹を看、  
 終に加茂の水を度りて清暉樓に歸る、  
 樓に歸りし時正に黄昏、蒲團着て寝たる  
 姿と歌はれし東山は、かのこまだらに雪  
 を被りて、山色漸く紫ならんとす、會ま  
 如意峰の一角に、彷彿として一白大字を  
 見る、紫漸く濃かにして大字漸く分明、  
 樓主指して曰く是れ大文字の痕に朝來の  
 雪の埋りしなりと、  
 白雨一過、鴨水の涼棚風涼やかなると秋  
 のごとき時、天魔を倩ひ來りて朱符を九  
 天の上に貼するが如く、黒山を度り昏谷



未だ睹るに及ばざりしが、雪や意あり、我が爲に、その焼痕のところを埋めて、一白大字を描き出し、更に寒嵐を添え紫緞を加えて、以て遠來の客に看せしむ

この夜、曠昔に比すれば河水の聲高し、千鳥の啼く音も亦た多し、眠就りがたく、就れば則ち夢連りに來る、早旦にして起きて庭除の雪を踏み、樓後の扉を推して鳴の河原に出づれば、残星の影水に碎け、東山の紫色凝りて流れず、既にして星消え紫散じ、如意峰一角の雪微紅あり、久うして瑪瑙の色をなす、遊意勃然として起る、

朝食を終して車を命ず、約して曰く北は問の名勝のところ、一々車を停めよと、路上の雪は結晶して碎銀のごとく、



北風獵々として吹く寒むきと甚し、之を掬ふに丸を成さず、之を踏

るまで、其

祠に至る

堂角六都京

銀閣寺より南は伏見の

むに履齒に留らず、之を吹けば烟の如く散ず、一路逶迤として斜に銀閣寺の門前に通ず、車を捨て門に入れば竹樹頗る幽静なり、堂に登り僧に乞ふて閣を看んとを乞ふ、一幢あり趨りて手を迎へ、導きて各室を看せしめ、東求堂に至る、足利義政の持佛堂にして、義政の木主及び觀世音の像を安ず、義政の像は烏巾を戴き道服して手を拱す、顔色黝黒、眼睛炯々として異光あり、像のあるところ帳幔深く垂れ、上邊に同仁齋の三字を書せる匾額を掲ぐ、

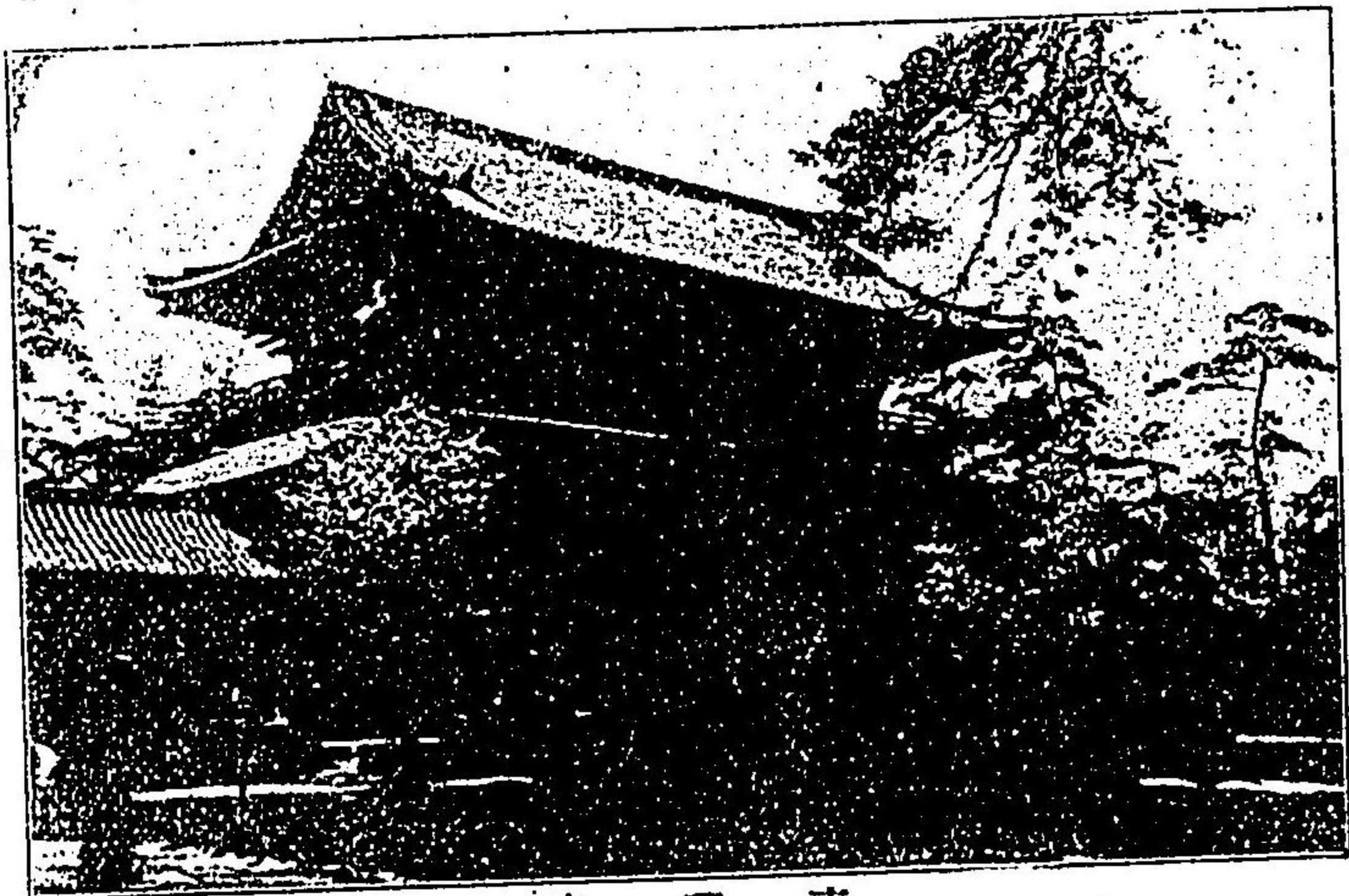
之を過ぎて、履を穿ちて庭に下り、所謂銀閣に至る、閣は二層をなし、下を湖音閣といひ上を心空殿といふ、殿に登りて泉石の甚だ奇なるを下瞰し、更に下りて泉石の間を行き、石橋を度り、奇岩に踞し以て遊目す、僮指して説くと甚だ詳かなり、曰く千代の棋、曰く洗月泉、曰く臥雲橋、曰く迎仙橋、曰く月待山、

終に導て茶室に入る、四疊半茶室の嚆矢といふ、僮、茶を捧げて來り侑む、銀閣、壁間、楹上、今又一粉銀の痕を留めず、唯昨來の雪ありて之を淡粧濃抹するが爲めに、今日始めて眞の銀閣なるものを看たり、真如堂のはどりに車を停めて白雪青松を看、更に竹を穿ち橋を度りて永



観堂に赴かんとし遙かに低林の甚だ趣態あるを望む、車上に在りて地圖を按ずるに、乃ち此の邊の鹿が谷なるを知る、想ふに彼の林下は是れ俊寛僧都の山莊のどころなるなからんや、壁間の瓶子、座上の酒漉、檢非違使進み將軍笑ひしの所は是か、之を路傍の茶店の媼に聴く、俊寛の山莊の舊趾は呼で談合ヶ谷といふ、其の趾を尋ねれば唯だ平地の兩段を成すあるを見るのみといふ、  
 永観堂の門に入りて一池の水明淨のどころ橋あり、湖中の小嶼通じ、嶼上に佛宇あり、長松池を繞りて立つ、池を老龍といふ、  
 此の地晩秋に至れば髮影衣香を簇らすといふ、紅於の勝あるを以てなり、其の祖師堂の下に一株の老楓あり、岩垣楓といふ、曾て幾たびか詩人の品題を歴たるもの、古今集中、吾が宿の岩垣楓ちりぬべしといふは則ち是れ、  
 終に南隣の南禪寺を訪ふ、五鳳樓を過ぎれば老松深く鎖して世塵と隔離す、本堂は則ち龜山法皇の宸居の一部たりしとて、後ち喜捨して佛寺となしたるものと謂ふ、僧に乞ふて堂に登れば堂内石を登して鱗のごとし、清掃して一穢塵なし、四方十六柱を以て支へ、正面に佛龕を安置し

天井には蟠龍を畫けり、丹青剥落して雲紋鱗影澹として無からんとす、老僧の長裾を曳きて柱を環りて進退せる、旅客の帽を脱して龕に對して奉拜せる、香篆の烟、梵唄の聲、恍として身は千年の昔に在るが如し、會ま華鯨の吼あり、隱々として松樹深きところを出で、聲次第に堂に滿つ、堂中の鈴鐸皆な自から震ふ、龜山法皇の靈廟は堂後の山に在り、一磴老樹の間に通じて、露隕るを多し、山に神仙佳境、羊角嶺、\*



南禪寺

\* 駒が瀧の勝あり、雪高きを以て皆な看るに及ばず、徘徊願望之を久うして再び五鳳樓を出で智恩院の大伽藍を看、歩するごとに、さながら鶯兒の小々啼するがごとき妙音を發する廻廊を渡り、拔雀、八方睨の猫を觀て、更に茶亭に茶を啜る、



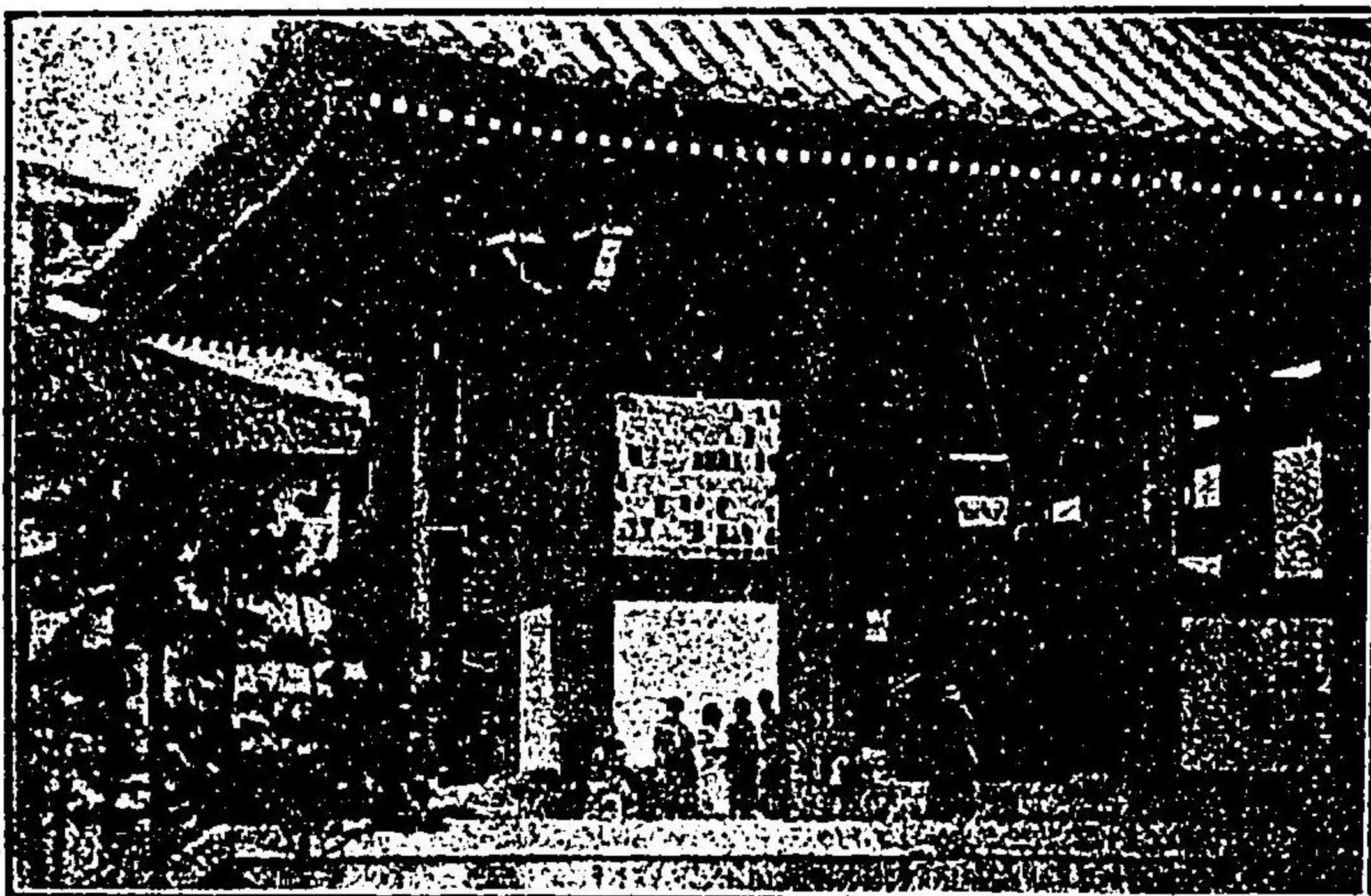
鐘は高さ一丈八尺有奇、直徑九尺、厚さ九寸有五分、寛永年間に鑄造するところ、

車を馳せて紛華の衢、狹斜の有とを過ぎり八阪神社に詣る、日暮れて櫻花紫に、幾隊の美人來りて神に養ひ、高く篝火を燒きて以て花神の眠を攪すの晩春の景物を想像し、更に八阪の塔に登り、以て極目すれば、九達の屋瓦鱗のごとく、晴雪は銀のごとく之を襯し、淡靄は青紗のごとくこれを抹す、靄の抹するところ、中に依稀として塔影あり樓影あり、風遠きより來りて塔影樓影皆な動く、動きて藏れ、藏れて露はる、蓋し淡靄の風に隨うて搖曳するあればなり、

清水寺に詣で臺に上りて近く寸馬豆人を下瞰し、更に遠く眼を放ちて河内の金剛山を天際に望む、爽快なると甚し、

大佛殿方廣寺に至り、其の門前に巨石を積みて封境を成すを觀る、豊公天下の力を極めて之れを作る、其の雄偉なる人をして驚嘆せしむ、往時其の佛殿樓門の壯麗なりしを想ふ可し、而かも一炬に烏有に歸し、秀頼之を再建せしが復た雷の震ふところとなりて炎上す誠に惜むべし、本堂の大佛高さ二三丈胸より上部の半面像なり、棧を踏みて背後より看れば、

ば、腹や、頭や、愕然として一物なし、爲めに一笑を催せり、堂前の左



鐘の佛大

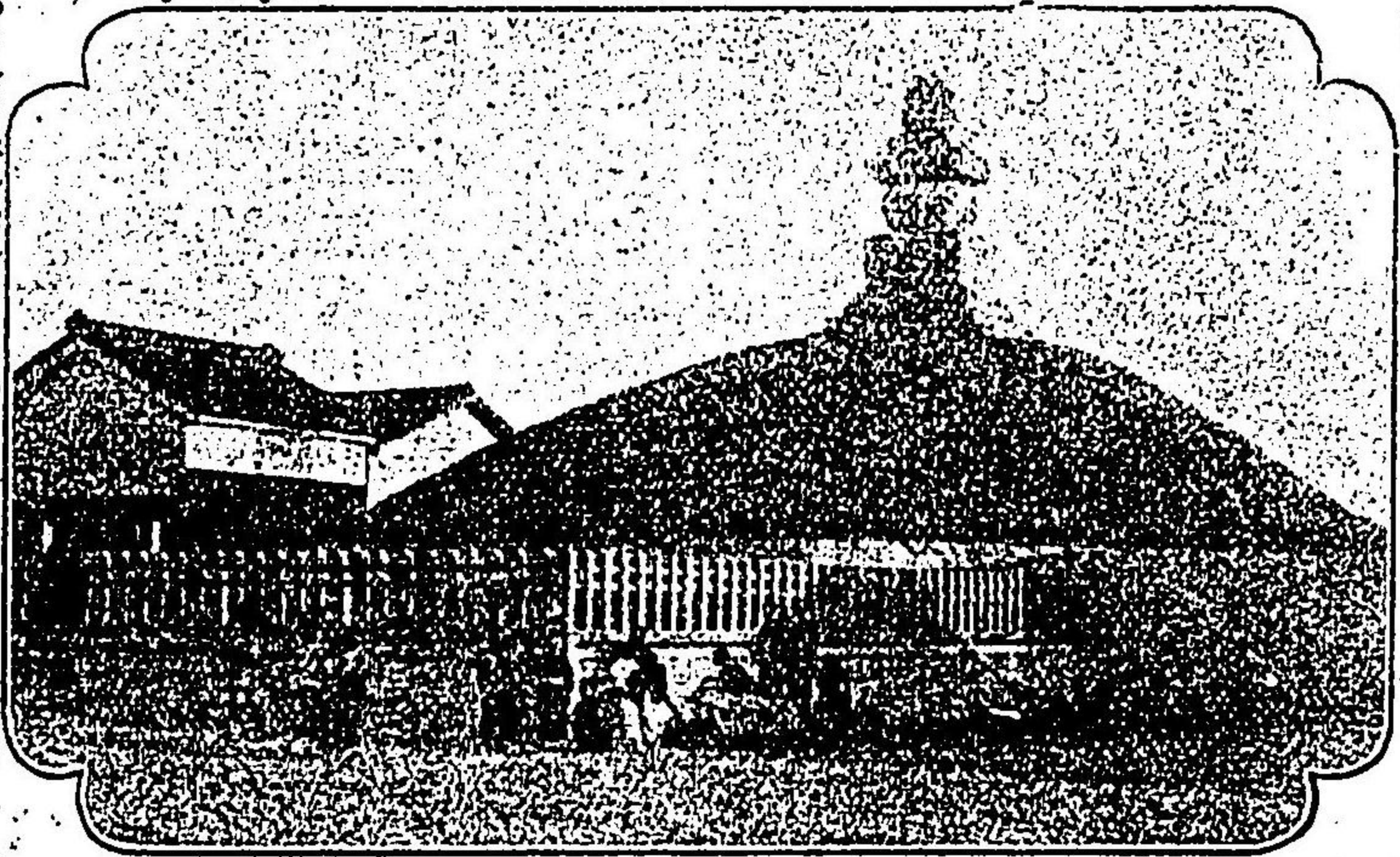
悪因縁かある、昔は彼の人の爲めに無名の罪を獲、而して今復た人の

一枚を取りてこれを鐘下の養錢箱の中に投ずれば、則ち三たびこの鐘を撞くとを得るなり、予乃ち銅錢一枚を懐に探りて函中に投じ、撞木を執りて之を振る、大さ梁の如し、揺かすもの再三、手を放せば撞木急下、鐘に中りて反撥し、予直ちに倒る、頭上の華鯨吼ゆると甚だ高し、耳を掩ふに違わらず、嗚呼この鐘、何の

銘を刻して以て家康を呪咀せしもの、彼の「國家安康」、「大小釋迦迭爲主伴」の物議を惹きたる大鐘は、靜かに鐘樓の上に懸りて人の敲くに任せたり、人、銅錢一枚を取りてこれを鐘下の養錢箱の中に投ずれば、則ち三たびこの鐘を撞くとを得るなり、予乃ち銅錢一枚を懐に探りて函中に投じ、撞木を執りて之を振る、大さ梁の如し、揺かすもの再三、手を放せば撞木急下、鐘に中りて反撥し、予直ちに倒る、頭上の華鯨吼ゆると甚だ高し、耳を掩ふに違わらず、嗚呼この鐘、何の

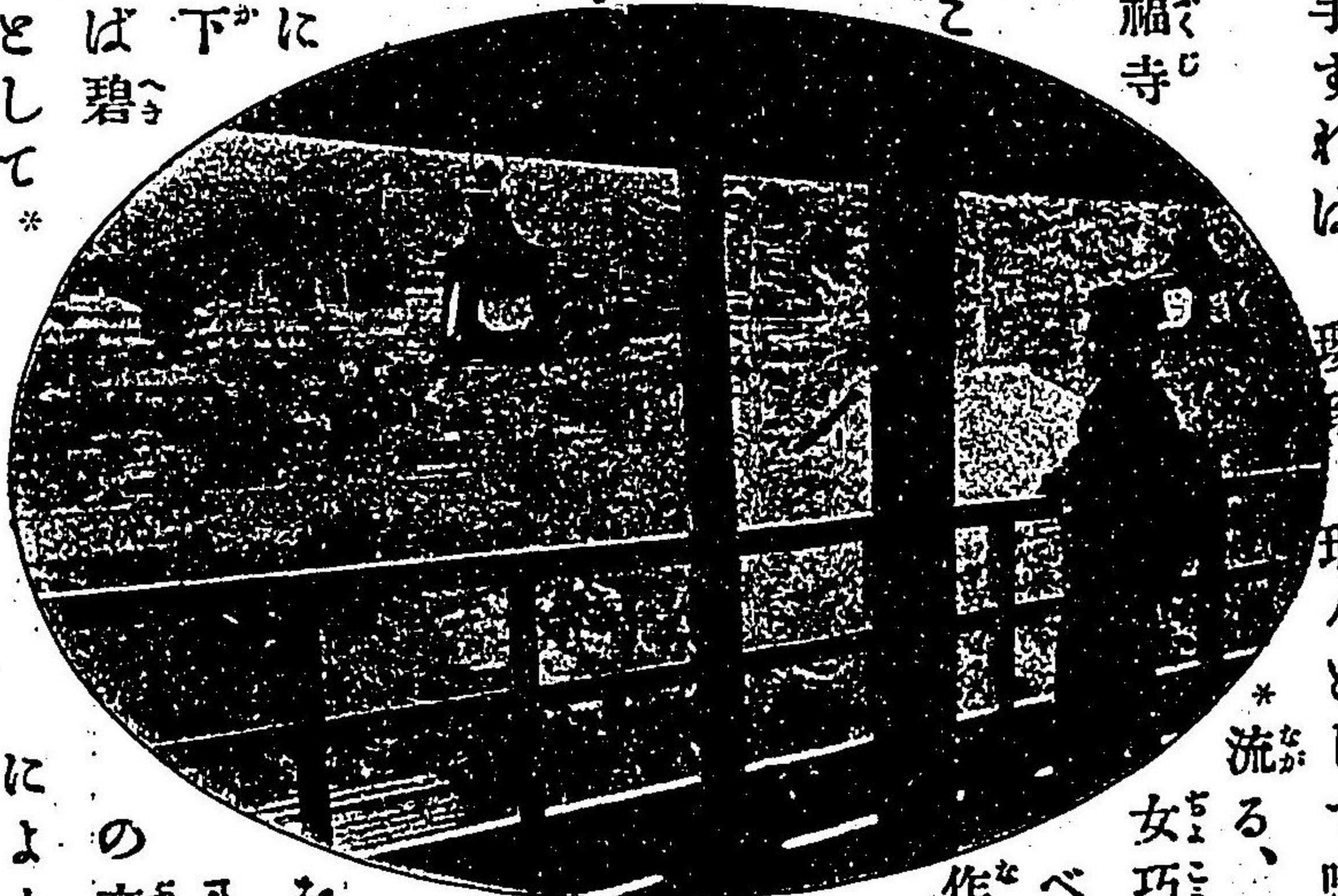


敲くに任す、鐘たるもの不平の鳴をなす、亦た宜なり、  
 方廣寺を出で、更に豊國神社に賽す、社後  
 の阿彌陀峰は則ち豊公の遺骸を葬ひりしと  
 ころ、華表あり、山の最高處に立ち、内に  
 廟宇あり、遠山近水氣象萬千を呑む、豊公  
 其れ佳城のうち、脚を伸べて偃臥し、欠伸  
 傲笑するや否や、社前人家の邊に耳塚なる  
 ものあり、高さ二三丈、石を累ねて塔を成  
 す、是れ曾て豊公征韓の時、其の獲たる首  
 級幾千萬を取ら若くは剝きり、之を大桶に  
 盛りて鹽藏し、以て我が國に輸送し來たれ  
 るものを埋めしところ、  
 蓮華王院に入りて、所謂三十三間堂を看る、  
 堂南北六十六間、三十三柱を以て之を支ふ、  
 帳幔深く垂れ、晝も猶は黄昏のごとし、そ  
 の内一千一軀の觀音の古佛靜かに立てり、  
 妙相端嚴、賽するもの鐘を敲



塚 耳

きて拍手すれば、嬰々として鳴る、嬰然として容を正さざるはな  
 し、終に東福寺  
 に詣り、  
 謂ふとこ  
 ろの通  
 天橋な  
 るもの  
 を渡る  
 橋は廻  
 廊のこ  
 とく、溪  
 架す、下  
 瞰すれば碧  
 水曲々として  
 以て、乃ち取りて之に命じたるの名なり、



流る、峰を渡る、古楓路を挟む、晩秋青  
 女巧を弄するの時、其の綺麗なる想ふ  
 べきなり、樹聲水音皆な梵唄の聲を  
 作す、禪味の轉た濃かなるを覺ゆ、  
 泉湧寺に入りて、遙かに先帝の  
 御陵を拜し、終に轅を回して鴨  
 岬の晴暉樓に歸る、此夜眠り頗  
 る穩靜なり、明早終に行季を理  
 めて歸途に就く、知友數人予を  
 送る、予は静屋川を廻り、隧道  
 を過ぎて大津に赴き、以て所謂近江  
 八景を看んといふ、静屋川とは京都  
 の文人が「疏水」の名の雅馴ならざる  
 により、舊尹北垣氏の別號静屋といふを



知友皆な曰く、静屋の川、下るに奇にして迎るに妙ならず、且つ隧道のうちに、幽昏にして奇寒骨に透る、舟の行くや遅々、景物看るに足るものなし、宜しく瀛車に投じて大谷の停車場より下り、逢坂の古關を過ぎりて大津に入り、三井寺に登りて以て八景の大勢を看るべし、比良の暮雪、看るを得べし、矢瀬の歸帆、看るを得べし、粟とどく、紫明兩つながら余を送りて江州に至る、



津の晴嵐、看るを得べし、唐崎の夜雨、三井の晩鐘亦た聴くとを得べし、若夫れ石山秋月、堅田落雁は、今秋來り遊ぶの時に及びて、仔細に之を看るべし、終に之に從ふ、七條の停車場に至り、終に瀛車に上る、山は笑がとどく水は媚びるが

大谷の停車場を下り、行く／＼謂ふ所の逢坂の古關趾を過ぐ、阪陰の雪寒さの甚だ奇しきが爲めに凍ると極めて固く、平滑にして時に脚を失せんとす、上に落々たる長松あり、風急にして松は昔ながらの鳴を作し、狂露隕つると多く、愕翠來りて路雪に映す、一路宛がら青鉛を鋪けるが如し

大津の町に入る、車夫遙街の一角を指して云ふ、露太子の難に遭ひしのところは彼處なりと更に車夫某々の太子の奇禍によりて、奇福を獲たるを説き、當時、縣の官人を載せて五歩の内に血を濺げるを見、咄嗟轅を投じ、挺身して赤手赴き搏たんとする一刹那、奇福は既に某々兩車夫の手に歸したるを痛嘆し、歩を停め轅を撫して低回願望すると少時、終に手を三井寺の門前に導けり、磴を登り盡せば佛殿あり、賽して後ち磴盡るほとりの茶亭に憩ふ、危欄は琵琶の湖に臨み、萬頃の煙波その前に恍洋たり、

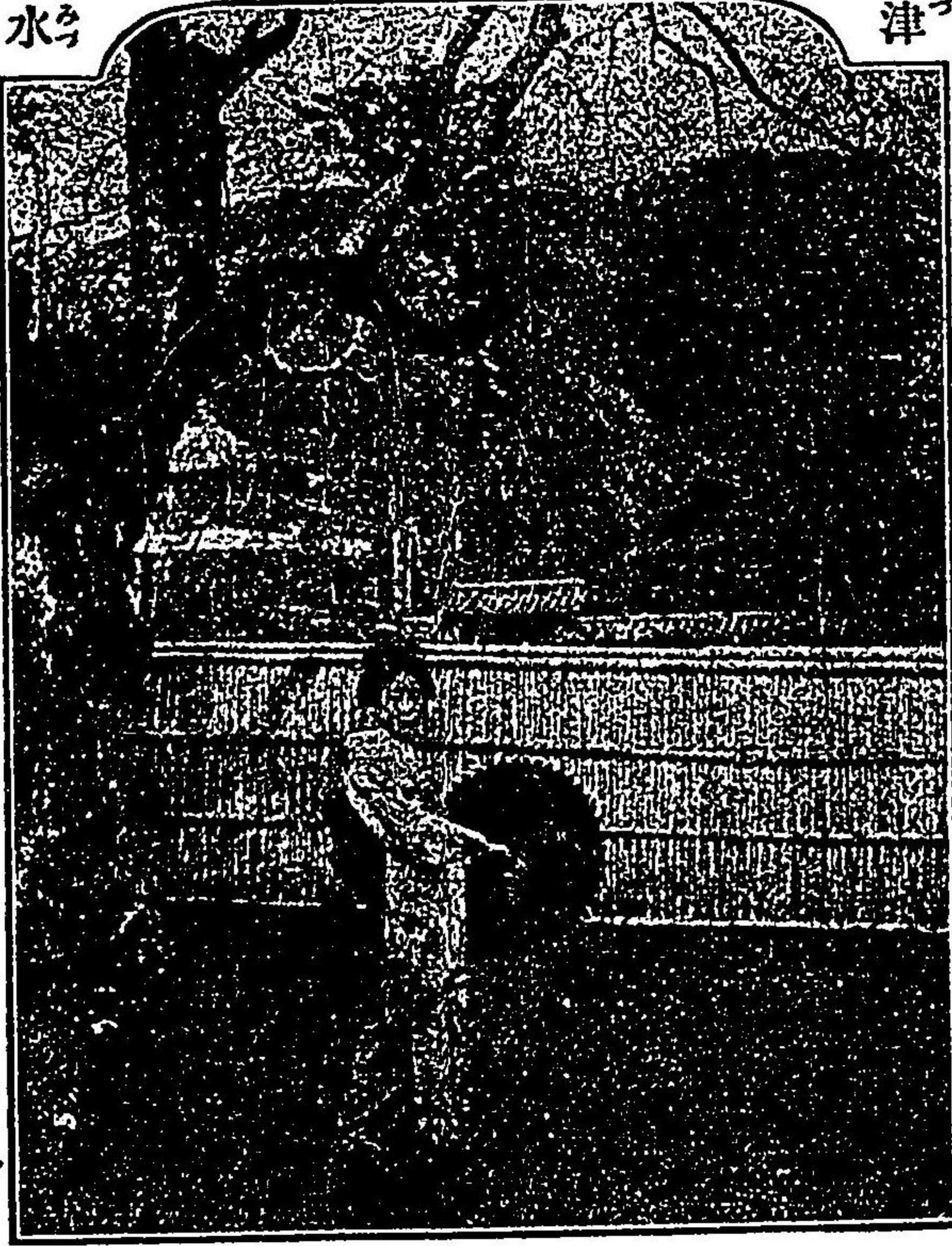


京都四時の行樂

春

は嵐山、仁和寺の櫻、祇園祠の夜櫻  
 會て小督が泣いて月明に對して想夫戀を彈じたる嵯峨野の邊の停車場を  
 下り、平相國の嬖妾、祇王、祇女、止知、佛等の遁世したる祇王寺、及  
 び建禮門院の侍女横笛が剃髮して尼となりし三寶寺を訪れて、香骨瘞處  
 の昔を拂ひ、行くこと十數町にして清川前に在り、大堰川といふ、水を  
 隔て、南に花には仇の名の嵐山あり、  
 水此に傍ふて長松一路、三軒茶屋と云ふあり、嵐山の翠微は楣壁を照す、  
 長橋あり碧流に架す、所謂渡月橋なるもの、橋を度り盡すところは則ち  
 法輪寺の山下なり、山を上ること五六町にして大悲閣あり僧惠心作ると  
 ころの千手觀音を安置す、大悲閣の西、嵐山の麓に鏡泉湧く、浴館あり  
 泉を湛えて浴せしむ辨天湯といふ、更に戸灘瀬の瀧なるものあり、山腹  
 に法輪寺、上方に香西又六郎の城趾あり、凡そ山隈水澗櫻樹多く、閑春  
 の候、爛熳として峰燃んとす、日出で、は霞蒸し、月照して雲冷かに、

其の大堰の川に枕むの危岬のところ、萬朶の花、清淺の水を相映發し、  
 花氣水氣と交も蒸して氣氤氳し、夜も亦た光あり、三軒茶屋の前より舟  
 を浮べ、嵐山々々下を徂徠して花を見る、花を過り花を出で花幾陰晴す、  
 尤も佳處となす、山の櫻は曾て龜山上皇の吉野の木を移し栽たるものと  
 いふ、川の上流は則ち保津  
 川の急瀨にして、亂石奔  
 湍の奇あり、杜鵑花さく  
 時、丹波の龜岡より舟を  
 縦て此の急瀨を下る、尤  
 も奇絶となす、峽中、石  
 あり皆な奇なり、觀瀾石  
 あり、蓮花岩あり、屏風  
 岩あり、扉岩あり、奔流  
 石に激して下る、兩岸は  
 皆な峭壁、老松懸垂して水  
 に親しまんとす、更に躑躅多し、花時猩血滴らんとし、水亦た紅し、灘



高臺寺前糸櫻



の急なるもの、浪花淵、猿淵、鳥船淵、舟子の舟を放つてこの急灘を下るや、一石を撞く、石に皆な筒眼あり、若し一筒を誤まれば舟は忽ち人筒を碎く、舟子左右に筒を舞し少しも倉黄せず、筒細くして能く撓み、石を撞いても折れず、彎々として弓の如し



舟にて、  
首に在り、  
石に逢ふてこれ宛かも智恩院に到らんとするの平地にある垂枝櫻は、一根

祭葵茂加  
御室の仁和寺は眞言密乗の巨寺なり、宇多、朱雀の兩帝落飾の後の宸居たり、世々法親王此に居る、寺に古櫻を植ゆ、櫻に未だ老ひざるもの樹なし、盤桓して地を行く、其尙老ひざるものといへども地上二三尺のところより皆な花を着く、花時月明の夜來りて寺門に入れば、唯だ漢々として低雲の白きを見るのみ、中に金堂、観音堂、祖師堂、經藏五層の寶塔を露出す、綺麗と謂ふべ

にして七八幹を伸べ、枝を四方に張る、十數柱を以てこれを支ふ、花を着くこと尤とも稠密、夜に及べは四邊に篝火を燃し以つて花を照す、甚はだ美觀なり、祠に近く青樓多し、玉人、夜、神に賽し、蓮歩、徐むるに花下を度るのところ繪も若かず

夏

は加茂の葵祭、祇園會、鴨川の夕涼、古雅幽遠にして、看る者をして身の千年以前の人たるかを疑がはしむるもの、加茂の祭となす、毎歲五月十五日を以てこれを執行す、其日勅使先づ下鴨の御祖神社に詣り、行裝肅々として更に別雷神社に向ふ、別に陰曆の五月五日、別雷神社の神前に競馬の神事を行ふ、馬都て十二雙、祝氏の黒袍を衣るものと朱袍を衣るものと左右に分れ、騎して馳騁し互ひに後先を競ふ、騎るところの人は桓武以上の人、馬具も亦た古様、古を愛するの心油然而して起る、祇園八坂神社の祭禮は、毎歲七月十七日より二十四日に至るまでこれを執行す、所謂祇園會なるものは是なり、祭の日、京都の町々より山鉾を曳出





葉紅天通  
 三尾と稱し、紅葉尤も多し、山  
 に清瀧川の清溪あり、溪に傍ふ  
 て皆な楓樹、青女一夜風霜を飛  
 せば、黄葉紅葉秋陽に照されて  
 燃んとし、清瀧川の水、緑更に  
 鮮明なり、白雲橋を渡りて行く  
 と數町、高山寺あり、僧明惠の

秋

びて醒むべく、酔を買ふて酔ふ  
 べく、納涼の客、午夜に至るま  
 で散せず、亦は風流事なり

あり、玲瓏の月あり下には清淺の水  
 懸けを敷て以て客を迎ふ、燈を  
 中の洲渚の邊に設けられ、燈を  
 樓遠近に湘簾を捲き、涼棚は河  
 に紫、鳴の水漸く明らか、水  
 可なるの時、東山の峰巒漸やく  
 條五條の衢を洗ふの後、晚涼人  
 斜あり、若しそれ白雨、三條四  
 祇園の花街に接し、西に先斗の狹  
 を紫回して流る、四條橋の東は  
 鳴川の水、潺湲として洲渚の間  
 國第一なり  
 を練り歩く、華美豪華、實に全  
 女麗衣して香粉陣を作り、市中  
 し、祇園新地の狹斜よりは、妓



涼納川鴨



茶を宋より齎らし來たり始めて裁たりしところといふ、白雲橋より溪に傍ひ下ること數町にして、楨尾、西明寺あり、伽藍寂寞、樹語泉聲、寺に滿つ、境太だ幽邃なり、西南に向つて更に溪を下れば即ち高雄山、溪の兩岸皆な楓林、綺麗なると畫の如し、神護寺あり、和氣清磨の創立なり、寺の鐘は橋廣輔其の序を作り、菅原是善其の銘を作り、藤原敏行字を作る、世に三絶と稱す、地藏院の邊に銘を植て下瞰すれば、丹楓林中に清瀧川の碧流の隱約するを見る、錦囊いまだ裏み了らず、寒劍半ば露出するが如し

冬

は隨處に佳處多し、「雪の西京」稍やこれを盡すに似たり、故に茲に贊せず

模造大極殿

桓武天皇奠都千一十年の紀念祭を、明治二十八年の春に擧げたる京都市は、其の儀典をして更に華麗ならしめんとて洛東聖護院の東に、模造大

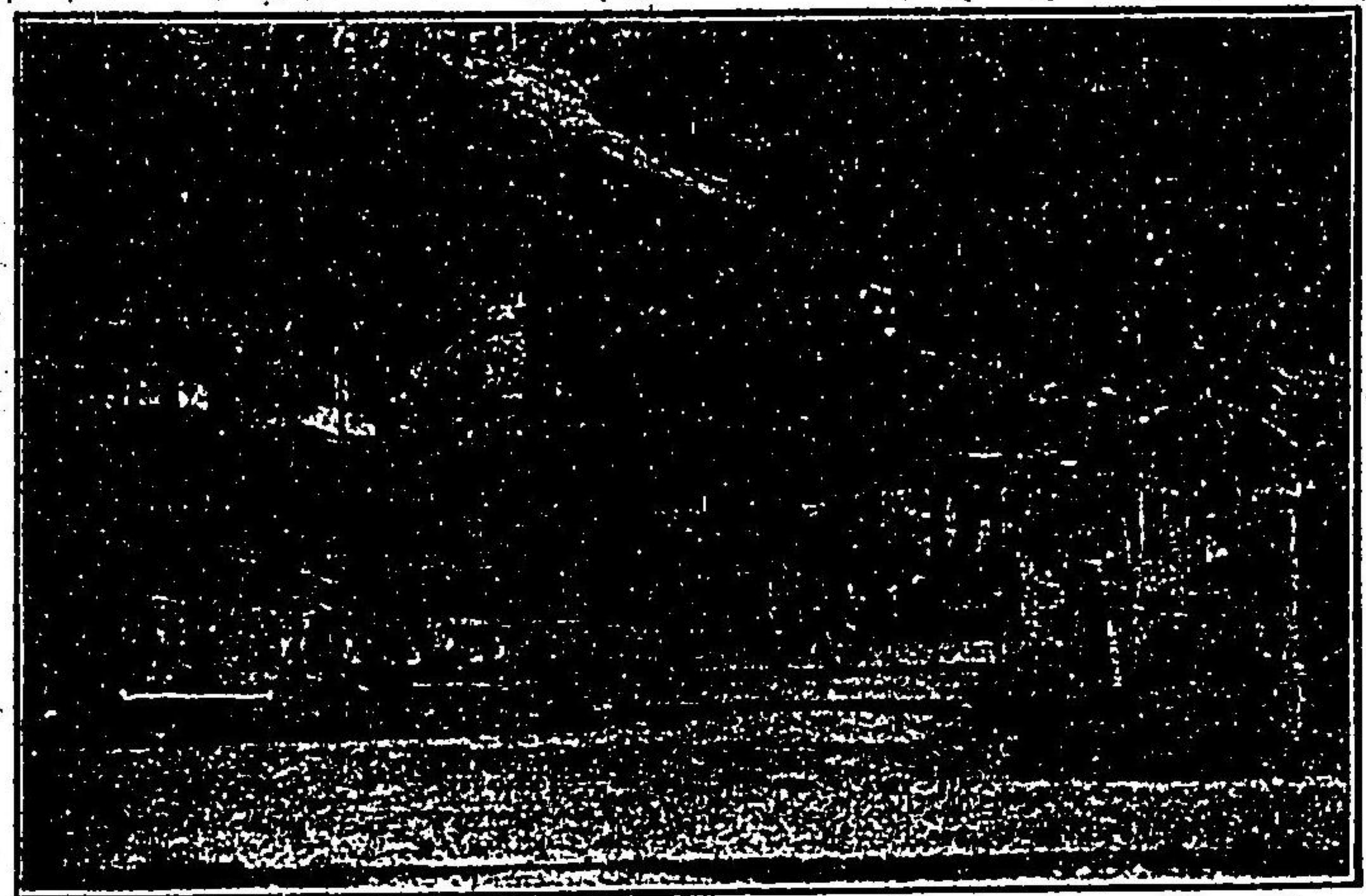
極殿を作りたり、巍々たる應天門に入れば、右に蒼龍、左に白虎の二樓あり、丹壁繪くが如し、石缸一道寸埃を留めず、走つて龍尾壇に至り、大極殿立ち、歩廊閣廊徐やかに左右に度る、人をして舊時の盛觀を想はしむ、規模斯の如く壯大といへども、これを往時の大極殿に比すれば、結構其の半ばに及ばず、昔は蒼龍、白虎二樓の外に、更に棲鳳樓、翔鸞樓、小安殿、東西の朝集堂、康樂堂外九堂あり、應天門の外に、更に昭慶、重慶、章善、政宜の四門ありと、其の偉麗なりしこと知るべきなり、模造大極殿の背後に平安神宮あり、神苑これを匝る

阿彌陀峯

東山の三十六峰、勢游龍の如し、阿彌陀峯其の二に居る、嗚呼是れ曠世の英雄豐大閣埋骨の山にあらずや、慶長當時の豊國廟が雄大瑰麗なりしは、舊記の證するところ、風雨三年、此の天縱英物の墳墓も、空しく榛莽荆棘の間に斷礎を留むるのみとなり、桃山の殿は荒れて花雨に泣き、聚樂の第は古りて草烟を鎖す、誰れか俯仰願望して涙を隕さるものあらんや、豊國神社の宮司たりし日



野子爵、慨然としてこれが改修の議を唱へ、太閤に縁故深き蜂須賀、淺



四京東福寺

ふ、正面に拜殿あり、更に進んで石磴を登ること五層凡そ六百級、瀟々

として雲に入らんとす、磴盡きて平地、唐門あり、桃山式に依り石階の中層に建てらる、唐門の中は即ち瑩域、五輪の大石塔婆を置く、高さ二丈三尺三寸、瑩域を劃るに石の玉垣を以つてす、規模森嚴、人をして蒼涼萬古の愁を懷はしむ、脚下に十萬の人家を見、西山一帶招けば來らんとす、登臨すれば膽に毛を生せしかを疑ふ

宇治の平等院

桃山○梅溪○宇治見臺○宇治○黄蘗山○宇治の川○浮殿○扇の芝○平等院○鳳凰堂○宇治

川○橋の小島が崎○豊公茶を煎るの水を汲みしころ○橋姫祠○茶摘○宇治人形○旅館に

は一碧樓菊屋尤も著はる

京都の七條停車場よりして伏見、伏見よりして桃山、豊太閤の桃山御殿の在りしところ、今は廢墟に桃花あり、尤も多きは梅、梅溪といふ、香雪の中を抽ける宇治見臺は、巨椋の池、宇治の川を望むべし、關春の候、京人來り遊びて綺羅を圖はす、車は更に宇治の町に入らんとして林篋の缺るところ遷逝なる粉壁を見る、これ黄蘗山萬松寺なり、隱元和尙の開基、伽藍を建つと萬治三年にあり、結構は唐様にして甚だ莊嚴、萬



松雲冷やかなるの邊、山門、天王殿、大雄寶殿、法堂、祖師堂、伽藍堂、  
 神悅堂、舍利殿、華嚴堂等を見る、宇治川を度りて停車場、  
 市塵の間を過、先宇治橋に至る、一道の碧水、青嶂の間より汨々として流る、こと甚だ駛し、彼岸には汀柳洲蘆、中にからずや、石に傍ふて一株の梅あり、これを過ぐれば蓮池、是れ平等院の在るところ、池の瀕に有名なる鳳凰堂立ち、其の影、漣漪の中に浮ぶ

五位の屠腹したるところは此處、老雄の血、  
 れ木の花さくことのと歌ひつゝ、埋  
 ち、勸して「扇の芝」といふ、「埋  
 更に坡下の荒草の中に石ありて立  
 たく坡を隔て、水を見ず  
 ば鮮鱗の竿に上りしもの、今や全  
 ば瀬聲枕頭に通じ、坐して釣すれ  
 て水に枕みしものか、臥して聴け  
 に河原左大臣融の浮殿あり、想ふ會  
 湲激の治宇

五六の人家續いて復た斷るを見る、此岸は則ち大  
 坡、坡を度りて行くこと數町にして、坡陰



堂は頗ふる華麗なり、中央の大  
 閣の屋角に、右左相對して碧銅  
 の鳳凰を置く、其の制甚だ巧妙  
 にして、風に隨ふて翼を上下し  
 翔舞するもの、如し、大閣の左  
 右に更に一閣を置き、廊ありこ  
 れに通ず、落々たる長松、堂を  
 護り、晩翠の色は朱欄碧楹と映  
 帶す、堂中に安置するところ、  
 身長六尺の彌陀佛、佛師定朝の  
 作るどころにして非凡の品なり  
 と、佛壇の飾装及び四壁の繪畫  
 精美を盡し、他に匹敵するもの  
 なしといふ、今や閣を鎖し、人  
 の見るを禁せり  
 此の地は曾つて河原左大臣融の



院等平治宇



別業、陽成、宇多、朱雀の三帝これを離宮となしたまひ、長徳の年藤原の道長に賜ふ、道長これを山莊となし、其の子頼道喜捨して寺となす、後醍醐帝の時、楠木正成賊と此に戦かひ、火を放ちて民舎を焼く、火延いて寺に入り、伽藍は劫灰となる、而も祝融氏は此の鳳凰堂を愛みて焼かず、依然として今に至る、寺に什寶多し、堂廊の中に安排して人の觀るを許す、刺を寺僧に通ずれば、喜んで東道す、住持大門師善く客を愛す、去りて長坡の上に登りて宇治の川を見れば、水の色靑靑なり、流れの疾きが爲めに石皆な活きたり、憶ふ佐々木高綱、梶原景時が流れを亂して騎渡したりし時を、其の兩勇の叱々馬に策ち、相先後して水に入りしといふ橋の小島が崎の邊を見れば、瀬聲淙々然として當年の餘韻あり、宇治の橋の欄干の邊、別に橋板の斗出して小欄を繞らするあり、傳へ曰ふ豊公此に茶を煎るの水を汲しめしところと、橋幾たびか新たなるも、これのみは終に故様を改ためず、橋の南端に橋姫祠あり、二小祠、川に背いて雙び立つ、此の地、月に雪に佳ならざるなし、夏宵尤も佳し、宇治の流螢は古來其

の名高し、薫風五月、四郊の茶圃正に摘芽の時に際す、村娘幾隊翠色滴り落ちんとするところ、唱歌相答へ、露に和して芳芽を摘む、詩趣甚だ多し、茶木を以て作りたる宇治人形、彩色刻様と共に古雅、愛すべし

### 吉野山

吉野川○六田の渡○石碕○村上義光の墳○豊公觀花の宴を張りしところ○口の千本○吉野町○隠れ松○關屋の樓○藏王堂○山門○權現堂○大塔宮死別の宴を張りし中庭○杉の森○後醍醐帝の御陵○小楠公髻塚○如意輪寺○本尊の龍扉○梓弓の歌扉○中の千本○竹林院○吉水神社○延元の行宮○御詠○勝手神社○靜と義經○奥の千本○金精明神○蹴拔の塔○昔清水○西行庵○御幸の芝生○雲井の樓○吉野山への路の順序は本文の中に詳しく記せり、吉野の町には旅館多し、いつれも忠實に客を遇すこと、普れくこの山の古蹟を尋ねんには吉野の町に一泊せざるべからず、夜闌けて花下に逍遙し滿身花影夢南朝など風邪ひかぬ要心すれば面白き興なるべし

星かと咲き霞かと蒸し雪かと散る、日出の國の名花と稱せられし櫻花は、二十四番の春風に殿して開き、風雨一夜にして隕ること甚だ潔よきは、之を沈澁淵默然諾を尙くもせずして、一たび諸哉を呼ぶに及べば腰間の





吉野垂枝櫻

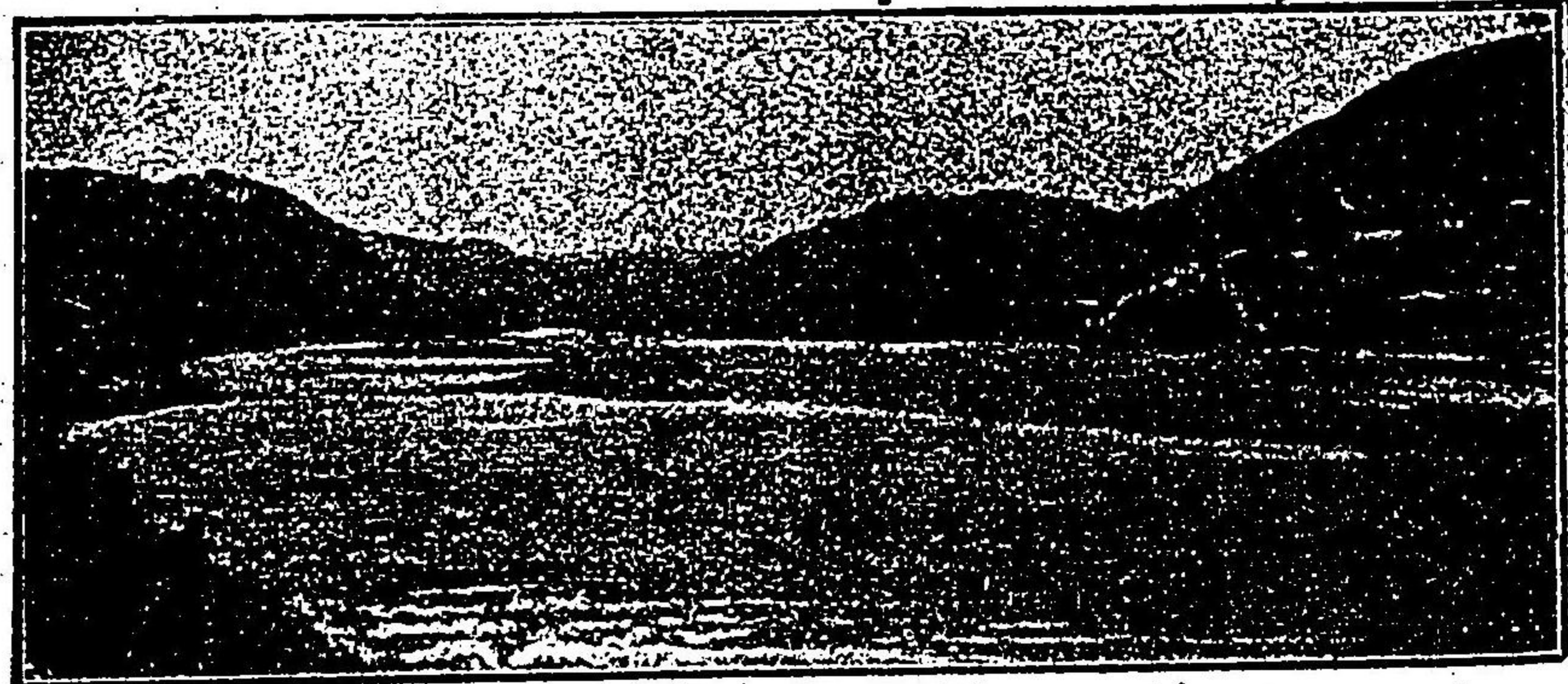
寶刀と共に亡びて些も悔ゆることなき古武士に  
 比喩されたら  
 實に朝日に匂ふこの花を仰ぎ見ては、唐土人も  
 高麗人も大和心になりぬべき吉野の山は、別に  
 汗青の上に蒼涼萬古の事蹟を傳へ、名勝の區は  
 更に、又た一の靈地となり、「あさばらけ有明の  
 月と見るやでに吉野の里に降れる白雪」の風流  
 温雅の處は「眉雪老僧時止掃落花深處說南朝」  
 の悲愴感慨の山となりたり  
 京都若くは大坂より奈良、下田驛を歴て高田驛  
 に至る、南和鐵道是れより起る、乃ち更に南和  
 鐵道の汽車に乗じ、新庄、御所、掖上、の諸驛  
 を過ぎりて葛の停車場より汽車を下る、是れよ  
 り吉野山に至る僅に二里  
 吉野川の邊六田の渡し、曠目既に凡にあらす、  
 水碧りに山青く、遙櫻の色さながら幾圍不動の

屯雲を作る、上峰萬朶の花の露隕ちて水中に入り、水も亦た香しからん  
 と疑はる、吉野川を渡れば、路漸く険なり、路に傍ふて稚櫻あり、昔  
 は老樹の並立して天を掩ひ、花時に宛かも花洞を作りしが、維新の際多  
 く伐斫せられ、後栽ゆるに幼木を以てせしといふ、路傍に石碣を立て町  
 程を誌す、二十町にして老樹多し、長峰の樓の邊りより、や、佳境に入  
 り來る、路後の山に村上義光の墳あり、碑を路傍に立つ、別に豊太閤の  
 侯伯を率ゐて觀花の盛燕を張りたる舊蹟あり、行くこと數町にして「口  
 の千本」に至る、茶亭あり、竹欄に凭つて下瞰すれば皆な櫻花、花氣氤  
 氳、山谷に充滿し、身は白雲の上に坐するが如し、峰脚、溪頭、馬を牽  
 くもの、草を負ふもの、施々として路を行き、花を穿ちまた花を出づ、  
 三十三町の石碣を過ぎれば一水路を絶ち橋ありて通ず、欄干の邊に豊臣  
 秀頼再修の銘を誌す、これを過ぎれば則ち吉野町、南北十餘町簇々として  
 數十百家あり、旅館、商舖と相交はる、吉野の坊門の中に隠れ松と  
 いふものあり、櫻雲に埋没して矯姿を覓め得ず、花散じて始めて晚翠を  
 見るが故が、此の邊の櫻を關屋の櫻といふ  
 藏王堂に詣れば、先づ山門を見る、甚だ荒涼たり、村上義光が大塔宮の



御鏡を撰し、詐り名りて健闘し、終に肚を割き腸を抉出し、賊に抛ちて  
 最期の時の模範にせよと呼はりしは、正にこの門上欄干の邊なり、門を  
 入れば一庭落莫、藏王權現堂あり、堂は粉壁朱楹、簷牙高く啄む、堂の  
 前の中庭は則ち大堂の宮が生別の酒燕を催したまひしところなり、山風  
 晩寒を催うし櫻花やうやく碧なるの時、人をして徘徊願望して去る能は  
 さらしむ  
 更に溪畔の逕を行き、杉の森を過ぎりて一阪を陟れば、則ち後醍醐帝の  
 英靈の長へに在ますところ也、御陵は北に向ひて石扉を鎖す、其の骨を  
 此に埋むるも魂魄は常に北闕を望むと宣ひ、慷慨して劍を按じて崩じた  
 まひしの事を憶へば、誰れか涙を墮さらん、御陵の上松柏森然、颯々  
 として天風に鳴る、御陵の左右櫻花多し  
 御陵の下數十歩にして小楠公の髻塚あり、數百歩にして如意輪寺、本尊  
 の如意輪觀音は、後醍醐帝の宸作、金岡の吉野より熊野までの山水を繪  
 きし龜の扉に、亦た御題の詩ありといふ、後醍醐帝の御像あり、又小楠  
 公の梓弓の歌扉あり、鏃痕今猶は鮮明なり、寺僧、髻塚の碑と歌扉の摺  
 本を賣る、中の千本は此の邊なり

如意輪寺に近く竹林院あり、山中の  
 一名勝、園は小堀遠州の經營したる  
 もの、樹石の安排自然に出で、老櫻  
 數十幹あり、花稠密にして空を見ず、  
 假山に上りて軟草の氈の如きところ  
 に箕踞して眺望すれば、藏王堂は眼  
 下に在り、南は千丈ヶ谷、東は溪を  
 隔て、低松一路、麥疇あり茅屋あり、  
 山櫻處々に屯雲を作り、峯に陰晴あ  
 り  
 如意輪寺の南吉水神社あり、元吉水  
 院と稱し、後醍醐帝の吉野山に入る  
 や、先づ行宮を此に定めたまひしと  
 ころ、「花に寐てよしや吉野のよしと  
 の枕の下に石はしる音」とは此院に  
 在せし時の御詠、後醍醐帝の靈を



川野吉

祀る、勝手  
 明神社は義  
 經の妾靜が、  
 法樂の舞を  
 なして山僧  
 を心酔せし  
 め、以て義  
 經主従十二  
 人を脱走せ  
 しめしとこ  
 ろと表ふ、  
 義經の臣佐  
 藤忠信が主  
 に代りて詐  
 り名り、僧  
 兵と力闘し



たる處の花矢倉の邊を過り、子守神社に詣る、社殿廻廊をた華美なり、社背に行けば衆谷の花を悉看すべし、奥の千本とは此の邊なり、是れより花稍やく稀に、路も亦た險なり、金精明神社に義經蹴拔の塔を見て、更に上峯に至れば「淺くともよしや又汲む人はあらじ我にことなる山の井の水」なる若清水の細流を度れば、則ち西行庵あり、白雲青山世と隔離す、吉野の花は此に盡く  
 勝手明神社の背後の路を右すれば、後醍醐帝の御幸の芝生あり、また行くこと四五町にして櫻茶屋あり、老櫻あり、枝はさながら解きたる素を懸けたるが如し、垂絲櫻なり、花甚だ密着し、玉簾中霽より垂る、雲井の櫻といふは是れなり、櫻の下に立ちて眺望すれば、白雲平布して谷を見ず、諦視すれば皆花なり、雲の缺くるところ吉野の町を見る、金剛の峯、葛城の山、龍王山、多武の峯、遙青近碧來りて人を照す

### 那智の瀧瀨八町

市野々○熊野夫須美神社○青岸波寺○本尊の佛像○大瀑布○那智瀧の記○文鏡の流石○飛瀧神社○敵國降伏の木舟○新宮○熊野川○北山川○大和の十津川○瀨八町○奇石○瀧瀨七

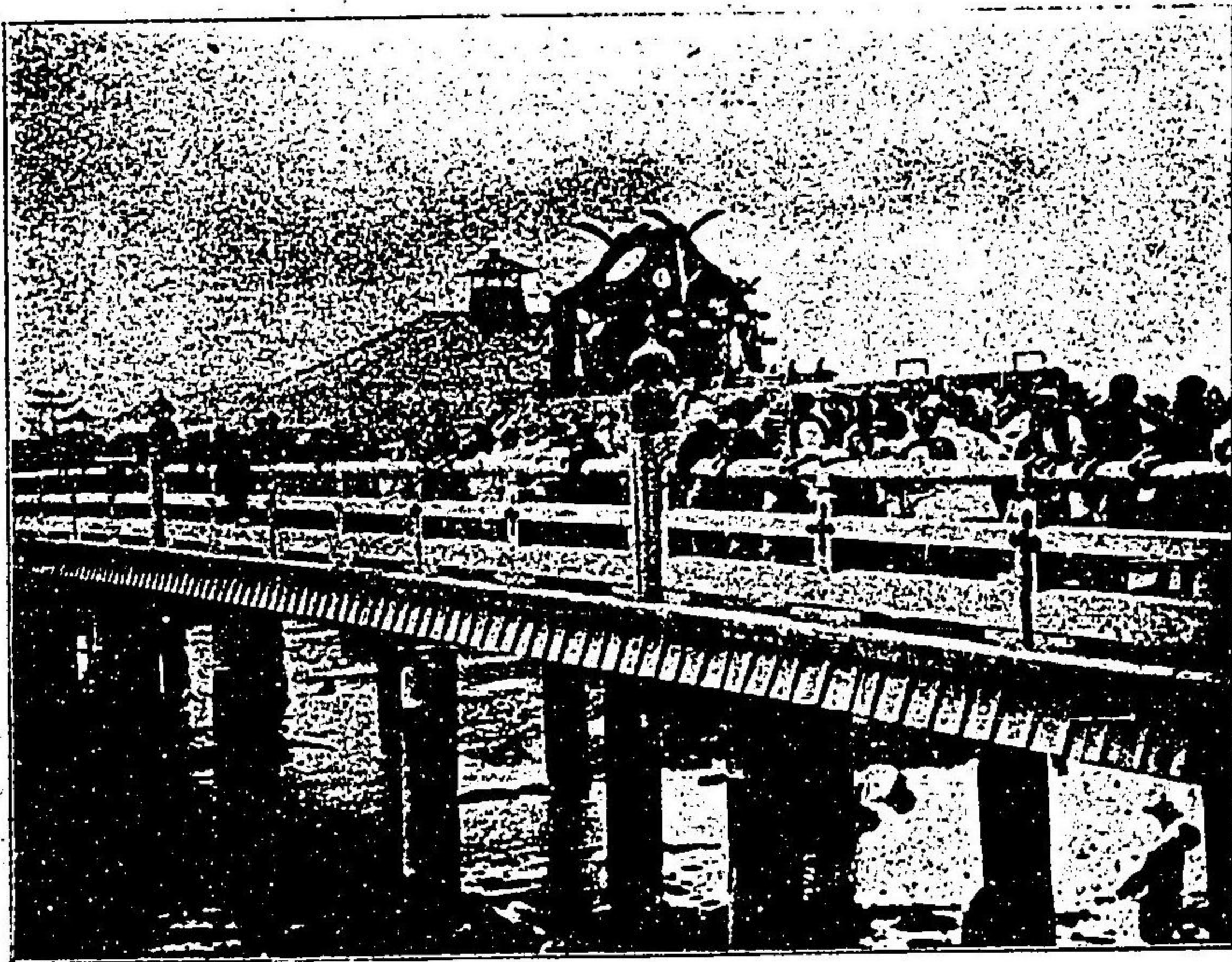
○玉置口○田戸○那智瀧八町と共に本記の中に行路を記せり、また尾張若くは伊勢地より起つんとするには熱田より汽船に乘じ、四日市、津、神社、鳥羽、南海、贊、長島、引本、尾鷲、木の本、三輪崎に至りて上陸し右すれば五十餘町にして新宮、左すれば五里にして那智、

那智の山は紀州の東牟婁郡に在りて、新宮より凡そ五里、佐野、宇久井、濱の宮を歴て市野々に至る、この間嶺を踰ゆること二度、大串といひ小串といふ、峯巒錯綜、溪水紛糾し、時に林樹の缺處より蒼海を見る、風景甚だ佳なり、市野々より十町許にして華表あり、これ那智山の登口、山巔に至る凡そ二十五町といふ、老樹森然として畫も尙ほ暗きを覺ゆ、既に登臨すれば、峯の間より遙かに熊野浦を望み、觀音堂熊野神社は歴歷として雙睫の中に入る、熊野夫須美神社は天神地祇を祭る、都て十三社あり、結構宏麗なり、社に隣りて青岸波寺あり、保形上人の那智の瀑布の潭中より感得したる閻浮檀金の如意輪觀音佛を安置す、誠に古刹なり、什寶多し  
 一路林を穿つて行くこと數丁、平地あり、屋を作て觀瀑のところとなす、仰いで見れば濛々として大瀑布懸る、橘南谿の此の瀑布を記するを讀む



に曰く

「天下無雙目を驚す瀧なり、其の瀧のあたり、山のたゞすまるより堂宇の設け樹木の生ひやうまで、他山には勝れて神仙の境界といふべし、此瀧の事は幼き時より聞居てかうやうにもあるべしと思ひしには似もよらず、格別に異也、初の思ひ居りしは、ふどころのやうに山の抱えたる處に、岩石峨々ど聳へ、其の中に大河を切り落したるやうに水逆をさ落ちて、水煙一二町にも飛びちり雨の降るごとく、一山鳴り響き、其の音遠く三十町五十町のところまでも聞ゆべし、其の瀧の全體の趣きを譬へて曰は、力士の荒れたるが如く、怖ろしくて目留て久しくは見る事もなるまじ、余が如き脆弱の者は神氣も遠々しくなるべしと思ひ居しに、左はなくて、瀧の全體の趣をたどへていは、美人の羅衣を着て立ちたるが如きものなり、瀧の落つるところは、一枚の岩にて壁を作りたるが如きところなり、其の石壁の横の廣さ五丁も十丁もあり、但し遠方よりは此の石壁樹木の梢に出で全く見えざれども、近よりて瀧みるあたりにては、兩方に程よく大木の杉多くありて、石壁の横の廣さくは見えす、空はまことに天より落る心地すれども、水の幅は殊の外



祭荷稻見伏

限らず都てのもの賞美に過ぎて實を失ふこと多しとぞ覺ゆ、されど余

に狭く、大抵幅一間ばかりにみゆれども、廣く高き所なれば實は二三間もあるべし、高さは直下五六十間と見ゆ、上の方暫らくは水筋通りて見ゆれども、夫れより下にては石面に水砕け色白く霧のごとくに散りて、其見事いひつくすべからず、下には大石多くなりて、瀧壺といふべき淵はなし、其音も格別甚しからねば瀧近くよりも神氣の遠々しくなるやうにはあらず、文覺上人の荒行も虚言にはあらしと見ゆ、皆人の高さは二百間幅は三十間なぞいふは、仰山に實を失なふていへるなるべし、此瀧のみに



も京の大佛を大なりと聞居り、越中の立山を高しと聞居たりしが、初  
 めて大佛を拜し、立山を望みたりし時は、左のみ大なりとも高きとも  
 思はざりしに、日をへて見るたびに大に成り高く成りしが如く、此の  
 瀧もいく度も見ば高くも廣くもなるべきにや、大隅國の瀧などは、是  
 よりも廣けれども、那智は全體の奇にして美なること言語に絶せり  
 此の記善く那智の瀑布の景致を盡せり、瀑布既に平潭の上に落ち、科に  
 盈て復た流れ亂岩の間を走り、湛えては碧となり噴いては白となり、滾  
 々として翠微深きところに去り、寂然として聲を收む、平家物語に記す  
 ところ文覺荒行の條に曰ふ  
 熊野へ參り、那智をもしせんとしけるが先づ行のこゝろみに聞ゆる瀧  
 にまばらうたれてみんとて、瀧もどへこそ參りけれ、頃は十二月十  
 日あまりの事なれば雪ふりつもり氷柱凍て、谷の小川も音もせず、峯  
 の嵐吹きこほり、瀧の白糸垂氷となりて、皆な白妙におしなべて、四  
 方の木梢も見えわかず、まかるに文覺瀧壺に下浸り、くびきはつるつ  
 て慈救の咒をみてけるが、二三日こそありけれ、四五日にもなりしか  
 ば文覺堪へずして浮き上りぬ、數千丈漲ぎり落つる瀧なれば、なじか

はたさるべき、さつと押落され、刀の刃の如くなるさしもきびしき岩  
 角の中を、浮きつ沈みつ、五六町こそ流れけれ、  
 瀧の邊に飛瀧神社あり、瀧を以て神體として廟宇を設けず、唯だ一箇の  
 拜殿あるのみ、拜殿の畔に木標あり、龜山上皇、蒙古の來寇の時、敵國  
 降伏の誓を此の祠に立てさせられ、太上天皇懷仁弘安四年二月晦日初度  
 と記させたまひしもの、模標といふ、瀧はまた二の瀧、三の瀧あり、二  
 の瀧は高さ十丈八尺、幅三間、三の瀧は高さ七丈八尺、幅三間、幽邃に  
 して久しく居るべからず  
 新宮より舟を備ひて熊野川を行く、淺里に、三十三間堂に名だかき、柳  
 の精靈おりうの楊枝村を過りて、九里峽を遡ぼり、北山川の注ぐところ  
 に舟を捨て、左すれば熊野本宮、北山川に傍ふて出合より四里すれば正  
 に大和の十津川村、島津、木津呂を過ぐれば即ち玉置口、瀧八丁の奇  
 勝あるところなり、深碧の静淵、膏を湛えたるが如し、潭の上は峭岸皆  
 な一片の岩、大斧劈皴をなす、別にへの字岩、關所岩、佛岩、すべり岩  
 あり、淵の深さは二十餘尋に及ぶ、風吹き度り漣漪激澗として倒影愁ふ  
 るが如し、峭崖の上、更に温然たる一個峯あり、形ち稍や富士に似たり、



静富士といふ、玉置口より田戸に至る凡そ十町許、尤も奇絶、静富士よ  
 り溪水更に幾曲し、窮するが如くにして復た通ず、山中猿猴多し、群棲  
 して人を見ても怖れずといふ、西岸は杜鵑花多し、凡そ静八丁の奇を探  
 らんとするには、大和五條の停車場を下り、十津川を歴て來り訪ふを提  
 路とす、唯路の險難なるのみ、前人記す所の、静八町の記を録す、  
 某日洞溪に遊ぶ、溪は竹筒を距ると一里、而して山路險惡故に舟以て  
 之れを探る、北山川を沂る一里、湯之口を過ぎて小川に到る、勢の入  
 鹿川來注す、迂回数里、玉井口に至る、完直二子の山路よりせし者、  
 岸に立ち舟を招て以て乗る、乃ち曰ふ、舟に後る、と二時にして而し  
 て發す、記れば則ち舟に先だつと一時と、舟路の迂なる知る可き已  
 一棹して岸を廻れば、則ち溪口峻崖數尋、屹立して門を作す、門の内  
 は左右石壁、直立千尺、頂に稚松雜木を戴き、一撮土無き者の如し、  
 水は則ち深綠色にして、巨巖底を作すに似たり、而して深さ數十尋、  
 測る可からざる也、漾々として流れず、舟子櫂を按じ緩々として進む  
 崖壁幾曲觀、曲に隨ひて改まり、崖岩盡く奇なり、其最も奇なる者、  
 右崖にして而して踏步、蛭岩、牌石、鶏冠石、大黒石、條石、左崖に

して而して屏風巖、船岩、治門、釜洞、皆な觀る可し、釜洞、口は僅  
 に身を容れ、其中嵌突、五六十人の坐を爲す、實に奇觀也、之れを要  
 するに、一巖一洞を以て論すべき者に非ず、蓋し左右之壁奇狀萬殊相  
 對して僅に十餘歩左凸なれば則ち右凹一簞ゆれば則ち一伏し呼應映發  
 して自然に章を成す、仰げば則ち青天帶の如く、俯せば則ち碧潭、絶  
 淨、恍として洞中に入るに似たり、土人呼で土呂と爲す、字、泥を用  
 り、方言に水流の緩緩なる者を泥と爲すと云ふ、其字不雅、故に余改  
 めて洞溪に作る、洞川村の例に従ふ也、品品を審視するに、皆斧劈鉞  
 割する者、豈に鬼神一夜にして關成する所なる無らん乎、俟黄諸家の  
 諸法皆な具はり、以て畫理を悟る可く、亦以て文章を悟る可し、溪の  
 長さ八丁、八丁之外は、皆な凡山常水、奇と謂つ可し矣、左崖は則ち  
 和歌山に屬し右崖は則ち三重縣に屬す、東口之外は、則ち大坂府の管  
 する所、亦奇なり、東口に近ぶさしに、忽ち衡門の茅屋を見る、痴想  
 して以爲らく、赤松碧虚之徒が居る所と、舟を繋ぎて遂に上れば、則  
 ち神下村也、餐を傳へて而して去り、舟に上りて再び溪中を過ぐ、道  
 骨、頓に具はるを覺る、怡然自得す、柔櫓嘔鴉、日暮に竹筒に達す



# 高野山

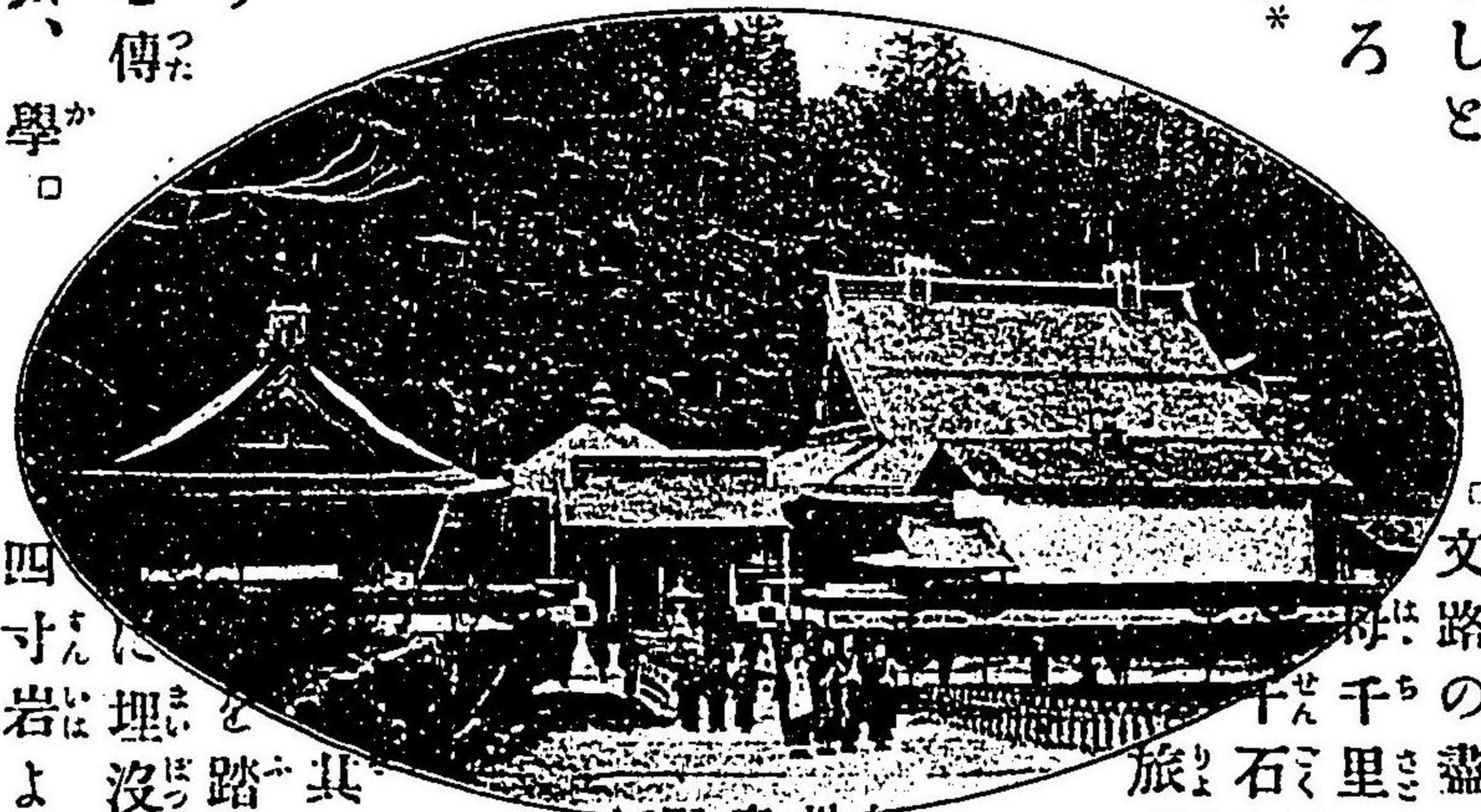
賽路七道○學文路○玉屋○神谷○四寸岩○極樂橋○兒ヶ瀧○大門○金堂○洪鐘○大塔○西  
 塔○參詣人所緣取調所○香の瀧○金剛峯寺○六時鐘○一の瀧○無數の墓碁○法燈堂○迷悟  
 橋○開祖廟

高野山は紀州伊都郡に在りて、僧空海、眞言の一宗を創めて天下に弘法  
 し、嵯峨天皇の時、奏請して此の山を賜はり、金剛峯寺なる大伽藍を建  
 立し、其の入定の地にして、實に海内無比の靈場となす、開山なり今に  
 到る實に一千八十餘年、三百八十四世なり、周匝せる連峯は法身の花臺  
 にして正平なる幽原は化佛の淨土とぞ、寺域は二里半四方、僧坊一百三  
 十有奇、凡そ當山に賽詣の路七道あり、大門口(和歌山口)、不動阪口(京  
 口)、熊野口、龍神口等にして和歌山よりすれば麻生津峠を度り花阪より  
 大門に至り、京都若くは太阪よりするものは紀伊見峠を踰え、大和より  
 するものは待乳峠を踰え、共に學文路村より登るなり、京口より進み、  
 山麓の紀の川を渡り、清水より二十町にして學文路に至る、簇々數十家  
 あり、中に旅店數戸あり、中に就いて玉屋尤も著はる、石童丸母子の宿

りしと

ころ

な\*



山野高州紀

ふ、學

と傳

實に塵梵を境す、

橋を渡れば不動坂なり、山路羊腸、老檜鬱々、岩不動

四寸岩より三町にして極樂橋あり、一溪清淨にして、  
 橋を渡れば不動坂なり、山路羊腸、老檜鬱々、岩不動

文路の盡頭に仁徳寺あり、所謂荊萱堂あり、石童丸の

石橋を度り、觀音の茶屋より神谷に至る、又た

旅亭茶店多し、中に花屋は舊家なり、弘法大師

在世の時、寺の門前にて香花を賣りし人の

後なりしと、此の間古檜天に參し仰いで日

光を見ず、境は次第に清寂に入る、大神宮

より七町にして四寸岩といふものあり、岩

石路を塞ぎ、人は僅かに其の凹處を踏んで

行く、凹底に一雙の足跡幅四寸ばかりなる

ものありて印す、往くもの來るもの、皆な

其の跡を踏まざるべからず、これを御親の足痕

と云ふ、今新道成りて、四寸岩は荒草の中

に埋没す

と傳ふ、學

實に塵梵を境す、

橋を渡れば不動坂なり、山路羊腸、老檜鬱々、岩不動

四寸岩より三町にして極樂橋あり、一溪清淨にして、

橋を渡れば不動坂なり、山路羊腸、老檜鬱々、岩不動



あり、兒の瀧あり、之れを過ぎて女人堂、是に於て山豁然として開けて、  
 一、清淨地となる、巍々として高く聳るものは大門なり、表行十間奥  
 行四間、飛檐五間の樓門にして碧銅瓦をもて葺けり、左右の金剛力士は  
 高さ各々一丈六尺、法橋運長の作なり、瑰雄驚くべし、西望すれば群山  
 は脚下に在り、淡路の島、阿州の山、皆な望中に入る、之を過ぎて中門、  
 十間に三門半の層樓門なりしが回祿の後いまだ再建に至らず  
 金堂は十四間四面、高さ二十五間、二層の大殿閣にして、都て椀材を以  
 て之れを作り絶えて他木を交えず、中に丈六の金色薬師如来を置き金龍  
 の内に安ず、頗る莊嚴を極む、此の堂會て數々回祿の災に罹り、今の堂  
 は萬延元年九月に落成したるものといふ、誠に輪奐の美を盡せり  
 金堂の傍に會て根本大塔あり、十六間四面、高さ十六丈、多寶塔碧銅瓦  
 葺にして、日本第一の大塔と稱せしが、數々火災に會ひ、天保十四年燒  
 失の後、明治十四年七月再建の斧始となす、今尙は工を竣はらず、洪鐘  
 あり、重さ九千九百八十一斤、天文十六年の鑄造なり、御影堂は七間四  
 面、寶形造りなり、前に三鈷の松あり、西塔亦た七間四面、高さ九丈の  
 多寶塔にして、傍の寶庫には開祖空海が入唐して請齋らしたる密具の眞

蹟、飛行の三鈷、鐵鉢を藏めり  
 東の方南谷に入れば覺海師の窟あり、傍に參詣人所緣坊取調所あり、參  
 詣の人、此に就けば其の宿坊を指揮して町噺に紹介す、  
 金輪寶塔あり、石動塔あり、此の堂は山内にて  
 第一の古き建物なり、南院の波切不動、千手  
 院谷の千手觀音堂、光の瀧、又た香の瀧なる  
 ものあり、無塵池の北數町のところに在り、  
 無塵池より發し、轉軸山の溪流と、黒河  
 口の淵口に相會ひ、一大瀑布を懸く、樵  
 路より俯瞰すれば、第一層高さ七八間、  
 二層、三層より以下は隠れて見えす、  
 深潭に落ちて聲雷霆の如く、走りて  
 兒が瀧の水を合せて極樂橋の下を過  
 ぎる  
 行くこと數町にして、本山の主堂なる金剛峰寺  
 に至る、東西三十間、南北三十五間の大伽藍にして歴



高野山金堂



朝の尊牌を安置す、本尊は弘法大師なり、結構莊麗、方丈の中、梅の間には狩野探幽の金襴に梅月流水を繪き、柳の間には青柳白鷺を繪く、文祿四年七月十五日、豊臣秀次の自裁したるところは此の柳の間なり、眞然堂は、後庭の山背に在り、二世の廟あり、有名なる六時の鐘は、本院谷の邊に高く石を築きたる鐘樓に在り、始め福島正則の寄進せるところ、後火災に逢ふて熔けたりしと、其の子正利再び之を鑄て寄進す、銘は假名を交ゆ、谷上の一の瀧、上に不動祠を置けり、三十六溪の水を綜合して一の橋を過ぎ、玉川の末流を併せて瀧々として四十八瀑布となり、此に至りて終に一大瀑布となり、蒼潭の上に落ち、聲山谷に震ふ、山中第一の瀑布なり

一の橋を過ぎて開祖弘法大師の廂所に至る十八町の路の兩傍には、古今の英雄豪傑忠臣孝子文人高士、諸侯伯より布衣輩の人に至るまで、無慮幾千萬の墓あり、多くは五輪の石塔にして、諸侯の墓尤も宏大、其の將軍徳川秀忠の夫人崇源院殿の墓の如きは高きこと三丈なり、駿河大納言忠長の建るところ、古槍夫に參はり、仰いで儀影を見ず、幽陰寂冥の中、英雄も賢子も總て黄土、亦た憐むべし、第二橋を度り、更に第

三橋を渡る、玉川の上に架す、迷悟橋といふ、長さ四間四尺、幅五尺五寸、橋板三十有七枚、金剛界の三十七尊に擬す、仙陵あり、歴世至尊の寶塔を安置す、石磴を登れば法燈堂、賽者の捧ぐる萬燈常に燃ゆ、開祖廟は法燈堂に面して瑞籬を匝らし、石磴の上に立つ、寶形の堂にして些の彩色なく、素朴高傑なり、後は麻尼山、左は轉軸山、右は楊柳山、寒嵐常に封じ、林に三寶鳥啼き、地に千年松生じ、誠に希有の靈域なり

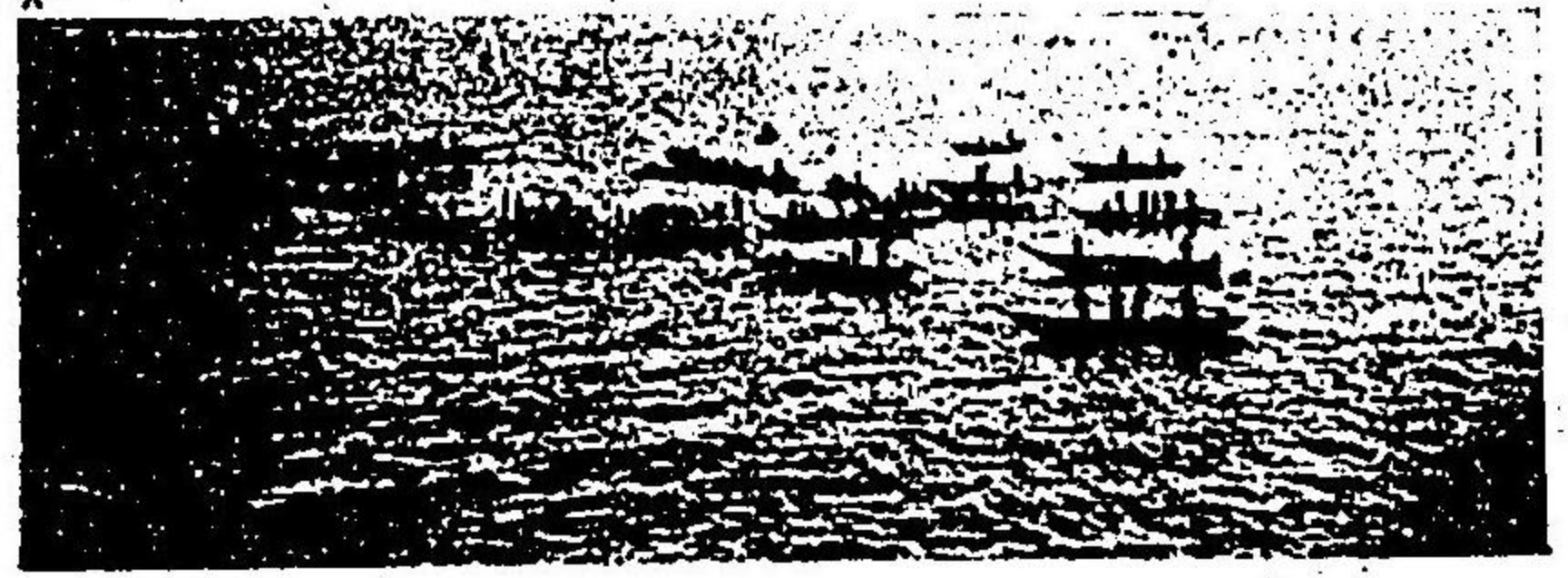
淡路の松帆浦

岩屋浦○繪島浦○大龜○宵突○別當潮○猛犬○岩屋磯○岩屋神社○石窟○鶴島○鈴島○開鏡山○觀音堂傍の眺望○繪島○古歌○千貫松

松帆の浦、今は岩屋の浦といふ、淡路の國の北の涯にして、播磨の明石、攝津の須磨と相嚮へり、繪島の浦といふも此の浦の異名なり、山水の明媚なること、誠に畫にも勝るべし、此の浦に一大龜あり、時に波上に浮遊す、其の浮遊する時は必ず雨ふるといふ、浦は都て漁家にして、宵に至れば舟を沖に出し、篝火を焼き、鐵叉を以て魚を突く、百發百中す、之を宵突といふ、此の海に別當潮とて和泉の堺浦へ行く疾潮あり、若し



過まりて小舟を此の潮流の中に入れ、梶の力も及ばず、推流されて堤に至り、群狗を掠奪す、堤の狗皆な畏服し、浦まで引れ行く。昔此の浦に寺あり、別當坊といふ、此の寺に猛犬あり、此の潮流に乗じ、



淡路沖の溜

流に別當湖と呼べり、浦に色々の砂石あり、其の小砂は庭砌に敷きて人珍重せり、岩屋礫といふ、海岸なる石屋神社は、今天地明神と稱せり、白砂青松の眺に富み、眺望甚だ佳なり、石窟あり、天地明神の北の海窟に近く、鉾島、鶴島あり、開鏡山は岩屋の南の溪間より攀



を忘れんとす、岩屋の後山よりは水精、葡萄酒を出す。岩屋の松帆浦より、淡路を隔て、須磨石を、吉住路、淡路、見渡し、半日な

繪島は岩屋神社の海邊の磯上に在り、一片の丹石にして珠璣の凝聚するがごとし、石紋自から人物花鳥の象を成し、彫るがごとく、又繪くがごとく、玲瓏として愛すべし。頂に一石塔を置き、松樹これを護る、直峭にして登攀まがたし、但し島の根は大石平敷し、席を展せるごとく、數十人を坐せしむべし、雪月の時望み尤も佳なり、別に大和島あり、又大繪島といふ、人登らず、古來、松帆浦、畫島を詠せるもの多し。小夜千鳥吹飯の浦ををどづれて繪島の磯に月傾きぬ。あらし吹く松帆の浦に霧晴れて浪より白む有明の月。細川幽齋。巨松の此の海岸の岩に依りて高く盤桓するあり、龍の松といふ、淡路の千貫松といふものは是れなり。

阿波の鳴門

淡路の福良港○煙島○阿波の大毛山○淡路の鳴門崎○海峡中の岩礁○撫養港○鳴門○其の壯觀○大阪より常に撫養福良へ行くの汽船あり、撫養若くは福良より、俗に閑呼舟といふを借ふて鳴門を見る、撫養福良には旅館あり、鳴門鯛の美天下に名あり

玄海の洋の潮流馬關海峡より入りて、唐人が江と呼び倣せる瀬戸内の海



を流れて、更に讃阿と淡路島の間より南海に通ず、南海の潮流も亦た讃阿と淡路島との間より瀬戸内の海に入らんとし、兩潮の相邀へて此に大盤渦を作る、鳴門是れなり

淡路の福良の浦、浦の口に煙島あり、島は烟霞を帯びて海濱の沙明らかに松昏きに映帶し、灣の中に寸瀾も揚げず宛かも平潮の看をなす、中に南海中國西海の賈船を泊す、參差たる漁莊、運進たる松路、西に行くこと數町にして更に山隈に入る、行くと凡そ一里にして鳴門の崎に至る

鳴門の崎は近く阿波の大毛山と相對し、其の間僅かに半里のみ、長汀の波白きところを土佐泊といふ、岸松のほとりに人馬の往來する歴々として觀るべし、海中に二大岩礁ありて横はる、大なるものは二町許、次なるは一町ばかり、根を金輪際に置き挺然として積水の上に抜く、岩には寸土なきも翠松離々として立つ、別に岩の少なるもの亦た數個あり、緑礫の色をなせる潮流其の間を縈回して走ること甚だ駛きも、波の高きこと呎尺のみ、湛然として碧落を浮ぶ、阿波の山の缺くるところは撫養の浦、簇々として人家あり、景色繪の如し

静かなるこの海峡、始めて來るものは怪訝すべし、若し夫れ宵月波を出

で、黄昏を催うすの時に至れば、大毛の山より鳴門崎に至る一道を劃して瀾色同じからず、食頃にして般々として遠雷の如き響を聞く、響次第に大なり、忽ち見る西南太平洋の潮高きこと一丈許、徐々として推移して來りて岩礁に激す、内海の海若波を揚げてこれを海峡の窄きところに迎へ撃ち、滾々として相持し相闘ひ怒號して相逐馳す、其の潮の激するや、大小數十百の盤渦を作る、大なるもの直径一町に至り、小なるものも十數間に下らず、呀然として相呑吐し、忽ち分れ忽ち合ひ、頃刻にして百變す、奔流すること縦横數里、内海の海若降旗を建つるか、南洋の龍王素車に駕るか、空濠霏微の内、讃阿の山依稀として無からんとす、壯絶、快絶、萬髮倒しまに豎たんとす

津の國の名所

大坂城○天王寺○茶白山○遊息軒○住吉神社○境の大濱○濱寺○寶塚温泉○有馬温泉○温泉寺○浴場○昔時の有馬○落葉山○鼓が瀧○有明樓○六景○名物○神戸○湊川神社○寶勝寺○古梅○布引瀧○大坂には旅館の有名なるもの二十餘家あり、住吉神社の鳥居前には茶屋軒を並べて住吉踊り土偶人其他の玩弄物を賣る海岸の海水浴場には高敞なる樓屋を作れ



り、大濱に茅海樓を第一とし一カこれに次ぐ、他に數軒あり堺には酒造家多く名物は刀劍、  
 庖刀剃刀等あり、有馬の客舎の重なるもの、奥の坊、二階坊、池の坊、明所坊、中の坊、屋  
 崎坊、角坊、此の坊、若狭坊、大門、福宜屋、休所、清水屋、刀根屋、福島屋、立花屋、く  
 し屋等あり、神戸の重なる旅館は多きを以て煩を厭ひて茲に記さす

大坂の市に看るべきは先づ豊公が天下の力を極めて築造たる大坂城、其  
 百牛の力をもてする  
 も揺かし難しと  
 想はる、巨石  
 を積んで城  
 壁となせる  
 を見、太閤  
 の氣宇の四  
 百餘州を呑む  
 の概あるを想望  
 し、更に市の南端天\*  
 人を斬ると麻の如くなりし當時を回想し、



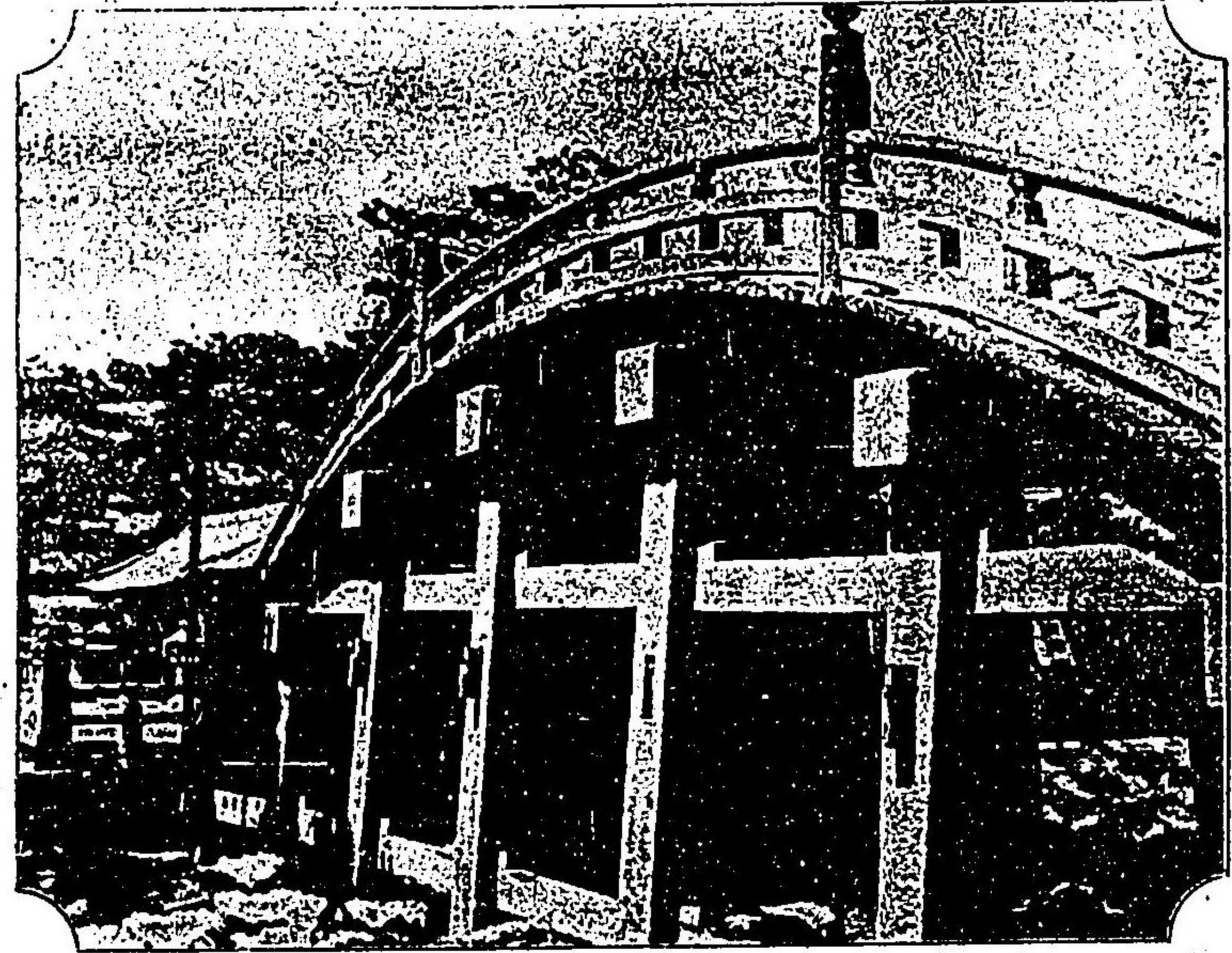
王寺町に四天王寺の古刹  
 を訪ひて、金堂と五  
 層の寶塔とを看  
 又行くこと  
 數町にして  
 茶臼山に登  
 り、真田幸  
 村が六連銭の號  
 旗を高く擧げて老雄  
 徳川家康の中堅に殺到し、  
 山の麓の邦福寺の游息軒に入

り、普茶料理を喫して寺僧と清談半日の後、瀛車に乗じて住吉の驛より  
 下れば、則ち住吉神社あり、神殿崇嚴、長松一路舒びて、沙明らかに波  
 青きのところに通ず、風景甚だ佳なり、近ごろ海水浴館を建つ、住吉の  
 次驛は則ち境、海岸の大濱といふに海水浴場あり、茅渚の海を前にし、  
 淡路の島影煙よりも青し、松に傍ふて酒旆相望む、これより南一里半に  
 して濱寺あり、海山の勝は大濱に優る、旗亭あり  
 西の宮停車場を距ること北の方二里、六甲山の麓武庫川の西岸伊字志村  
 に寶塚の温泉あり、車を通すべし、青嶂を負ひ碧流に枕み、亦た佳處と  
 なす、寶塚より生瀬を過り、新道を行くこと二里二十五町にして

有馬温泉

に至るべし、途上峯巒縈迂、溪谷亂流し巨巖甚だ多し、中に就いて天狗  
 岩尤も奇なり、別に住吉停車場より六甲山を越え瀧の川に傍ひて愛宕山  
 の麓を過ぎれば、行程正に三里、尤も捷路となす、唯だ路稍や峻、躋陟  
 の具に乏しき人の爲めには山輜あり、途中山海の奇なるあり、人をして  
 行路難を忘れしむ、有馬温泉は湯山町に在りて、往古より有名なる温泉



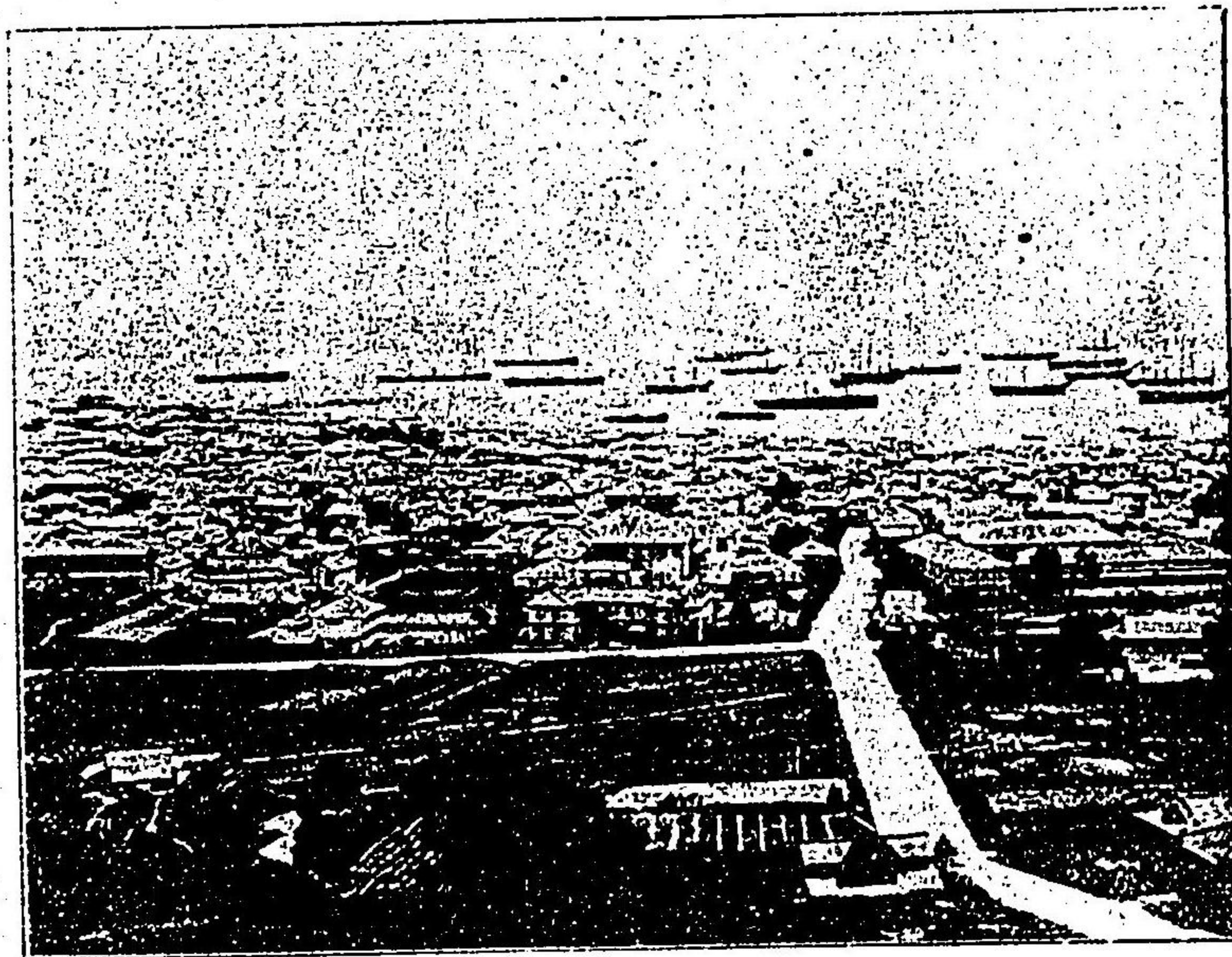


橋 鼓 太 吉 住

えがたし、我が膿血を吮ふものあらば  
膿血を吮ふ、乞丐の人忽ち身中より  
り、微妙の聲を放つて曰ふ、善哉  
善哉我は温泉山薬師佛なり、爾の  
誠心を試みんが爲めに、假に病者  
と現せりと、紫雲に乗じ去る、行  
基感嘆し、妙法經を寫して泉底に  
埋め、等身の薬師像を刻し、山麓  
に一字を建てこれを安置す、今の  
薬師堂是なりと、荒誕の説といへ  
ども亦た詩趣あり、其の後復た荒  
廢したりしを、承德の年、僧仁西  
草萊を開きて湯源を浚ひ、寺院及  
び十二坊を立て守湯の人を置く、  
後豊臣秀吉寺院を重修し、封田を  
納る、今の浴場は、明治二十四年  
に改築せるもの、構造は宮殿に擬

なり、舒明の帝、二たび此の地に  
幸して温泉に浴みし給ひ、孝徳帝  
も幸きして其の行宮の古跡を杉谷  
といふ、其後年を累ねて寒烟荒草  
の中に湮没したりしが、聖武帝の  
時僧正行基再び之を復興せり、温  
泉の舊記に曰ふ、僧正行基昆陽の  
池の畔を行く、乞丐あり渾身に悪  
瘡を發す、行基に謂て曰ふ傳へ聞  
く此より北に方りて有馬の山間の  
温泉あり、願はくは我を導きて往  
き浴するを得せしめよと、行基こ  
れを負ふて往き温泉に浴せしむ、  
乞丐曰ふ、毒瘡體に遍ねく、皮肉  
腐爛して蛆虫を生じ、痒きこと堪  
えがたし、我が膿血を吮ふものあらば  
輕快を覺ゆべしと、行基乃ち其の

膿血を吮ふ、乞丐の人忽ち身中より  
り、微妙の聲を放つて曰ふ、善哉  
善哉我は温泉山薬師佛なり、爾の  
誠心を試みんが爲めに、假に病者  
と現せりと、紫雲に乗じ去る、行  
基感嘆し、妙法經を寫して泉底に  
埋め、等身の薬師像を刻し、山麓  
に一字を建てこれを安置す、今の  
薬師堂是なりと、荒誕の説といへ  
ども亦た詩趣あり、其の後復た荒  
廢したりしを、承德の年、僧仁西  
草萊を開きて湯源を浚ひ、寺院及  
び十二坊を立て守湯の人を置く、  
後豊臣秀吉寺院を重修し、封田を  
納る、今の浴場は、明治二十四年  
に改築せるもの、構造は宮殿に擬



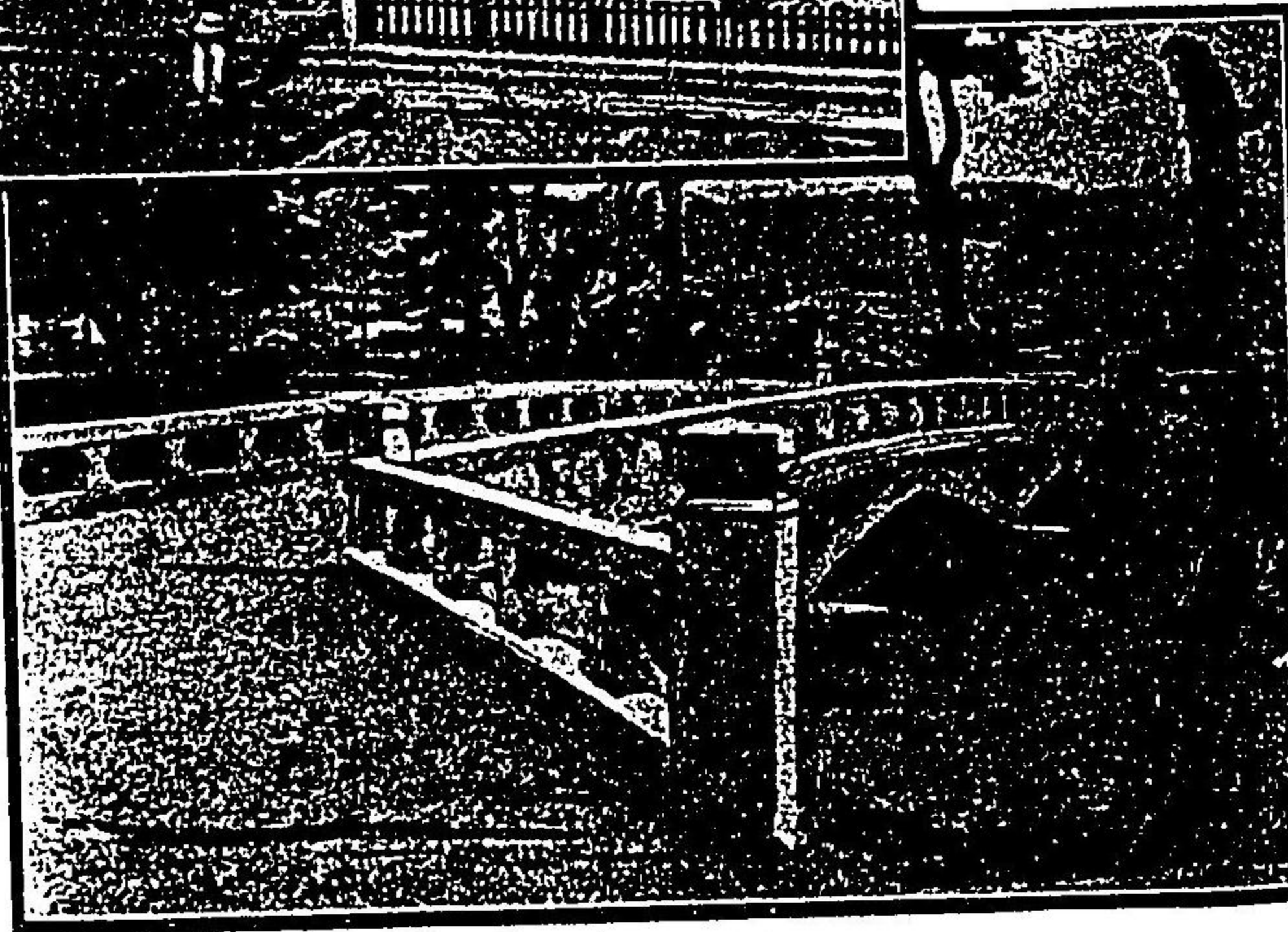
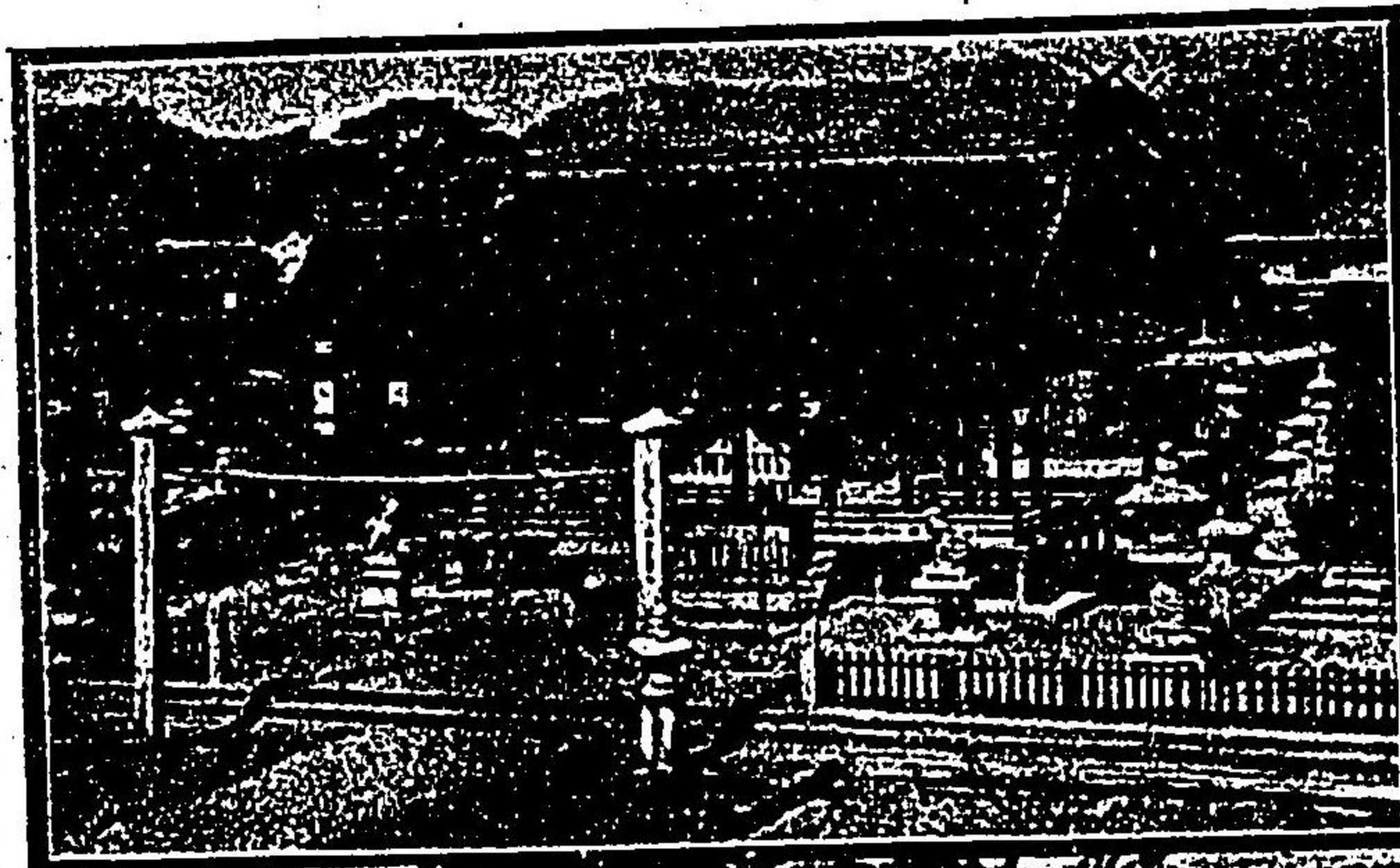
街 市 月 神



し、場内に別湯と並湯とあり、別湯は一室一人を限り、並湯は多人混浴なり、鹽泉にして酸化鐵の遊離する爲め、其の色黄濁、百病に宜し、別に新湯、妬湯、眼洗湯、炭酸湯、冷泉浴場あり、妬湯は形盆池の如し、盛装の女子其の泉傍に佇すめは湧潰して止まずといふ、旅館は一の湯二の湯と分れて各々十坊あり、今も昔の如く二十の客舎其の他の亭より下婢に浴衣を持せなせしめて、一の温泉浴堂に往きて浴するなり、其の往さ歸るさに随ひ伴ひて指呼の役を執る女を、往時湯女と呼び、老たるを大湯女、年弱きを小湯女と呼び、其通名を付けたり、髪容も定りあり、小湯女は宴席に出で、周旋し、有馬名所の唱歌を歌ふて興を助く、中には美人ありて四方に喧傳せらる、「松になりたや有馬の松に、藤に巻かれて寢と御座る」といふ歌の如きは、素麴坊の湯女阿藤の事といへるなりとぞ、左れと今は廢れてさる事なし、温泉寺の古刹、温泉神社、落葉山、鼓が瀧、白石が瀧、鼓が瀧は高さ三十六尺幅は其の半ばなり、楓樹多くして、秋晩の景甚だ美なり、瀑の邊に有明の櫻あり、有馬の六景といふあり、鼓が瀧が瀧松風、曰く有明櫻春望、曰く落葉山夕照、曰く温泉寺晚鐘、曰く神池山秋月、曰く有馬富士晴雪、名物は先づ有馬筆、竹細工、

湯染手拭、有馬焼、さて神戶の停車場を下りて、横濱と並稱せらる、大埠頭の繁華を看て、先づ訪ねば、川神社なるべし、神橋の西、多門通り、社殿莊嚴、補正成の靈を祀りしところなるは、三尺の童子

湊川神社



攝津湊川

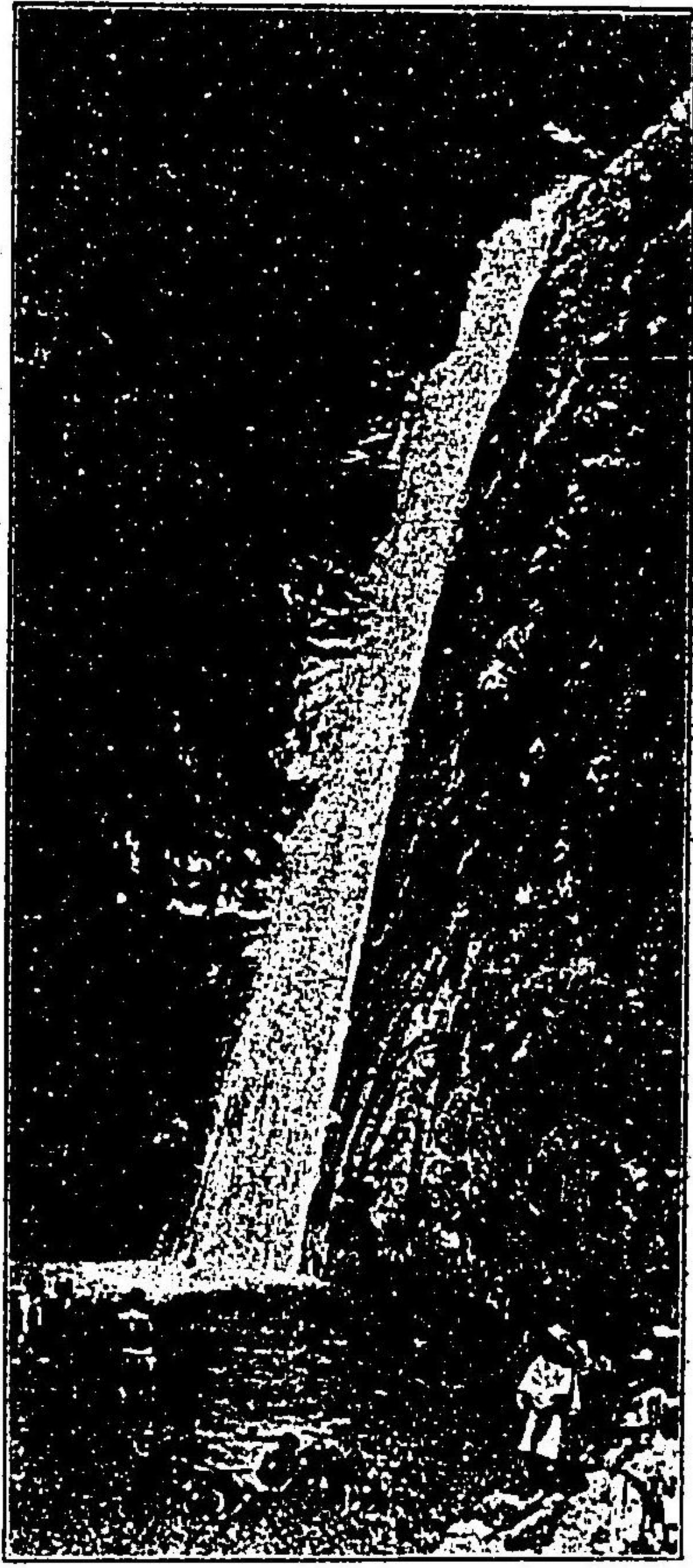
し、碑陰に朱子諭の撰するところ、楠公贊を刻す、元祿四年水戸黄門光圀の立るところ、墳は元と田崎

も亦た善く之を知り、門を入りて左は公の墳、落々たる長松の下に碑あり、高きこと一丈、嗚呼忠臣楠子之墓の八字を勒



の中に在り、唯だ一堆の土の上に梅松二木を植しのみと、醫王山廣嚴寶勝禪寺は湊川神社の北三町許に在り、後醍醐帝の時、元の歸化僧明極和尚の開基なり、寺の縁起の記に曰く、建武三年五月廿五日正成一族十三人郎黨六十餘人と共に、此の寺に入り自盡す、明極其の遺骸を葬る、今

の碑の在るところは其の地なりと、太平記に曰ふ「三時が間に十六度\*



布引の瀧に其の勢次第に減びて後には纒かに七

十三騎にぞなりにける、此の勢にても打破つて落ば落べかりけるを、楠京を出しより世中の事今は是文でと思ふ所存ありければ、一足も引かず、戦かつて機已に疲れければ、湊川の北に當つて在家の一村ありける中へと走入りて、腹を切らん爲めに鎧を脱いで我身を見るに、斬疵十一箇所

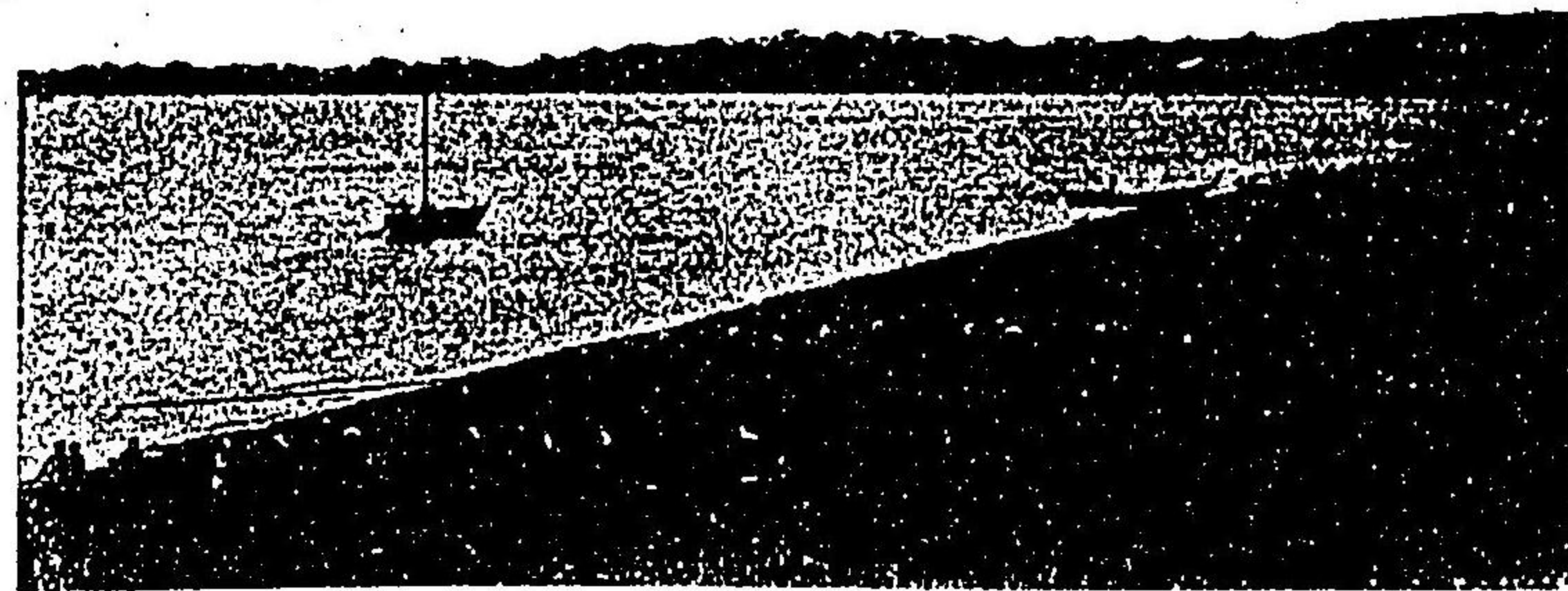
までを負ひたりける、此外七十二人の者共、皆五箇所三箇所の疵を被らぬ者は無りけり、楠が一族十三人手の者六十餘人、六間の客殿に雙居て、念佛十返ばかり同音に唱へて、一度に腹を切りたりける」といふはこの寺の客殿なりしか、古梅あり、曾て楠公墳上のものなりしを移し栽しものといふ布引山の半腹なる布引の瀧、雌瀧は高さ七丈半、雄瀧は高さ十五丈、雌瀧の前に長廊あり茶亭に接す、風なけれども自から清凉、盛夏を銷すべし

### 須磨、明石

- 須磨○源光寺○須磨寺○什寶○若木の櫻○鐵拐峯○一ノ谷○古行宮○敦盛の石塔○敦盛齋
- 夢○堺川○古風○鹽屋村○垂水○舞子の濱○其の風光○名産○明石○明石城○人丸
- 山○人丸祠○盲杖櫻○筆柿○雲井櫻○龜の井○權現山○月照寺○八咫梅○忠度腕塚○忠度
- 墳○尾上の鶴林寺○植髮の太子○古鐘○尾上神社○尾上の鐘○尾上の松○相生松○手枕松
- 相生橋○高砂○高砂神社○高砂の松○曾根天満宮○曾根松○古靈松○石寶殿○觀海處○
- 一ノ谷に保養院、海月館あり、停車場の邊に十數戸あれど眺望惡し、舞子には海濱に三



戸の客舎と旗亭を兼ねるものあり、左海屋、龜屋、保養院なり、明石に旅館多し、左  
 れど海岸に在りて眺望に富めるは園舟樓、衝濤館なり  
 神戸よりして兵庫驛、而して須磨、紀泉の山は遠く  
 して煙よりも青く、淡路の島は近うして喚べば應へ  
 んとし、青松をた白沙、隨處晴好雨奇の趣を添ふ、  
 「淡路島かよふ千鳥の鳴く聲にいくよねざめぬ須磨の  
 關守」と歌はれたる關の跡は、今も千守川の邊に一  
 堆の土を残り、光源氏の棲遅したりし宅跡は、源光  
 寺の在るところと傳へ、寺の門前に「見渡せばなが  
 むれば見れば須磨の秋」の蕉翁の句碑あり、上野山  
 祥福寺は即ち世に稱する須磨寺なり、光孝帝の時僧  
 聞鏡の開基するところ、古へは巨刹たりしが伽藍今  
 は落莫たり、寺什の中に敦盛の青葉笛、辨慶が若木  
 の櫻の制札あり、門前に老櫻あり、源氏須磨の巻に  
 ある若木の櫻とは是なりとぞ、驛の後に笠へたるは  
 鐵拐が峯、一の谷より二ノ谷三ノ谷と打續きぬ、義經が奇捷を博したる



濱の子舞

は此の邊か、一ノ谷より左りして山を上げれば老松扶疎たり、謂ふ是れ安  
 徳帝の行宮の在しところと、曾て整甲貂蟬紛として雲の如くなりしとこ  
 ろ、翠華一たび去つて澹雲微雨七百年、唯今只松風の昔時に似たるある  
 のみ、海に近く敦盛の石塔なるものあり、五輪塔なり、今半ば軟沙に埋  
 めらる、無官太夫敦盛は清盛の弟修理大夫經盛が子なり、一の谷の落城  
 に依て只一騎父の船を志し、一町ばかり游がせ浮きぬ沈みぬし給ふとこ  
 ろ、熊谷次郎直實これを招き、磯邊に戦ひ馬より組んで落ち、終に敦盛  
 を取つて押へ、首を斫らんとして内甲を見れば、十五六許の若上臈薄化  
 粧に鐵漿なり、こゝに於て熊谷心弱り我子と同年なるに、彌くあはれ  
 を催し、助け進らせんとは思へども、逃れたまふべき御身ならず、御善  
 提をば直實よくく吊ひ申すべし、草の蔭にて御覽せよと、目を塞ぎ齒  
 を食ひ合はせ御首を搔落す、平家の人々は討るゝまでも情を捨てず、色  
 なつかしき漢竹の笛を香もむつましき錦の袋に入れて、鎧の引合せに挿  
 されたり」とある其の若上臈薄化粧の香骨を瘞めたりしところか、或は  
 曰ふ此の塔は鎌倉執權北條貞時、平家一門戦死冥福を修せんが爲めに作  
 るところと、敦盛塔の傍に敦盛蕎麥といふを賣る家あり、何代の人が創



めたりしかを知らず、思ふに此の邊は攝州播州の境にして人家絶えたる  
 ところなれば、旅の人の爲に構へたる茶賣店の、何時とはなく蕎麥屋と  
 なりたるものならん、其の家に語り傳はりし歌あり曰く、『そばは敦盛、  
 めんばいは義經、盛は熊谷の大茶碗に鐵拐やまもり、夫を知りつゝ、九郎  
 判官、うどんは色の白い玉織姫、酒は一ノ谷の源平躑躅の諸白、座敷は  
 千疊敷、泉水は帆掛船、紀州熊野浦までやりつ放し、お茶はせつたい薩  
 摩守たいのみ、御遠慮のお方は悪七兵衛、喰逃げしたる武藏坊辨慶、草  
 鞋は熊谷とんばのわらじ、破れるまでは受合』と、敦盛塔より西四五町  
 ばかりのところを流るゝ小川を堺といふ、『蝸牛つものふりわけよ須磨明石』  
 とど芭蕉の歌ひたる、攝播二州の堺なり  
 朝霞暮煙、さながら繪の如き此の須磨の浦は、更に源氏の君、行平の風  
 流、平家の一門翠華を擁して此の里に尙ほ昔日の夢を見たりし事などを  
 粉彩して、いまだ往き看ぬ人をして神往せしめ、既に往き看し人をして  
 心酔せしむ、西須磨には、今に門に簾を垂れたる家少しあり、一ノ谷の  
 城いまだ成らざりし時、安徳帝を始め奉つり平家の一門、民舎に入りて  
 宿し、往來の人に宅内を見られじと簾を懸けて遮蔽せしが、此の風今に

傳はりしものとぞ  
 堺川の西は則ち播州の明石の郡、遊履の先づ印するところは鹽屋村とい  
 ふ、鹽屋よりして垂水村、住吉明神を祀れるの祠あり、舞子の停車場の  
 在るところ  
 舞子の松の美にして浦の景色の妙なるは、天下に藉甚して兒童も亦た皆  
 なこれを書き記す、この濱は西垂水の村の端より山田の村かけて東西六七町、  
 南北は二三町の松林にして、幾千章の古赤松、いづれも其の梢を齊しう  
 して高さは概ね二三丈に超ゆるものなく、枝幹盤桓して其の高きは舞ふ  
 が如く、低きものは地を距る數尺、蒲伏するが如く、葉色殊に鮮麗、萬  
 斛の群青を揮灑するも、這般の彩色を作す能はざるを思ふ、一樹に一味  
 の趣態あり、百樹に百味の風韻あり、千樹萬樹其の趣態風韻同じからず、  
 下は則ち白沙さながら碎玉を布けるが如く、波瀾は晴に笑み雨には愁  
 ひて、蕭々として汀を掃ひ、白沙の上に奇文を描き留めて聲を收め回る  
 様、長閑くも静かなる景色なり  
 淡路の島は正に一里の波を隔て、前に在り、美晴の時には漁舍蛭莊、手  
 を揚げて呼べば應へんばかりなり、右は明石の浦、松翠と波青と、洗洋

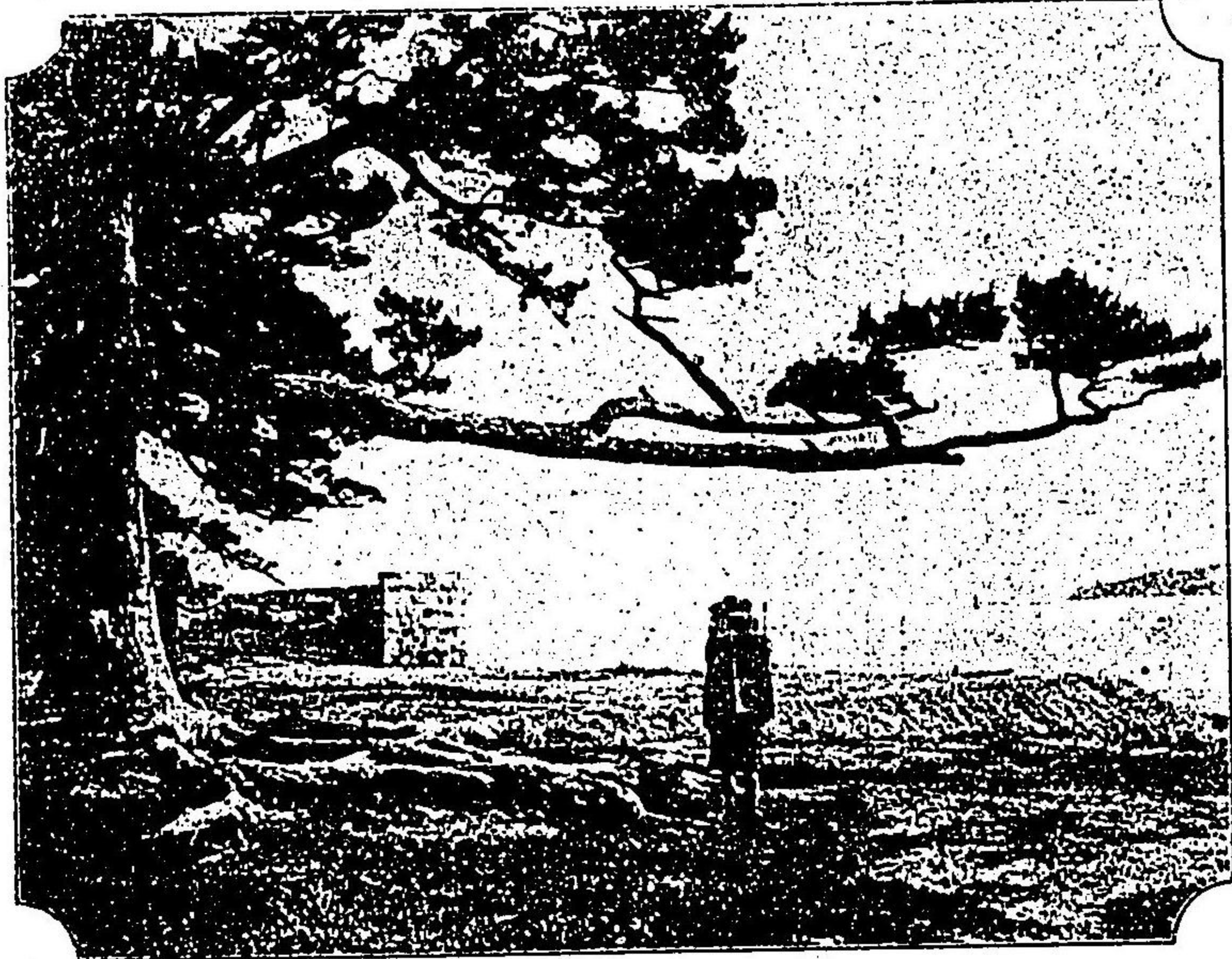


として一色をなし、空碧半天に浮動するのどころ、白帆ノへとして相逐ふて行く景色は、言はんとすれど言を忘る、ばかりなり

この愛すべき一帯の松林には、多く松露を産す、名産には舞子焼なる陶器あり、山陽鐵道の軌路は、正に垂見の驛より走りて遊女塚、五色山を左に看て恰かも此の松林の中央を穿ち進むなり、千松萬松風を含んで清涼の氣人を吹き、老翠車窓より照して衣帽青からんとす

斯くて瀛車は一路繪の如き舞子の姿を過りて、人丸山の邊を度り、終に明石の停車場に停る

深樹の中に壁牆の高く聳るものは明石の城にして、元和年中小笠原右近太輔の作るどころといふ、今公園となる、公園に續ける丘陵は、則ち人丸山にして、有名なる人鷹廟はこの山の上に在り、祀るところの木主は身長七寸、勸請の年は詳らかならず、古しは城内の地に在りしを後此に移したるものなりとぞ、人鷹は石見の國の人なり、持統文武兩朝に仕へて歌聖の名あり、享保八年は正に一千年忌に當るを以て正一位を贈らる、石見の高角山にも祠廟あり、其の石州より京都へ往く途次、此の明石の村を過ぎりて浦の景色を眺望し「ほの」と明石の浦の朝霧に島かく



磯の子舞

門前の茶亭よりの眺望は、實に須磨、

れ行く舟をしぞ思ふ」と歌ひたるに縁由にして、これをこの山に祀りしなり、社前に盲杖櫻といふあり、曾て筑紫より替者來りて祠に賽す、詠じて曰ふ「ほの」と誠わかしの神ならば我にも見せよ人丸の塚」と、眼忽ち明らかなり、歡喜すること極りなし、携さへ來りしところの杖を地に植ゑて去る、杖活て根を生じ終に花を開くに至ると傳ふ、別に筆柿あり、雲井の櫻あり、西の華表の傍らに龜の井あり、清泉涓々として湧く、門より入りて左に一基の石碑あり、林道春撰するところ人丸の頌を勸す、明石一帯の風光を占斷すべし、人



丸山の東に権現山あり、松林の中に権現祠あり、眺望の佳絶なるは人丸山を抜くこと一等、人丸祠前の茶亭に、ほのく糖、盲杖さくらの花漬、八房の梅漬を賣る、人丸祠の西隣に月照寺あり、庭中の船形なせる古梅樹は赤穂義士間瀬久太夫の栽るところと稱す、花は淡紅にして毎朶に八子を結ぶ、八房の名ある所以なり、長壽院の前、鐵道線路を隔て、十數歩にして一小祠あり、薩摩守忠度の腕を瘞めたりしところと、此邊の町の名を腕塚といふ、其の岡部の六彌太と接戦して終に殺すところとなりし、兩馬川は、人丸山を東に下りしところに在り、水涸れたる一細川なり、大藏谷村の西、字忠度町に忠度の墓あり、會つて「行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし」と歌ひし人の埋骨の處、墳上唯だ一孤松の清陰を布けるのみ、大歡橋より西し、更に左に折れて行くこと十町許にして望海の濱あり、淡峽の囑望甚だ佳なり

尾上、高砂、會想天神、石寶殿

山陽鐵道第七次の驛なる加古川は、則ち所謂播磨名所巡りなるもの、首途なり

驛の南二十五町にして刀田山鶴林寺なる古刹あり、用明帝の時、聖徳太子、秦川勝に命じて精舎を建てたるのころ、伽藍は三間四面、釋迦三尊、四天王の像を安置し、内陣の四柱には八大金剛童子を、四壁には三千の佛像を繪き、龕中に聖徳太子十六歳の時の像を置く、像の頭には太子の髪を植へたりとて世に植髮の太子と稱す、琳宮今は大に荒廢し、太子堂、本堂、鐘樓、三層の寶塔を殘すのみ、其の鐘樓に懸るところの古鐘は、攝州鶴滿寺及び尾上の鐘と齊しく、千數百年を歴たるもの、鏽華滿面、其の色蒼玉の如し

鶴林寺の南十餘町にして、尾上神社あり、住吉大明神を祀る、社記に據るに、此の地元と灣深く波靜かにして四方の賈舶を泊し、尾の上より高砂に至るの間、人烟稠密、繁華なる一埠頭なりしが、年遷り星換りて海次第に淺くなり行き、泊舟に便ならず、尾上と高砂とは自づから相距ること十町許となりたりと、左れば尾上と高砂とは元同一の地なりしは、古歌に高砂の尾上の浦と言ひ續けたるにても明けし

音に高き尾上の鐘は、尾上神社の前なる一舎の中に懸れり、高さ三尺二寸、周圍七尺二寸、厚さ一寸九分、徑二尺五寸、疣三十六個、花形四寸、



神功皇后の三韓より齋らし來りたまひしものと、これを鳴せば盤渉調の響ありといふ、賽者皆な撫摩してこれを看るが爲めに、鐘面潤澤、古蒼の色人の顔色を鑑すべし、神社の背後なる松林は、則ち尾上の松なり、高松風を啣んで、青うして陰らんとす、常に松露を生ず、社畔に相生の松あり、雌松雄松根を同じうして生ず、初めて栽しところの松より正に三代の孫といふ、其祖樹の老幹は今社務所の正堂に安置せらる、木理堅硬にしてこれを敲けば金石の聲を作す、相生の松に隣りて都戀しき片枝の松なるものあり、枝皆東に嚮ひ西には一枝だにあらす、尾上の東一里餘、別府村の海岸住吉神社の前に、手枕松なるものあり、清陰數十歩の地に布き、枝幹假蹙す、蓋し千年外の物、凡そ此の邊、海濱の眺望甚だ明媚なり

尾上より西八町ばかり、加古川の下流に架せる相生橋の長橋を度れば、即ち高砂の町なり、高砂神社は其の海岸松陰り沙晴れたるところに在り、素盞雄尊、稻田媛、及び大己貴命を祀る、社前に在るところの相生の松は、世に高砂の松と稱し前者に較ぶれば更に美觀なり、其の初代の松は天正年間、羽柴秀吉三木の城を攻むるの時、小早川氏吉川氏の軍二萬餘

騎、城の急を救はんとして藝州より星馳し來りて、此の邊に露營し、松を斫て篝火となし、松終に枯る、後慶長九年池田輝政命じて枯根の上に祠を移すと、松に傍ふて尉姥の祠あり、其の像を置く

所謂會根天満宮古、加古川より西南凡そ六里半の會根村に在り、長松落落中に古廟あり、菅公及び天穗日命猿田彦命を祀る、延喜元年、菅公左遷の時、舟を伊保の港（今の伊保崎村）に寄せ、檜笠の岡に登りて海山の勝を看、其の幽懷を舒べたるのところに此の廟を建つと、廟宇莊嚴なり、會根の松は廟門の内右方に在り、傳へ曰ふ、菅公手づから此の地に稚松を栽え、天を仰ぎ祝して曰く、我に罪なくは繁成せよ、以て我に罪なきを證せよと、松果して繁成し、天正の頃に至り周圍一丈八尺に及びべりしを、三木の攻城の時兵燹にかゝり損傷し、寛政十年に至りて全た枯稿す、其の未だ枯れざるの時、天明八年の春、老樹の下に自から實生の松を生じ、成育尤も旺盛、今に至るまで百十餘年、幹の大さ三圍に餘り、高さは三丈を超え、坤より艮に至る凡そ二十餘間、西東十七八間の間に亘りて鬱乎として蒼々然たり、凡そ播州の名所は松を主となす、中に就てこの松尤も群を抜けり、其の老松の幹は一堂宇を作りて中に安置



す、匾して古靈松といふ  
 石の寶殿は曾根村の東北一里許、生石村の山中に在り、一に静が窟といふ、石殿を神としてこれを祀り、生石神社といふ、石殿の状は、宛かも巨巖を劈截して社殿を作り、更に故さらに横まにこれを推倒したるが如し、四方三間半、棟は二丈六尺、屋は西に向ふ、上に赤松ありて生ず、誠に鬼斧のものといふべし、寶殿の四邊には一水緩やかに環り、殿は水に浮べるが如し、傳へ曰ふ、大己貴命、少彦名命と共に一夜に石殿を作る、將さに成らんとして鶏鳴、乃ち捨て、去ると、萬葉集に生石村主真人の

おほなむちすくなひこなのいましけん静の岩屋は幾世經ぬらん  
 と歌ひしは是れなり  
 寶殿の南なる一小峯に、觀海處の三大字を勒せる巨巖あり、姫路の儒士永根文峯の撰するところ、播州洋一帶の風光、雙眸の中に在り

### 備山藝水

網干の港○鷓足寺の古趾○神の投石○家屋群島○家島神社○室津○唐荷島○加藤神社○其

の風光○小阜月の祭○遊女の初○室の君○名妓○舟坂○開谷學校○鷓湯温泉○院の庄○作樂神社○西大寺○會陽○岡山市○後樂園○旭川を下るの記○吉備中山○吉備津神社○細谷川○御釜の鳴動○古史○淡溪○福山城○鞆津○其の風光○日東第一形勝○對潮樓○阿伏門觀音○尾道○其の風光○千光寺○寶珠岩○西園寺○淨土寺○絲崎浦○淡菜松○廣島市○網干は繁華の港、四國への渡船もあり、室津も亦た古繁華の地、旅館の清潔なるもの多し、

鷓の湯には柏屋、龜屋、加茂屋、和泉屋、岩見屋等あり、岡山には、三好花壇、自由舎、三好野、魚嘉、池田、武藏野、魚春等は旅館の重なるもの、福山には風月樓、粟定、松村、大瀬崎等あり、鞆津には丸常、魚吉等あり、對潮樓に遊ばんとする人は此等の家に命じて事を周旋せしむれば坐して日東第一勝を見るを得べし、尾道には天誼樓、濱吉、富嘉、平尾、丸山、なが久あり、廣島には、渡谷、よし川、岩田屋、武田、三よし屋、山長あり、網干の驛に近く網干の港あり、魚鹽の富をもて西播著名の港、古史に其の名を留めたる峯相山鷓足寺は、何時の頃にか炎上して伊勢村の山中に經塚を遺し、石鞍村に斷礎を見る、其の寺境は應に二三里に亘りしなるべし、其の伽藍の廣大なりしことを想ふべし、亦た好古者の節を曳くべきのところ、港の西刈谷の濱に巨巖の狼藉たるもの、呼んで投石といふ、海濱一帶矚目甚だ明媚、『神のさちさ』はへあらしとみそなはし海の投石八



千矛の神」と古しの人の歌ひしところは此なり、家島の群島は播磨灘の西北の濱を距ること三里若くば五里の海上、東西八里、南北三里の間に恭布したる數十箇の小嶼にして、恰かも陸奥の松島に似たり、中に就て家島は碧灣波静かにして、去來の船の安全に風濤を避くるを得ること、猶ほ家に在るがごとくなりといふを以つて名け、家島の名は、終に群島の上に冠せらる、家島の灣の邊に家島神社あり、千年外の古祠なり、猿田彦の尊を祀る「明けぬとや浦の家島なく千鳥また天の戸は月ぞさしける」舟を倩ふて、遍ねくこの三十餘箇々の青螺を巡り看るを、島廻りと稱す

室の泊、室の浦と稱し、曾て山陽の大埠頭たりし室津は、龍野驛を距る南二里半のところの所に在り、翠嶂三面を環り金崎の地沙遠く松遙かに斜めに海に入り、潮徐かに波穩かにして、中國四國九州へ徂徠するの舟、慈母の懷に就くが如く集まり、播州の一繁華地なりしも、今は唯だ人口二千餘あるのみ

室の浦のせとの崎なる鳴島のいそこすなみにぬれにけるかも山のはにはてりせぬ夜は室の海にあまはひよりといつる舟人

是れ萬葉集中に在るところの古歌なり、湊の口に三島ありて雁次す、地の唐荷、中の唐荷、沖の唐荷といふ、曾て唐船の珍寶を載せてこの湊を過り、礁に觸れて將に覆没せんとしたりし時、貨物を此の島に揚げたるのところにいふ、明神山に加茂神社あり、呼んで室の明神といふ、亦是れ千年外の古廟にして五攝社六末社あり、茂林の中に丹碧相望む、社後の山を嫦娥山といふ、東の山を城山といひ、藻振の山海に入ること數丁、唐荷の島は前に在り、小豆島及び四國の山影、遠警遙巒、澹として烟らんとす、若し夫れ明月嫦娥の峯より出で、播磨の海、水島の洋かけて霽れし夜は、激漚の波と錯落の島と相倚り相分れ、空水の中に好模様を作

る

曾て此の社に、小臯月の祭なるものあり、此の日室津の遊女數十人、錦の袴を穿ち紫の帽子を戴き、横笛、太鼓の音に随ふて棹の歌なる唱歌をうたひ、袂を聯ねて神輿の後へに随ふ、華麗なること京都の祇園會に匹敵すべかりしと、今は則ち廢す、蒼崖の上の在るところの繪馬堂、堂中掲るところの神馬の匾額は、狩野元信繪くところにして、潑黒漆の如く奕々として精神あり、社に平重衡の琵琶一面を藏せり



本邦遊女の濫觴は、實に室の津に在りといふ、往昔花漆なる女あり、姿體端麗にして書に巧みに和歌を善し、聲曲歌舞を以て游燕の興を謀く、室の君の名、徂徠の船に載せられて八方に喧傳す、花漆元此の地の長者、萬金の富を致す、乃ち喜捨して五精舎を建立す、今多くは荒殘すと、後、宮城野、友君、大柄杓なる名妓あり、亦た花漆の亞流といふ、有年驛より三石驛に至るの間、瀛車は船坂山の隧道を過ぐ、兒島備後三郎高德が戀興を奪ひ奉つらんとしたりしところ、吉永驛の南一里にして有名なる閑谷學校あり、新太郎少將が碩儒熊澤蕃山を聘して、子弟を薰陶したるのころ、後延寶二年聖堂を建て、元祿十四年孔子像を安置し、堂を大成殿と號し、十五年講堂を造る、結構都て唐様、山低く水長く竹樹幽邃、誠に絃誦の地なり、祠あり光政侯を祭り芳烈廟といひ、後改ためて閑谷神社といふ、今は西薇山の私塾を開くあり、和氣驛の北に驚の湯温泉場あり、驛より吉井川を遡ぼること正に七里、別に有年驛より腕車を備ひて、上郡より上月を過ぎり、土居時を踰えて土居の宿に入り、江見川に傍みて行き、倉敷町を経て、湯の郷なる驚の湯に達すべし、鹽垂の秀峰青嵐座を照し、吉井川の清瀬杖に通ふ、更に

小舟を浮け垂綸打魚せば風興尤も多し、浴場は洋風の家屋にて四槽に温泉を湛ふ、透明にして些の鹹味あり、湯の郷より西北六里にして津山の城あり、津山より一里にして院の庄の遺蹟あり、元弘二年後醍醐帝隠岐遷幸の途次、其の三月十七日此の地に變興を停めたまふ、夜闌て碧櫻花寒きの時、兒島高德の樹を白して十字の詩を書きたるのころは此なり、今遺趾のところに作樂神社を建つ、瀬戸の驛に近く金陵山西大寺あり、驛を距ること二里許り、吉井の川の西岸なる西大寺町に在りて、天平勝寶年中藤原氏の女皆足の創造するところなり、千手觀音を安置す、古は金岡莊にありしも寶龜八年僧安隆兒鳥の海槌の戸にて靈犀の角を得、今の地を相して之を埋め、上に伽藍を作り、初め犀戴寺と稱したりしを、足利尊氏これを西大寺と改め呼びたり、毎年正月元日より二七日の間、會陽なるものを執行し、國家安穩、五穀豊穰の祈禱をなし、結願の夜に至り午王を參詣の人に授與す、これを受るものは財寶福壽を獲といふて、會陽の夜、四方より集まり來る者萬を以て算ふべし、皆な被髮裸體となり、吉井川に下りて垢離し、午王堂を環りて僧の手中より撒下せらる、午王を拾ひ獲んと喧囂し、相踏藉



し相蹂躪し、吶喊の聲數里に聞ゆ、一人午王を獲、僅かに身を以つて免  
 かるゝに及び、乃ち解散す、亦た一大奇觀なり  
 長岡驛を過ぎ旭川の鐵橋を渡れば、車の停まるところ則ち岡山市、市の  
 廣さ東西二十町、南北一里、八十三衢あり、人煙甚だ稠密、岡山城、雄  
 然として天主閣立ち、舊時の壯觀を存す  
 城の北に有名なる後樂園あり、實に日本三公園の一、池田綱政公の經營  
 するところ、林泉の美此の如きは希なるところなり、明治四年、公園と  
 なす  
 旭川の清瀬に架する鶴見橋、長寛の水に飲むが如し、橋を過ぎれば則ち  
 後樂園の北門、短牆逶迤として度る、中に暫軒あり、旭川の瀬聲靡に満  
 ち、近翠遙碧楳間を照す、綠竹傍に猗々たり青、餐すべし、門に入りて  
 右すれば黄茅の一字、甚だ異趣あるあり、鶴鳴館といふ、館の前古松あ  
 りて假蹇す、蓋し數百年外の物なり、鶴鳴館に隣りて延養亭あり、曾て  
 池田侯の諸藩よりの使節を饗應したるのところで、今上、西狩の時、一ひ  
 此に駕を駐めたまふ、軒簷高敞近く城の天主閣、瓶井山の三層寶塔と相  
 對し、園中の諸勝雙眸の中に集まる、亭の前、石古苔香し、白鶴あり松

華を啄みて優遊し、甚だ人に馴れ親しむ、亭の西に望湖閣あり、歩廊斜  
 に延養亭に至る、閣前の花葉池、漣漪笑めるが如く倒涵の閣影を鍍む、  
 池畔を過ぎれば、石逕委蛇して茂林の間に入る、四に人語なく唯だ幽禽  
 の聲あり、人をして深山の中に獨往するの想あらしむ、細逕自から人を  
 導いて茂松庵に至る、池田侯の茶噺を張りたるのところで、結構素朴、頗  
 る雅致に富む、老松あり庵前に假蹇し、鐵枝横さまに庵の簷を掠め、晚  
 翠の色壁を照す、曾て石鼎、蒲團、茶を啜りて松籟を聴きし風流を想ふ、  
 松を隔て、四天王堂あり、更に松を隔て、地藏堂あり、南門の東に簾池  
 軒あり、高丘に在り、座して園中の勝を看るべし、屋背は修竹千竿、常  
 に風を含んで聲あり、新青愛すべし、竹林を隔て、旭川の碧水を見る、  
 軒の前は則ち簾池、池の滸りに古藤あり、雨架をなす、一は花白く一は  
 花紫なり、傍に臥龍梅あり、花白く香高し、更に蘇鐵樹數十幹あり、亭  
 々として大葉風を簸す、其の東に小池あり、燕子花あり、八板橋を架す、  
 所謂八ッ橋なるもの、八橋の北に流店あり、店の前に一水來り、中に石  
 を基布す、池畔の板堰を撤すれば、奔流石に激し、鳴つて店下に入る、  
 流店の東に櫻樹林あり、林を穿つて行くこと數十歩にして古梅林あり、



竹林其の香を護り、一門其の香を關す、門は則ち東門、凡そこの園の勝を總攬するに唯心山あり、正に園の中央に在り、亭あり唯心堂と名く、山の北別に島の茶屋あり、亭前の池に三小嶼あり、蓮花多し、更に園の東北に新亭なるものあり、千入の杜あり、楓樹多く、秋晚落暉の時、紅於の色林燃んとす、是に於て後樂園の勝盡く

旭川を下るの奇は、上卷に詳説したる富士川を下るの奇の如し、先づ船を備ふて作州落合の宿より下る、福渡しといふに至り、終に奔湍となる、懸崖の蒼巖を削りて、南無阿彌陀佛の六字を鐫せるあり、字の大きき如し、水死者の冥福を修せんが爲なり、更に行くと數里にして鑽子の蔓と稱する急瀬あり、奔馳の水は瀑布をなし、躍つて深淵の中に入る、水路中尤も險惡のところ、糟谷の渡頭に至るに及びて白石磷々、碧流其の間を行く、水に傍ふて修竹林あり、景物太だ清新なり、終に岡山に至りて舟を捨つ、笛師歌ふとみろの歌の一に曰ふ、「妾しや備前の岡山産れ米の生る木はまだ知らぬ」と、昔し極罪を犯したる一女囚あり、終身獄に在り、其の始めて獄に投せらるゝや正に孕む、終に一子を産む、子も亦た母と共に獄に在りて身を終ゆ、怨恨してこの歌を作る、國人聞いて

これを哀れみ、傳へ歌ふて今に至るといふ

庭瀬驛より車を下れば、一里にして彼の嚴島の祠廟と其の華麗を争ふの吉備津神社あり、備中の國賀陽郡真金村字宮内の吉備の中山に在り、凡そ吉備津神社といふもの備前、備中、備後の三國に各々これを奉祀す、中に就て此の賀陽郡の吉備の中山に在るもの主廟たり、其の規模の壯大なる結構の華麗なる、山陽道中の稀に見るところなり、國道の傍に花崗石の大華表あり、大いなること日本第一と稱す、これを入れれば老樹鬱葱、清邃の氣、人の脾肝に入る、石磴を登れば三社の總拜殿あり、これに接して拜殿あり、結構壯麗なり、拜殿の西に迴廊あり、細谷川の古蹟に至る、長さ百八十間、迴廊の盡るところ豊碑あり、勤して曰く吉備中山細谷川の古蹟と、真金吹く吉備の中山なひにせる細谷川の音のさやけさど歌はれしところは是あり、碑陰に古今の名歌を鐫む、碑の左は則ち魏々たる本殿、右は細谷川に至るの徑路なり、川に傍ふて行くこと五六町にして茶臼山に至る、則ち吉備津彦命の墳なり

迴廊の中央より西に分岐したる小廊を行けば、其の盡るところに御釜の御殿と稱する堂宇あり、賽客錢を獻じて吉凶禍福を卜ふ、阿曾女と稱す



る巫女、柴を竈に燃し、供米を篩に入れて御釜の蒸氣にむすこと少時、釜即ち鳴動す、若し吉なれば其の聲雷の如く、曾て國道往來の諸侯をして其の聲を怪しみて馬を立てしめたることあり、若し不吉なれば其の聲低く茶釜の沸くに似たりと、吉備津彦命は崇神帝の時の將軍なり、時に百濟の王子温羅なるものあり、身幹槐梧にして鬢髮赤く眼に紫稜あり、慄慄にして亂を好む、終に本邦に航し、居を備中加屋郡新山に占め、城壁を築き、貢賦を奪ひ、無辜を殺す、人其の居るところを稱して鬼城といふ、將軍大旆を進めて吉備の中山に陣し、片岡山(今の楯築山)に石楯を築き、これと大に戦ふ、賊軍旺盛なり、命乃ち陣頭に立ち、箭を放つて温羅を射る、空中に敵矢と相中り飛んで海中に落つ、後世其處に祠を立て矢嚙の宮といふ、一矢は温羅の左眼に中り、流血河に濺ぐ、後世其の地を血水川といふ、温羅走りて山に入る、命これを追撃す、温羅をた走つて血水の川に入る、命斫つてこれを傷く、温羅力盡き面縛して出で降る、命壽二百八十餘歳、吉備の中山に薨す、仁徳帝の時、一宮大明神の號を賜ひ、勅して神殿及び未社七十二宇を創立せしむ、是れ吉備津神社なり

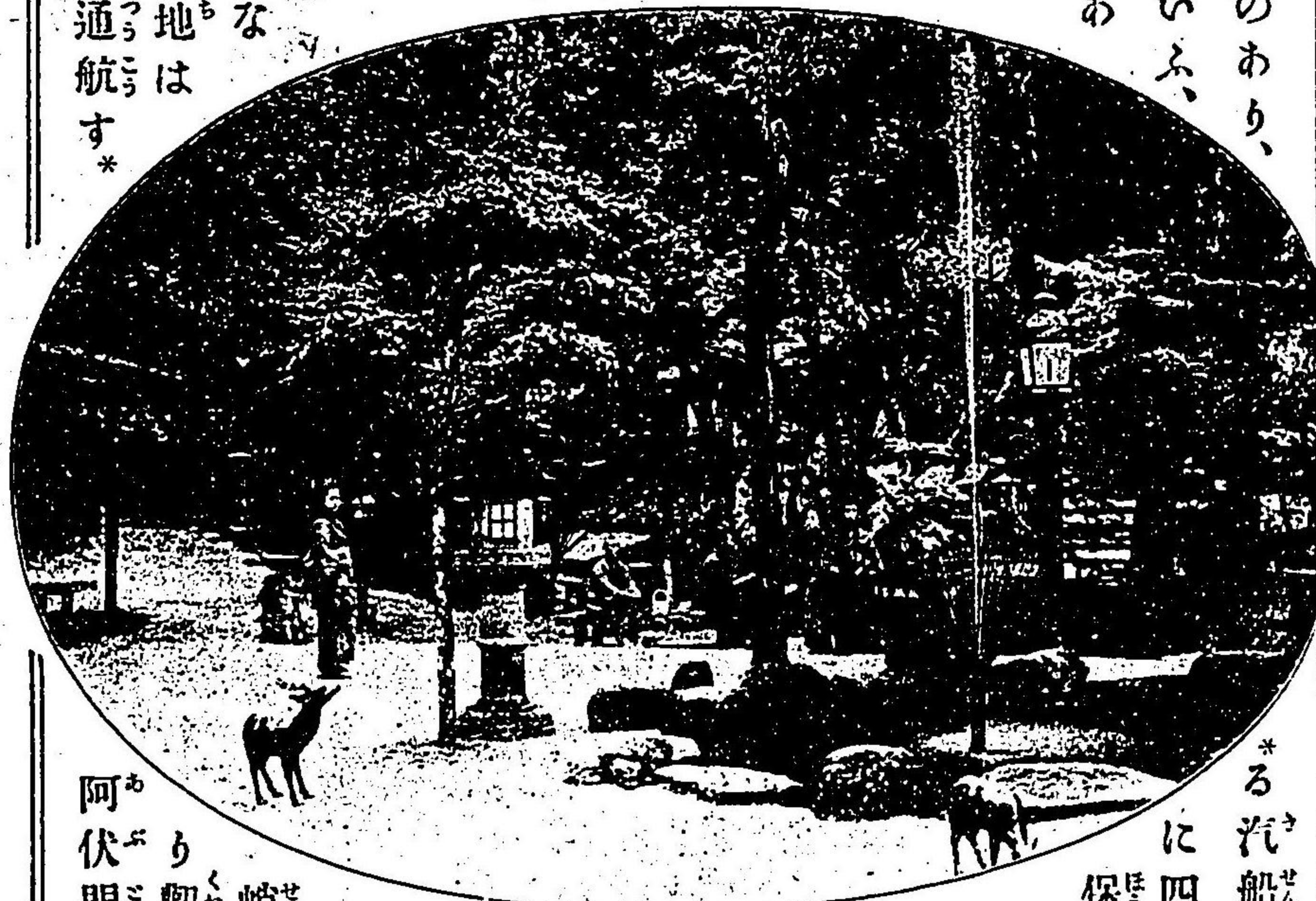
倉敷停車場より、高梁川に沿ひて遡ぼること三里にして、井尻野村を過り、更に行くこと二十町にして、一小橋を渡り、楨谷川に沿ひ、山溪に入ること一里餘にして楨谷村に至る、豪溪の奇勝の在るところ、楨谷川の碧溪に臨みて巉巖磐頭皴を作し、嵒嶮として雲中に聳ゆ、老松嵯峨として其の間に點綴し、赤根露出して巖岩を繚繞す、碧溪の上り、水に骨あり石に肉なし、赤脚にして礪石を踏み、仰いで此の摩天の巖を看る、人をして氣魄を動かさしむ、前面巨岩の邊に、天柱の二大字を鐫するあり、曾て備前儒士某來り遊び、大筆を揮つてこの二字を題し去る、里人其の墨痕のところを就てこれを鏤刻したるものと、古昔其の面を掩ひ、遠望讀むべからず、漸やく近うして彷彿として僅かに讀むべし、亦た一奇觀なり

玉島、鴨方、笠岡の長短亭を度りて、而うして福山驛、繪の如き福山城、巍然として雲表に聳ゆる五層の天主閣は、實に高きこと一百二十五間二尺、福山市街を一眸の下に收め、北に青葉山、西は葦田川、而うして南は福山灣を下瞰し遠山近水指願の間に在り、葦陽館なるものあり、福山人士の俱樂部、亦た登臨の勝あり、妙見山より海に沿ふて南すること二



里餘にして、輶津あり、  
 輶の津の名は、古より人口に膾炙す、神功皇后の征韓の時、此の地に兵  
 船を儀装し、軍餉を整備し、輶をもて神明を祭りし故事あるより、輶の津と  
 稱すといふ、水には千櫓を簇らし、市には萬口を有す、而して「日東第一  
 一形勝」と稱する、福禪寺の對潮樓あり、樓は浦の東岸にありて坐して海  
 山の勝を看るべし、東は辨天島を隔て、仙醉島と相對し、南には皇后島、  
 走島等、青螺數十碧水上に基布し、遙かに伊豫讚岐の峰巒を煙霞の中  
 に見る、辨天島の上、隱々として祠廟あり、これ辨天祠、仙醉島は全島  
 皆な松、島に六灣あり、其の西南の灣中に海水浴場を設く、西は玉津島、青  
 津輕島、形ち春筍の如きあり、覆荷の如きあり、其の上は皆な稚松、青  
 波紫嵐、楯欄の間に浮動す、正徳元年秋九月、朝鮮の聘使李邦この地を過  
 ぎりて風光を嘆美し、日東第一形勝の六字を書して寺僧に與ふ、今、樓  
 の楯間に掲ぐるものは是なり、後寛延元年夏、朝鮮聘使歸帆の途、此の樓  
 に上りて詩を賦し、洪景海なる人、對潮樓の三字を書して僧に贈る、今尚  
 は存す、福禪寺に隣りて更らに圓福寺あり、又た市街の西北の青嶂の下  
 に沼名前神社あり、素盞雄命を祀る、境幽にして規模大なり、神社に近

く小松寺なるものあり、  
 平重盛の創建といふ、  
 町の西に醫王寺あり、  
 り、亦た大寺、  
 若し夫れ黄昏華  
 鯨靜かに鳴るの  
 時、漁夫皆な家  
 に歸り、其の獲  
 たるどころの魚  
 を、其の妻をし  
 て市に呼び賣ら  
 しめ、またこれ  
 を福山の市に致  
 す、一好詩料とな  
 すに足る、此の地は  
 大坂馬關の間を通航す\*



る汽船日夕に寄港し、別  
 に四國に至るの船あり、  
 保命酒、鮓はこの地  
 の名産なり  
 輶津より海に傍  
 ひて西行するこ  
 と一里、千年村  
 に至れば一峯横  
 さまに海に入り  
 て峙つ、阿伏門  
 の岬といふ、梶  
 子の瀬戸を隔て  
 田島と相對す、  
 峭巖の上に大悲閣あり  
 阿伏門の觀音を安置す、世に  
 阿伏門の觀音といふ、歩



廊閣より出で、斜めに海潮山磐臺寺に走る、寺の庭より廊を度ること數十歩にして鐘樓あり、傍に常夜燈あり、更に行けば則ち大悲閣、閣は潮より高きこと九十二尺、六間四面なり、危欄に凭て下瞰すれば身は空外に懸るが如し、長風波瀾を揚げて岩脚に激し勢ひ奔雷を作す、對潮樓と共に四近第一佳處のところなり、松永驛を過ぎて尾の道、玉の浦また鶴の浦といふ、其の名何ぞ優雅なる瀬戸の海峡こゝに至りて正に江となり、其の幾個の青螺の相連なるが爲めに、海は正に平湖の看をなし、山海の眺望まことに温藉なり、また山陽道中の一絶勝なり、是れより三原の驛を過ぎて絲崎の浦に至る、風光明媚、須磨、明石は遜色あり、尾道に大寶山千光寺あり、市後の大寶山の中腹に在り、尾道三大伽藍の一、聖徳太子作るところ千手觀音を安置す、寺中に寶珠巖又如意巖なるものあり、高さ四十八尺周圍二十七尋、傳へ曰ふ往古巖上に如意の寶珠あり、夜、光明を放つて海を照す、玉の浦の稱の起りし所以、外客あり、千金をもつてこの岩を買んとす、寺僧聽かず、其の一人一夜寶珠を竊み去る、今巖上に一坎あるは則ち其の寶珠ありしの痕と、寺を過り更に山を登るを五六町にして山嶺なり、坪地あり

り千疊敷といふ、杉原民部大輔の城趾、眺望尤も佳、吉備第一と稱す、其の幾十個の島嶼の錯落せるが爲めに、海は正に二十餘箇の平湖を作す、誠に絶勝なり、摩尼山西國寺も亦た市後愛宕山の中腹に在り、三大伽藍の一、行基の開基、其の刻むところの香木佛像を安置す、其の古刹なるが爲めに古寶多し、菅丞相の寫すところの金光明最勝王經十卷あり、更に轉法輪山淨土寺あり、市の東に在り、聖徳太子の創立、安置するところの觀音體に刀痕あり、俗に身代り觀音といふ、觀音堂の天井に血を踏めるの痕あり、血踏の天井と稱す、持光寺に地藏石あり、地藏の像を刻し半身は地下に在り三十三尋の地藏といふ、萬福寺の傍に觀音石不動石あり、淨土寺の奥院に佛號石、千光寺の南に琴々石、善勝寺に博樽石あり、皆な奇石と稱せらる、三原の驛の絲崎の浦、神功皇后の征韓の時、御船を繋ぎたりと傳ふる淡墨の松あり、凡そ尾道より絲崎に至る、江山明麗、人をして淹留して歸るを忘れしむ、本郷驛に至りて國は藝州、佛通寺あり驛の東二里、許山といふに在りて有名、古刹、蒼岩碧溪の奇あり、詩人曾て山中の三十二勝を撰ぶ、河内



白市、西條、海田市の各驛を過ぎりて、廣島市、南に宇品港を控へて、人烟稠密百貨輻湊す、城は毛利元就の築くところ、今天主閣を存す、第五師團の本營の在るところにして、征清の役、大森此に駐り、策源の地となり、帝國の威名八表に揚る、此の地實に國史の上に不朽の名を得たり

神田川の東岸に縮景園なるものあり、舊藩主淺野侯の別墅なり、泉邸といふ、園は神田川の清流を引いて一大泉池を作り、假山、平磯これに匝り亭榭これに枕む、石古り樹老ひて景趣甚だ佳なり、池中に小嶋あり篋竹叢生して間に涓々たる飛泉を懸けたり、池の北邊は丘陵起伏して古木天に參はり、清溪其の中に縈迂し、潭となり又た瀑となる、板橋あり、野店あり、幽禽常に來り啼く、池の南に清風館あり、園中の諸勝を總攬し、望み太だ佳なり、清風颯然として來り、簷端の蒼竹憂玉の韻を作す、明治二十七八年の戰役、大森を此地に停めたまひしの時、數々此に幸したまふ、園中の草木欣々として日に榮に向ふ、別に廣島公園あり市の北端二葉山に在り

嚴島

宮島停車場○嚴島町○嚴島神社○其の神話○三笠濱○本殿及び其他の諸殿○火燒前○海中の大華表○珠の御池○廻廊○奉納の匾額○長松林○御手洗川○巖鹿○大元神社○多寶塔○筋違橋○大聖院の故趾○御幸の松○御垣原○寶庫○紅葉谷○千疊敷○五重塔○深山○白絲瀧○御山神社○曼陀羅岩○洪鐘○七浦巡り○旅館には松岡、岩村、梅林等十數軒あり、何れも島の名所案内をなす、名物の色楊子、飯匙、さくら海苔、雪花漬、裏糰餅を賣る家多し、前記の旅館は料理屋をも兼業す

珠の御池に湖の盈れば、瑠璃盤の上に玉樓の浮ぶかと疑がはれ、百八の廻廊に月の波れば、波は紫金の氣を吐ひて恍として素娥の舞ふかと怪しむる、實に日本三景の一と稱えられし嚴島は、海よりすれば宇品港より正に五里、陸よりすれば地御前の宮島停車場より波を渡ること僅かに一里、島は東西に長さ二里南北に一里、七浦あり、一匝すれば正に八里弱、嚴島の町に嚴島神社あり、社記に一神話を傳ふ曰ふ、推古帝の御宇、安藝佐伯の人佐伯鞍職この島陰に魚を釣る、俣之紅の帆を揚げたる美しき船あり、西の方より來る、

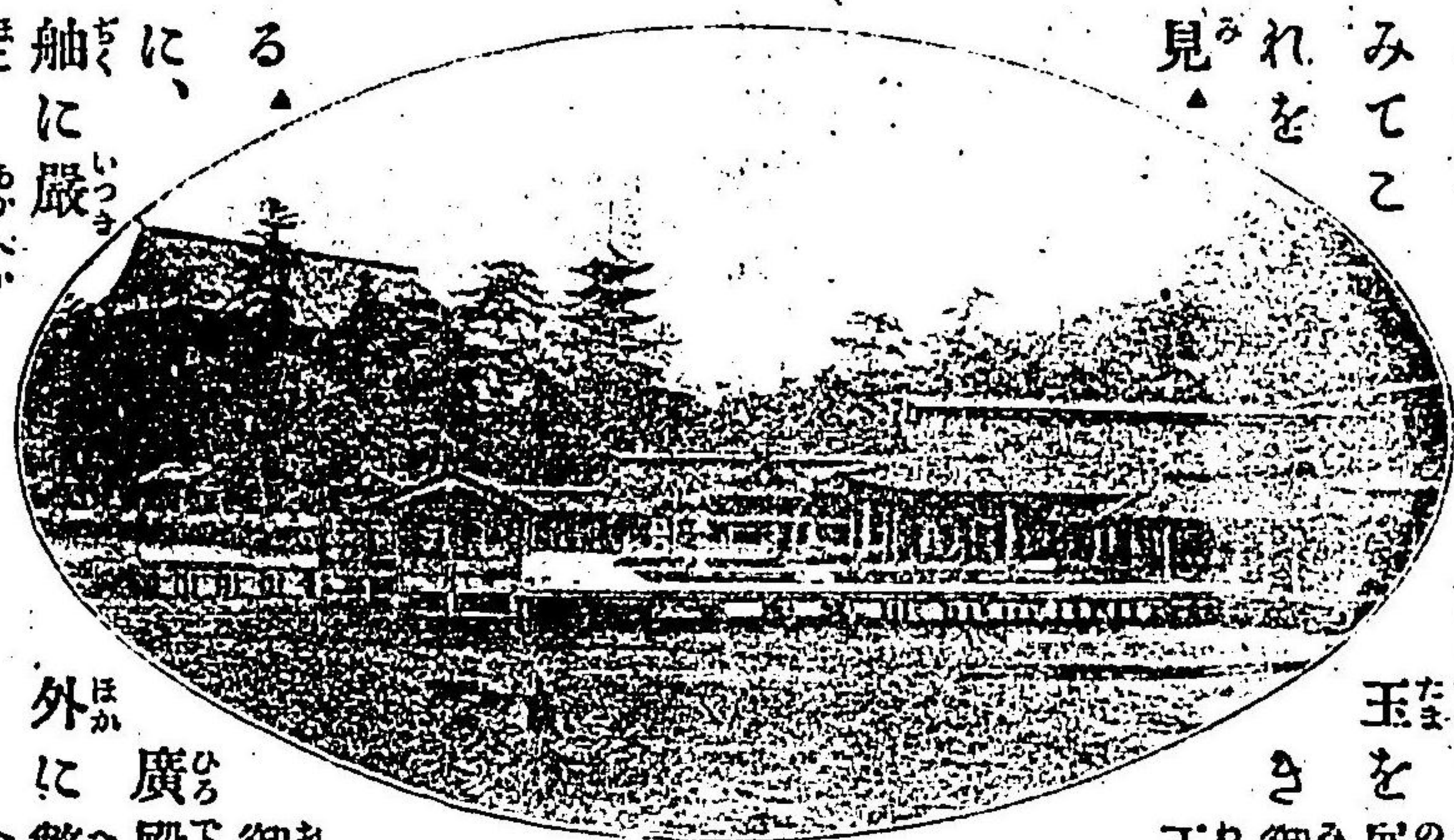


佐伯怪し

みてこ

れを

見



立てたる嚴瓶を置き、其處に三人の麗はしき姫君在す、

玉を展べたる如き御手にて磨ねき近づけて、微笑じ

王を鎮護するものなり、妾は古太よりこの島に居て百

宮殿を作るべしと、斯くて三笠濱の地を相

して宮を作る、これ神社の権輿なりと、是

の安藝の國主たりし時、更にこの社殿を造

營して壯嚴を添え、白河法皇、高倉上皇の

幸あり、明治四年國幣中社に列せらる

有の浦を上り嚴島の町を過り、三笠の濱に

至れば則ち嚴島神社、本殿には素盞雄尊の

御女、市杵姫命、田心姫命、瀧津姫命を祀り、

外に幣殿、神門、天照大神、素盞雄尊を祀る、

ありて平沙の上に建築せられ、潮來りて其の床下を浸

録に朱幣

す、更に棧廊の海中に斗出するこ

と七間、盡頭に燈籠を置く、火

焼前といふ、本社社の左右、曲

曲たる廻廊長さこと實に百

四十八間三尺、一間毎に鐵

燈籠を懸く、潮來りて百

燈の火長く水に映す亦た

奇觀あり、有名なる海中

の大華表は火燒前を距る

こと八十八間、軟沙の上

に立つ、潮來るの時は碧

波の中に在り、游船は其下

を度りて入るべし、古より

數々改造し、今建るものは明

治七年十二月に斧始ありて、八

年八月上棟の式を行ひしもの、柱



の高さ七間二尺五寸、周圍五間三尺

三寸、副柱高さ四間四尺三寸、

間り三間五寸、棟の長さ十二

間一尺七寸、上棟軒先まで

一間六寸、額庇二間、左

右柱の距離五間五尺

八寸、都て高さこと

實に八間三尺七寸な

り、今の額は有栖川

二品熾仁親王の親筆

後奈良帝の宸額は神

庫に藏せり、華表より

の御池と稱し、岸に珠垣を

環らすこと百九十一間、珠の御

池の中、潮退ぞくの後平沙の上に



一泓の小池を留む、明月懸敷に來り、これを照す、鏡の池といふ  
廻廊の楣間に無數の書畫扇額を掲ぐ、皆な古今の名流大家の筆に成る、  
其の東廊より次第に重なるものを序列すれば

○鶴 東洋○張陰飛 古秀○秀郷 素絢○三十六歌仙 書實隆衛光信○神鴉 黒湖○狛鉾 丹倫○印諳 昇齋○孔  
雀 宋紫石○龍 杏雨○鍾植 藍江○吳工女 應震○陵王 梅華齋○虎 專定○白鹿 春水書○曹操 海仙○鯉  
探幽○山水 抱一○靜觀 高時書○松 光孚○韓信 觀山○蝦夷人物 武四郎○鶴 鷹寮○神馬 偃助時繪○草  
摺引 俊峰○詩 丈山白刻○是蓬來 敬幸○敦盛直實 丹覺○麻馬 不詳○鷹 不詳○宗高 丹倫○檀風 藍江  
○呂尙 直彦○波上日出 不詳○羅生門 尙信○松竹梅 眠山○繫馬 左近○三福神 常信○龍 伊川○寶船 不  
詳○神光 照海 三條實美書○田植 永叔○龍 愛信○松間日出 雅信○神馬 江阿彌○三十六歌仙 揚心○清正  
元義○鯉雲塘○狂歌 貞佐○義家 有景○馬 不詳○牛若辨慶 元信○草摺引木偶 作者不詳○仙人圍碁 岸良○  
三十六歌仙 書常雅書左光芳右光輝○那馬溪 皆雲○鶴 松林○漁樵 二承○蝦蟇仙人 兆殿司○神功皇后 驪山  
○福海壽山 蒙處書○日東第一勝 子琴錢○山姥 蘆雪○花紅葉 光孚○花瓶 逸峯○大印諳 桐香○神女 不詳  
○神廟記 士式○菊蕪童 藍江○道灌 芳園○玄徳 楠亭○大哉 協書○外國灣江 常春○虎 東洋○猿鹿 祖仙  
○大湖石 老山○神馬 荒雄○三十六歌仙 書龍山 諸不詳○俳諧發句 皆虬撰○福祿壽 公長  
西廊を渡り盡さば長松落落々、松に傍ふて百八の石燈籠あり、右は玉の御  
池、左は御手洗の川、松間に麋鹿あり、甚だ人に親しむ、川を渡れば大

願寺あり、平重盛手栽の松あり、更に海に沿ふて西すれば大元浦、櫻樹  
多し、大元神社あり、浦の後の山に二層寶塔あり、高倉帝の行在所たりし大聖院の故趾を過り、御  
手洗川の筋違橋を渡れば、櫻樹林あり。櫻樹間一  
株の古松を見る、後白河法皇の行宮松木の御所  
の在りしところ、御幸の松といふ、本社の後  
は則ち御垣が原、會て觀音の原といひし、三翁神社  
あり、寶庫あり、寶物を陳列して縦覽せしむ、右  
に折るれば即ち紅葉谷  
御手洗川の清流、青嶂の間より出で、  
激しては湍となり湛えては淵となる、水甘  
冽、境幽邃、楓樹多し、秋晩の時、黄葉紅葉山  
に蜀錦を張るが如く、水も亦た紅し、中に啣々  
たる鹿鳴を聞く、甚だ景致あり、更に踵を回し  
て三翁神社の傍を過ぎれば、大宮の岡に豊公第一征韓の凱旋の時に築造



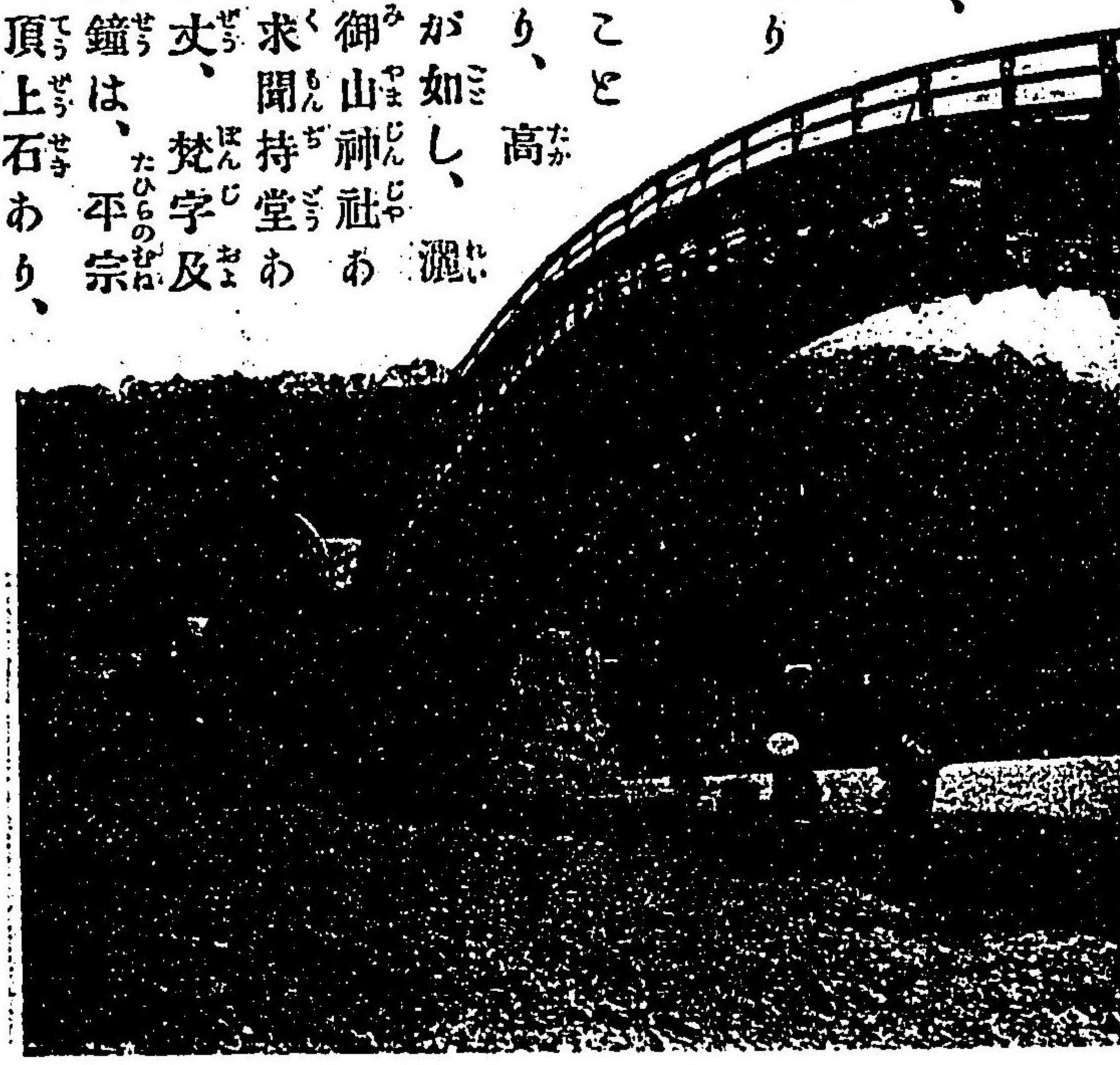
表華の嶋宮



したる千疊敷及び五重塔あり、閣内隨處に飯匙に姓名を書したるものを

密貼す、其の數幾千枚なるを知らず、西南の役、兵士の此に養して武運を禱りしものと、征清の時、從軍兵士これに倣ふ、意は敵を召捕といふに在り

と、佳諺といふべし  
御山は本社の南に聳え、高さこと  
一千數百尺、山に白絲の瀧あり、高  
さ十二丈と稱す、素練を懸るが如し、瀧  
瀧として聽いて喧嘩ならず、御山神社あり、祭神は嚴島神社と同じ、求聞持堂あり、堂後の曼陀羅石は高さ數丈、梵字及び神佛の名を勒す、鐘樓の洪鐘は、平宗盛の寄進せるものと、山嶺に頂上石あり、高さ三丈許、晴灣煙波數十里の山水を展望すべし、更に大日堂あり、堂



橋 帶 錦 國 岩

中の古木燈籠、其の制甚だ奇古なり、其の船を備ふて嚴島を一匝するを七浦巡りといふ、毎浦に神社あり、岩の名あるもの、樹の題あるもの、地の逸史あるもの多し、今は略す、

### 錦 川

岩國驛○錦川○錦帶橋○臥龍梅○白石觀音堂○岩尾の瀧○其の風光○馬關○壇の浦○御裳川○平家壘○小平家○赤間宮○御陵の淡墨松○平門墳墓○紫石山○引接山○春帆樓○馬關の風光○馬關の旗亭○客舎を兼ねるもの春帆樓、月波樓、風月樓あり、別に常六、常富、魚

平、宮辰、前竹あり、小門の海岸に襟流亭なる海水浴場あり  
鐵路、周防の國に入りて岩國驛、錦川は町の西南を過り、迢々として海に注ぐ、町の盡頭より横川の村に亘りて、川に架せる奇橋あり、錦帶橋といふ、俗に稱して十露盤橋といふ、川の中に石を疊みて、四個の橋脚を作り、半彎月の小五橋を架す、長さ百二十五間、橋欄より水上まで尤も高きところにて十三間あり、橋下に一柱なし、木を組み立て層々相倚り、以て橋を支ふ、奇巧驚くべし、延寶元年、藩主吉川元信の作る所と云ふ、錦帶橋の上流に、更に一橋の寛の如く度れるあり、臥龍橋といふ、義濟



堂の邊に架れり、横山村の邊り錦川に枕みて白石觀音堂あり、千年外の古祠といふ、村の中に又た吉香神社あり、多く櫻を栽ゆ、錦川一帯の風光甚だ美なり、岩國は元吉川氏の城市、人烟稠密なり、岩尾の瀧は神代停車場を距ること數町のところに在りて、直下すること五十尺、中流のところ巨岩突出し、落水これに激して大霧を作る、すべり岩なるものあり、石の面壘三十枚を布くべし、山に奇石多し、岩尾の瀧の左に聳る西山には、白絲の瀧あり、白絲亭、書畫亭、圓亭、なほ松に倚り岩に倚つて茶烟相望む、更に岩尾の瀧と相合して一瀑をなすのところに、出逢の橋、鏡が岩、傳教大師腰掛の岩、蓮華岩、辨天祠、六角堂、横寝の獅子岩などありて、仙掌樓、瀧見亭、岩瀧亭の諸亭、翠微の内に散在す、六角堂の邊り、七曲の險を度りて山巔を極むれば、住吉神社あり、立岩、鶴籠の松の陰より見渡せば、遙かに大島の瀨を見る、眺望甚だ美なり

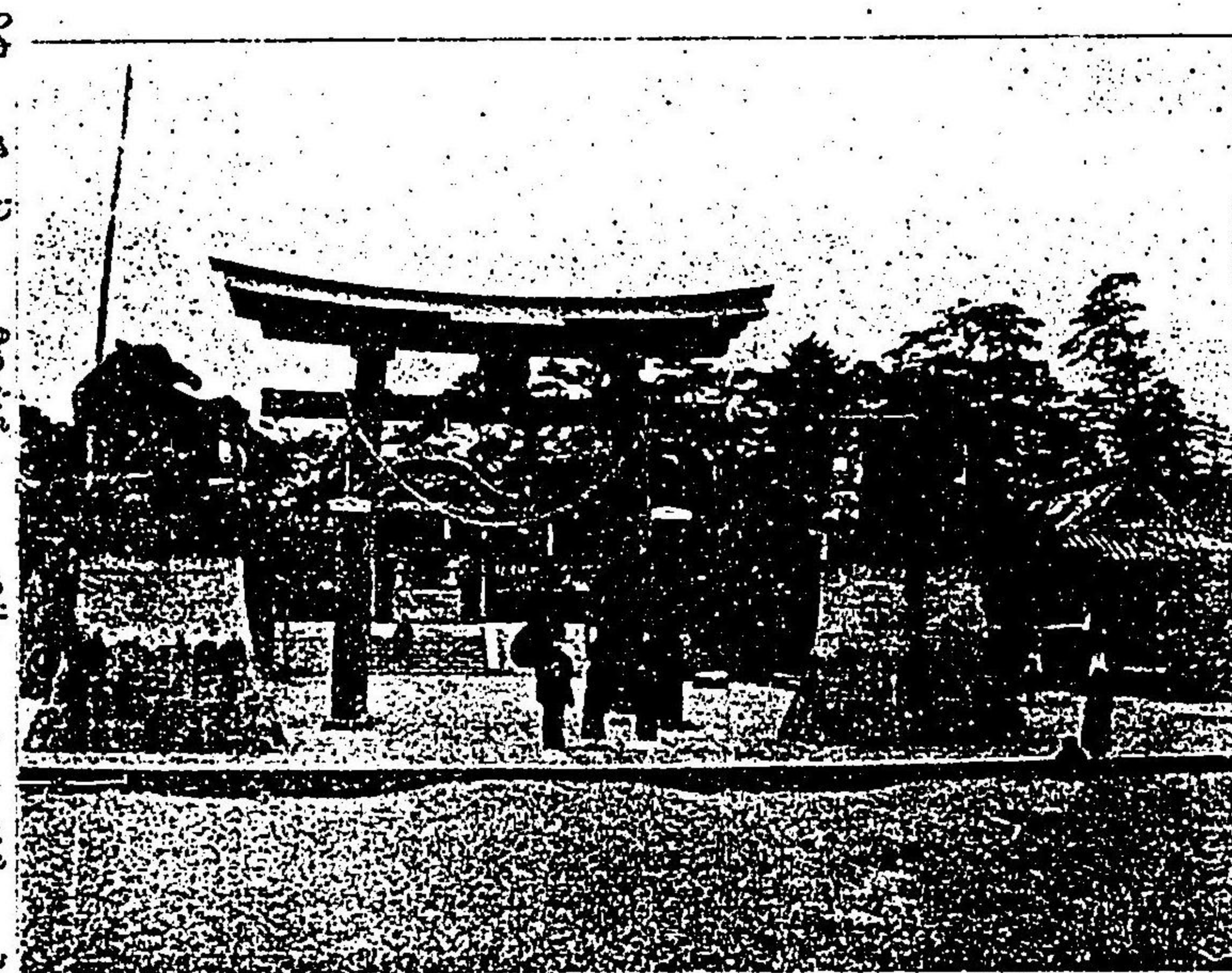
赤間關

幼冲の天子、龍宮に入りしより茲に七百年、舊によりて山は青々の容を

變えず、水は蒼々の色を改ためず、更に一新繁華を添え來りて、豊の門司の港と共に中國九州の咽喉を扼し、西國の一大埠頭となりしものを、赤間が關となす、山陽會てこの地を過ぎりて長古一篇を歌ふて曰ふ  
 幾句之山如龍尾、蜿蜒曳海千餘里、直到長門伏復起、隔海豐山呼欲  
 響、帆橋林立北岸市、吾自平安來、行循山勢與之偕、驚看海門潮勢  
 如奔雷、屈曲與山相擊排、南望豫山青一髮、海水漸狹如囊括、想見  
 九郎驅敵來、平氏如魚源氏獺、岸燈水淺誰得脫、海鹿吹波鼓聲死、樺  
 龍出沒狂瀾紫、敗鱗蔽海春風腥、蒼溟變作桃花水、獨有介齒呼姓平、  
 沙際至今尚橫行、兜鍪貂蟬兩一夢、唯見海山蒼々連神京、山日落海如  
 墨、何物遮船夜嗽啣、吾語冤魂且休哭、汝不聞鬼武之鬼亦不免餒  
 身後豚犬交相食、  
 所謂壇の浦なるものは市の阿彌陀町の東、壇の浦町の邊、數町の海濱を  
 いふ、古、此より早鞆の明神社に至るまで五百壇の石磴ありしが爲め終  
 に浦の名となりしと、浦は火の山を負ひて、漁家蟹莊參差相望み、潮聲  
 寂寞として岸を打て回る、御裳川は壇浦に濺げる小流なり、岸に沿ふて  
 老松多し、この邊の海濱、異蟹を産す、其の甲上の鱗、宛かも人の憤怒



の悪相を作す、呼んで平家蟹といふ、



社神園公島廣

月の文字の夕暮」と歌いしは是、凡そこの邊、紫石山を負ひ海門を前に

更に小平家と稱する魚あり、  
鯛に肖て金鱗、上に白斑あり雪の  
如し、甚だ美麗なり、俗に云ふ、  
平家の亡靈、男子は化して蟹とな  
り、女子は此の小平家となる  
赤間宮は阿彌陀寺町に在りて安徳  
帝を祀る、故は阿彌陀寺古刹の在  
りしところ、社殿宏壯、陰曆三月  
二十四日大祭を行ふ、呼んで先帝  
祭といふ、此日赤馬關狹斜の女、  
麗衣して隊を成し行いて神に賽し、  
繁華を極む、安徳帝の御陵は赤間  
宮の左に在り、一株の老松あり、  
淡墨の松といふ、足利尊氏の「何  
れより名を顯はさん薄墨の松漏る

す、猿啼潮聲雨つながら腸を斷つ、紫石山の下に平家一門の墓あり、兩  
行相望み風打雨淋、勸字を辨せず、依稀として僅かに残るところの字に  
就いて撫摩數遍し、彷彿として讀むべきは

- 平○盛
- 平清經
- 平資盛
- 平敏經
- 平經盛
- 平知盛
- 平教經(前列)
- 平清經
- 平資盛
- 平敏經
- 平經盛
- 平知盛
- 家長
- 忠光
- 景經
- 景俊
- 盛繼
- 忠○

紫石山に登れば、硯の海脚下に在り、直ちに豊の門司と相對し近く筆架  
峰を看、右には内裏、新羅崎、百濟野、巖流島を望む、風景甚佳なり、  
清和帝の時に創建したりし龜山神社は外濱町の邊に在り、左右に蘇鐵樹  
あり、朝鮮蘇鐵と稱す、豊公手栽のものといふ、社近く關龜山引接寺あ  
り、長州屈指の巨刹、寺内に笠松と稱せる老松あり、枝葉四方に蜿蜒し  
青織を張れるが如し、明治二十八年、清國媾和使李鴻章の旅館に充たり  
しより、彼の樽俎折衝の場たりし旗亭春帆樓と共に、其の名全國に喧傳  
せり  
凡そ赤間關の地、太古は正に九州と一地峽をなし玄海の海より硯の海に



至る天然の一大石橋を作りしといふ、穴門の稱の起る所以、長街帯の如く波光に涵し、面々の青山萬橋を護る、其の文字關頭夕暉紅きのところ、豊山は濃、筑山は淡、遙かに豫州の山、煙紫雲翠幾重々を看る、誠に佳處となす、千帆來り千帆往く、亞字欄頭、何者か翠袖を揚げて徂徠の舟を招く

讃と阿と

丸龜○丸龜附近の風光○鹽飽群馬○多度津○街上の囑目○普通寺○其の風光○琴平○琴平神社○賴橋○社殿○其の風光○高松○玉藻の城○屋島○屋島寺○牟禮高松の松原○壇の浦  
○安徳天皇社○内裏趾○祈石○繼信の墓○獅子嶺岩○其の眺望○五劍社○寒霞溪○祖谷堂  
橋○琴平町の旅館は茂屋備前屋の二月昔より有名なり、高松にも旅館の佳なるもの多し

船、播磨の灘、水島の海を渡りて讃岐の丸龜近く來れば、象頭山雄然として左に在り、山左には飯の山、青野山、白峯あり、山右には屏風が浦見立峙、久保谷の長汀曲浦ありて、碧灣を湛えしどとき海の上に大小數十個の青螺相倚り、仄帆歌帆、島に入りまた島を出づ、風景甚だ新清、晩春初夏の交、漁夫この間に鯛と鮓とを漁す、亦た奇觀なり、島を總稱

して、鹽飽の島といひ、毎個更に名あり、其の重なるは  
 廣島 本島 高見 佐柳 牛島 手島  
 小手島 沙彌島 瀬居 小瀬居 興島 小興島  
 岩黒島 寶來 櫃石 長島 羽佐 向笠  
 鍋島 二面 石登

愛すべきこの群島の間を過ぎりて、舟路窮まるが如くして復た通ずるところを行き、やがて母の懐とばかり波穩やかに潮靜かなる多度津の港に舟は入るなり、多度津より琴平に至る鐵道あり、琴平は則ち有名なる琴平神社の在るところ  
 多度津は四國の要津、魚鹽の富あり、女の魚賣の頭に盤臺を載せて呼び行くなど亦たをかしき囑目なり、赤き色の飾、柚餅子は此の地の名物なり、狹斜の地あり、涼車の善通寺驛を過ぐる頃、車窓より五重の大塔を  
 見る、弘法大師誕生の地にして父佐伯善通奕世の家園なり、入唐求法の後此の地に寺を建て祖先及父母の冥福を修し、永世民庶の福田となしたるもの、伽藍華麗、弘法大師刻するところ丈六の瑠璃光如來を安置す、香色、筆山、我拜師、中山、火上山の五峯さながら屏風の如く寺を環り、



更に普賢菩薩の山、文珠大師の峯ありてこれを匝ること宛も五佛の中に  
 して普賢文珠のこれを繞るが如しと、普賢山は則ち象頭山なり、老松落  
 落として琳宮を護る、寺後の崖は則ち屏風が浦、瀬戸内の群島を見る、  
 風光絶佳なり

琴平

頓て流車の停まるどころは琴平の町、賽客の多きこと伊勢の大廟に亞げ  
 る繁昌の神社とて、人家の稠密楡比して路の幅は狭けれど礎石の道は長  
 く神社へと度りたるに、諸國より來たれる參詣人の聲音絶ることなく、  
 項背相望む、左れば旗亭の大なるもの少なからず、また旅館と青樓とを  
 兼たる怪しがる家も多し  
 絲楯を背に負へる男、白き脚半をつけたる媼、赤銅色の顔暎ましく髪を  
 大髻に結ひたる船乗どもの右往左往に行き交ふ中を、頓て紫銅の華表を  
 過り、二本樹の春風とて八景の中に算へられし松櫻の大樹の下を歴て一  
 の鳥居より、これも八景の中なる鞆橋とて、復道の橋廊を度り、一の坂  
 鐘樓の邊に行けば、清少納言の墳あり

數千級の長磴を上り盡せば則ち象頭山琴平神社の本殿、結構頗る莊嚴な  
 り、什寶多し、中に就いて崇徳上皇の雲間の杜鵑の御  
 詠、人をして愴然として涙を落さし  
 む、堂の襖子には應舉の筆に成りし  
 が多く、額堂には狙仙容齋の丹青多  
 し、奉納の金と其の人の名と鐫りし  
 石彫たゞしく傍路に立てると、白衣  
 朱袴の巫女の其の珠垣の邊より北望すれば、



近く讃岐富士、八栗、五

を看て、更に拜殿の面額の尤も多  
 難船の額及び天狗  
 繪馬堂の中に風波  
 社と成り琴平  
 社の初年國幣小  
 寺なる佛刹な  
 りしが、明治  
 社に新なり  
 神社は古、象頭山  
 金比羅大権現と稱  
 し金光院松尾  
 琴平の寺なる佛刹な  
 りしが、明治  
 社の初年國幣小  
 社と成り琴平  
 社の初年國幣小



幾點煙波十里の風光あり

屋島 壇の浦

讃州高松の城の東二里のところに、宛がら大厦の立つが如き屋島山と、巨劍倒立に天漢を刺すが如き五劍山と相對するの邊は、壽永の昔、源平二氏の古戦場なり、山様水態誠に尋常にあらざるが上に、更に史傳の粉飾を傳するありて、山はいよ／＼蒼く水はいよ／＼碧なり高松は讃州の名邑、其の城今に粉壁と櫓閣を存す、浦を玉藻の浦といへるより城も何時しか玉藻と呼べり、一路の松風遙かに屋島に通ず、道坦かにして腕車を行るべし、山の麓に車を捨て、登ること十八町、南面山千光院屋島寺あり、弘法大師一刀三禮の千手千眼觀音菩薩の像を安置す、地平らなること方數百歩、石磴を登り石碇に行き、仁王門を入れれば長松落落々として寂奠たる伽藍を護る、松聲鐘語梵唄音は都て是れ七百年前の餘韵なり、山の麓の長松一路は古へ牟禮高松の松原なり、田崎を右にし海灣を左にし、灣を隔て、嶽峙たる五劍山と相對す、海は則ち壇の浦、濱に安徳天皇社あり、天皇社の南、屋島内裏の古趾あり、田崎の間に在

り、小樹扶疎たり、翠華一たび去つて七百年、唯だ今只棲鴉の夜啼くあののみ、洲崎堂の南なる田崎の中に内裏總門の古跡あり、昔しは海濱、今は尚呼んで總門の渚又は總門の汀といふ、近く那須與市宗高の祈石なるものあり、宗高の描日扇を射んとして馬を立て軍神に禱しところと、源平互に甲乙なし、兩方引退き又た、かはんとするところに、沖より莊りたる船一艘渚に向ふて漕ぎ寄す、二月二十日の事なるに柳の五重に紅の袴着て袖笠かつげる女房あり、皆紅の扇に日出したるを枕に挟みて舟の舳頭に立て、これを射よとて源氏の方を招きたり、此の女房といふは建禮門院の御時千人の中より擢み出せる雜司に玉蟲の前ともいひ、又は舞の前とも申す、今年十九にぞ成りける、雲の鬢、霞の眉、花の顔、雪の膚、繪に書とも筆にも及びがたし折ふし夕日に耀やきて、最と色こそ増りけれ、西國文でも召具せられたりけるを出されて、此扇を立たり、川與市其日の裝束は、紺村紺の直垂に緋絨の笠、鷹角反背猪首に着なし、廿四指したる中黒の矢負ひ重藤の弓に、赤銅作りの太刀を佩き、宿赫白馬の太くたくましきに千鳥の飛散りたる貝鞍おきて乗りたりけるが、す、み出で、判官の前に



弓取りなをして畏れり、あの扇仕まつれ晴の所作ぞ不覺すなどのた  
 まふ、與一仰承はり、子細申さんとするところに、伊勢三郎義盛、後  
 藤兵衛尉實基等、與一を判官の前に引据えて、面々の故隙に日既に暮  
 なんとす、兄の十郎さし申す上は、子細やあるべき、疾く急ぎ給く  
 海上暗くなりなば由々しき御方の大事なり、早くといひければ、  
 與一誠と思ひ、胃をば脱ぎ童に持せ、烏帽子引立て、薄紅梅の鉢巻し  
 て手綱搔くり、扇の方へぞ打向ひける、生年十七歳、色白く小髭おひ  
 弓の取りやう馬の乗容、優なる男にぞ見えたりける、波打際に打寄せ  
 て、弓手の沖を見渡せば、主上を始め奉つり、國母建禮門院北の政所  
 方々の女房達、御船の數漕ぎ並らべ、屋形くの前後には、御簾几帳  
 も、さゝめきけり、其處も遠淺なり、鞍爪鎧の菱縫板の浸るまで打  
 ち入れたれども、沛艾の馬なれば海の中にてはやりけり、手綱をゆり  
 すへく鎖むれども、寄る小浪に物怖れして足もとゞめず狂ひけり、  
 扇のかたをきと見れば、折ふし西風吹き來つて船は艦舳も動きつ、扇  
 枕にもたえらねば、くるりくと廻りけり、何のところを射べしども  
 覺えず、與一は運の極めと悲しくて眼をふさぎ心を静めて、歸命頂禮

八幡大菩薩、日本國中大小神祇、別しては下野の國日光宇都宮氏の御  
 神那須大明神、弓矢の冥加あるべくば、扇を座席に定めてたえへ、源  
 氏の運も極まり、家の果報も盡べくは、矢も放たぬ前に深く海中に沈  
 めたえへと祈念して、目を開いて見たりければ、扇は座にぞ静される、  
 有繫に物の射にくきは夏山の滋み緑の木の間より僅かに見ゆる小鳥を  
 殺さず、射るこそ大事なれ、挟みて立たる扇なり、神力既にさじ副た  
 れば、手の下なりと思ひつ、十二束二伏の鏑矢を抜き出し、爪やり  
 つ、重藤の弓握りぶとなるに打食せ、能引暫く固めたり、源氏の方よ  
 りは今少し打入れたえへといふ、七段ばかりを阻てたり、扇の紙  
 には日を出したれば恐れあり、蚊目の程を志して、兵どはなつ、浦  
 響くまで鳴り渡り、蚊目より上一寸おきてふつと射切れたりければ、  
 蚊目は船に留まりて扇は空に上りつ、暫く宙にひらめきて、海へさ  
 つとぞ入りける、折ふし夕日にかゝやきて波に漂ふ有様は、龍田の  
 山の秋のくれ、河瀬の紅葉に似たりけり、鳴矢はぬけて潮に在り、落  
 の浮洲と覺へたり、平家は般を叩いて、女房も男房も、あら射たり射  
 たりと感じけり、源氏は鞍の前輪般を叩いて、あら射たりくと感じ



ければ、船にもとよみてぞありける、紅の扇の水に漂ふ面目さに玉蟲  
 は「時ならぬ花や紅葉を見つるかな吉野初瀬のふもとならぬぞ」  
 田間雙松の邊に、佐藤繼信の墓あり、平教經、大箭を放ちて義經を射ん  
 とす、繼信身を以てこれを掩ひ、終に射て喉を断れ、身を以て其の主  
 に代りし人の墳あり、數歩を隔て、大夫驪の塚あり、義經僧に命じて厚  
 く繼信の屍を葬らしめ、且つ副馬大夫驪に金覆輪の鞍を置きしを喜捨し  
 其の冥福を修せしむと、塚は此の驪を瘞めしところ  
 世に平家の滅亡のところを長州壇の浦と稱すといへども、讚の壇浦こそ  
 其の最期の大慶戦のところなめれと疑ふなり、昔ねく史書を涉獵し親し  
 く地勢を討尋すれば、其の證左當に頗ぶる多かるべきを思ふ  
 屋島寺の西一町にして獅子巖なるものあり、巨巖懸崖の上に突起して  
 獅子咆哮の状をなす、巖頭に立ちて眺望すれば、海中大小の青螺錯落し  
 て宛も陸前の松島に彷彿し、山陽の遠翠、壇浦の近碧、雙眸の中に集る、  
 誠に天然の大畫幅を横披するが如し、若し夫れ雲濛く雨微なる時は、  
 人をして昔に感と愴然として涙を隕さしむ  
 五劍山も亦たこの絶勝を看るに好し、屋島を距ること東一里、山上大巖

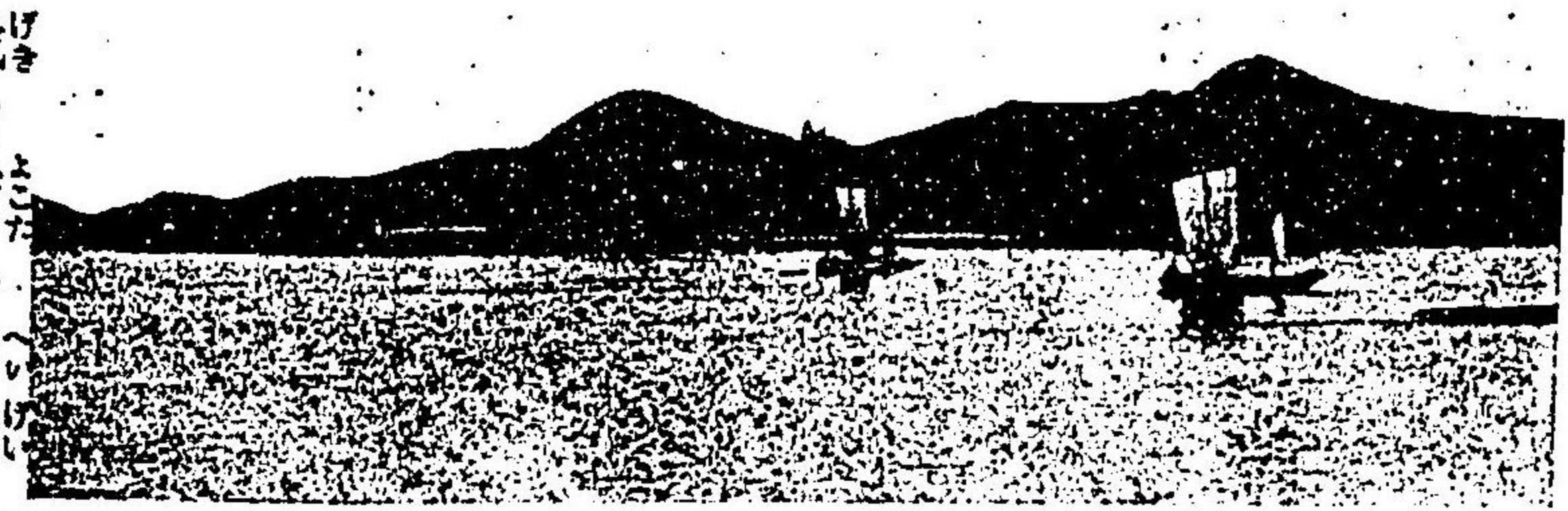
あり五個並び立ち、巨劍を駢植したるが如し、地震あり其の一劍を折る  
 今は四劍山となる、中腹に八栗寺あり

寒霞溪

叢爾たる讚岐の小豆島、中に天下の奇勝あり、神懸といふ、誠に神斧鬼  
 鑿の山なり、唯だ其の地に通邑なく、舟車の便も亦た甚だ缺けたるが爲  
 めに、其の勝や未だ大に世に顯著ならず、徒だ松島、天橋、雄鹿の島を  
 して名を天下に擅せしむ  
 小豆島は淡路に次げる一巨島、東西に長きこと十餘里、南北六七里より  
 二三里に至る、形は馬の跼蹠せるに似たり、其の恰かも、屋島、五劍山  
 の方に向ひたる咽喉の邊に港あり池田と云ふ、神懸は之を距ること三里  
 にして迢かなり、車を通すべからず、橋にあらざれば則ち徒歩、足指漸  
 く仰ぎて室野大峙の地を過ぐれば、竹樹幽邃、多湖を過れば復た海、辨  
 天山、坂手の觀音山、清瀧觀音山、峰勢皆な奇拔、咄々天に迫らんとす、  
 山光水色甚だ明媚なり、波の頭の碎けて雪を噴ける邊の軟沙を度りて水  
 木の村に至れば、圃に多く淡婆姑を栽えたり、又た甘蔗を作る家多し、



清水の村を過ぎりて内の海の下村に至る途中、汀に亂礁あり、波瀾これ



激して狼雨を作る、看て甚だ豪壯、下村は小繁華の港

なり、旅館あり、此にて山に登るの準備を理むべし、上

村に至れば則ち神懸、漢詩家が其の名の雅馴ならずとて

寒霞溪と呼び做したる山是れなり、岩を削りて作りなし

たる石磴を行くこと半里、素麵瀧あり、巨巖の面を掠

めて起る、高さこと三十餘尺、水、岩皺に入りて幾十

百道の銀線錯綜して下るが如し、兩峰突起して溪を壓

す、屋の如きもの累層して磊落たり、瀧を過りて更に

進めば四望皆な峯、峯は全たく岩、礫水萬岩の間より

出で深々として鳴り、礫や峯や露根の老松あり、交る

に古楓樹を以てす、葛蘿あり樹に縈ひ岩を縛し、其の餘

地あるのところ、更に鮮碧流れんとするの岩芝ありてこ

れを補ふ、峯の形巨劔を植たるが如きあり、樓觀の如き

あり、長人の坐して吟嗽せるが如きあり、甲冑の武士、

戦を横へ睥睨して離立するが如きあり、大厦の如きもの、歩障の如きも

のあり、洞門を作るもの牖窓を穿つものあり、哮獅嘯虎の態をなすもの、

鬼魅魍魎の状をなすもの、端倪すべからず、凡そ披麻、斧劈、卷雲、彈

渦、攀頭、荷葉、骷髏、鬼皮、解索、亂柴、馬牙の諸皴備はらずといふ

ことなし、この天然の好粉本あり、而も巨匠といふといへども、具さに

これを丹青に上すものなきを想ふ

溪山の奇勝此の如し、中に就て通天窓は、巖頭に岫あり朗然として碧落

を見、紅雲亭、錦屏風は、秋晩の時皆な丹楓、老杉洞は古碧人の脾肝を

照し、玉笏峯は、其の形ち春筍の如く、層雲壇は、寒雲常に屯して流れ

ず、女羅壁は、一片石の峯面、薛蘿縈附して他樹を交えず、山巔に登り

て四望すれば海山千里一目に盡すべく、蒼茫たる瀬戸の海、中に數百の

青螺あり、讚の高松、備の岡山、播の姫路皆望み見るべし、壯絶又快絶

なり、この山、猿多し、又麋鹿あり、曉猿、宵鹿、更に有聲の畫を添え

来る

祖谷の蘿橋

阿波の人に對つて祖谷山の事を問へば、輒ち答へて曰ふ彼の地には平家



の赤旗あり、蘿橋の奇勝ありと、祖谷は阿波の西方、土佐の國に近きと  
 ころ、美馬郡一宇村より小島峠の嶺を度り盡すのところに在り、重巒  
 復嶺の中に別に乾坤を開く、山の尤も高さもの劔山、高さこと七千四百  
 尺、其の裾長く六派の山脈を曳き六溪流あり、分れて六方に奔る、劔山  
 に次で高きは壁が嶽、高さ殆ど劔山を摩し、山勢嵯峨尤も天嶮なり、中  
 に就て「百十歩」といふは、絶壁數百尺のところ、脚を受くるもの僅か  
 に百十歩あるのみにて他に歩を容るべき寸地なく、人皆な渦附して此の  
 間を渡るといふ、羚羊の時に岩角に現はるゝと、岩茸取の生命不知の男  
 どもが時に來ると、空飛ぶ鳥の翼を休むるの外、絶えて生物の近づかざ  
 るどころなり  
 溪の尤も大にして奇絶なるものは祖谷川なり、溪を隔て、東西祖谷山  
 村あり、巨岩奔湍、人をして驚かしむ、溪に架するに蘿橋を以てす、東  
 西祖谷に通じて都べて十三橋、中に就て善徳、大宮、落合、浦戸、柚の  
 瀬、椽の瀬、今井、小祖谷、後田の九橋著はる、其のこれを作るに、先  
 づ深山より白口蘿といふを採り來り、殊に丈夫なるを組み合せて三條若  
 くは五條の大綱を作り、これを彼岸に引度して、上に兩三寸に割きたる

長さ五六尺なる木片を五六寸乃至一尺の間隙を隔て編付け、兩側には蘿  
 にて蜘蛛手に編みたる欄干に附し、左右岸の大木よりは幾條の蘿の綱を  
 張りて橋と空際に懸け度すなり、始めてこれを架する時の狀を聞くに、  
 先づ箭に細くして強き絲を結びて彼彼に射付け、徐々にこの絲によりて  
 次第に太き蘿綱を曳き度し、終に周圍一尺ばかりの蘿を、綱毎に車に懸  
 けて充分に引き延し、壯丁これを度りて、次第に兩方より橋板に代ゆべ  
 き横木を編付け行くなり、中にも目覺しき働きは兩岸の大木の梢より釣  
 綱を垂るゝの時にして、身を空外に懸けて其の綱を結ぶ、橋既に成る、  
 これを望めば雲棧の中霄を度るが如く、横さまに深潭の水石激怒せるの  
 上に懸る、甚だ奇觀なり、度りて中ごろに至れば、橋揺々として軽く颯  
 り橋を透して下に碧潭あり、度るに慣れざるもの戰々兢々たり  
 天下に橋の奇なるもの、甲斐の猿橋、木曾の棧道、飛驒の白川の橋、奇  
 は即ち奇なれども此の橋と皆な制を異にし且多くは其の跡を絶てり、土  
 佐の斐生の里に蘿橋あれども亦た小にして且つ廢殘す、遠州秋葉の奥な  
 る藤橋は、稍やこの橋に似たれども規模亦た少なり、唯だこの祖谷山の  
 蘿橋は、いまだ記録のあらざりし以前より傳へて今に至り、少しも改た

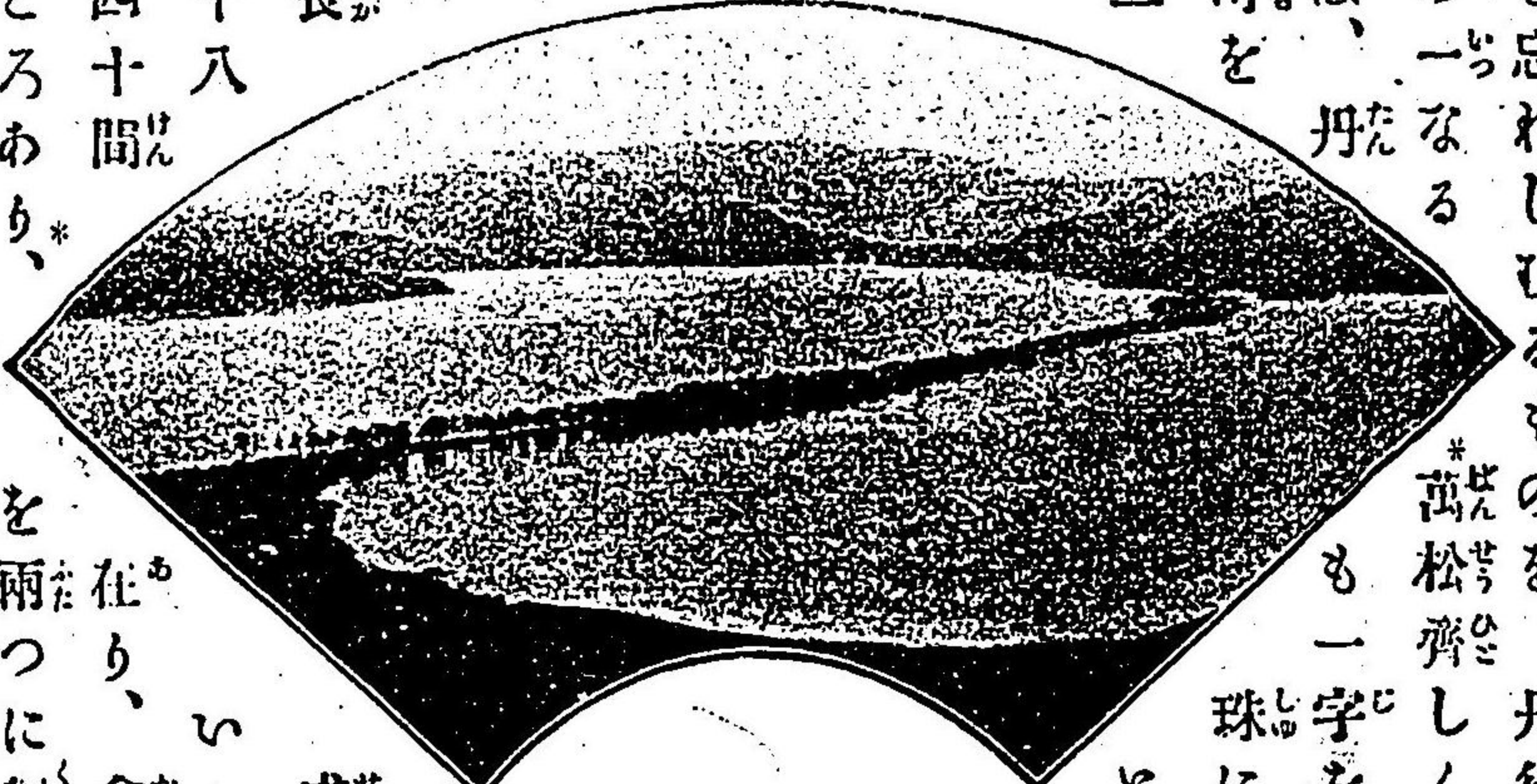


めず、奇といふべし  
 元暦の年、平氏壇の浦に覆滅す、教盛の二男平の國盛、屋島の戦に後れ  
 て志度の浦に留まり、一門の陣亡せしを聞いて郎黨と共に遁れてこの祖  
 谷の山中に入り、部落を威服して邑長となる、阿佐名の地に阿佐氏あり、  
 國盛の子孫なり、今に至つて十九世といふ、家に大小二旗の旗を藏す、  
 所謂平家の赤旗にして珍品と言ふべし、村民質朴、其の言語の如きは多  
 く古語を存す、「けれ」「こそ」のかゝり結びなと尤も正しく、風俗も亦  
 た中世の遺風を留むといふ、其の西方吉野川の縈回なるところ、亦た大  
 歩危、小歩危の奇勝あり

### 天橋立

與謝の海○天橋○丹後宮津○橋立神社○籠社○相成寺○傘松○天橋の風光○天橋立股眼  
 鏡○榎崎○文珠堂○名物○宮津の旅館に就て請へば舟子と案内旗を兼ねる者を傭ひ得べ  
 し、文珠堂の前、茶亭旗亭あり、對橋樓尤も雅潔  
 上下碧落の邊、萬松一路横交に度りて空外に懸るが如く、松青、瀾白、  
 相ひ交りて、一氣の紫氣氳を作して浮動し、山水明媚、人をして恍然と

して歸るを忘れしむるものを、丹後の天の橋立なり  
 日本三景の一なる  
 天の橋立は、丹  
 後宮津の町を  
 去ること二  
 里、府中  
 村字江尻  
 より與謝  
 の海の中  
 央に浮ぶ  
 が如く横  
 はる松洲  
 にして、長  
 さ凡そ二十八  
 町、幅は四十間  
 に至るところあり、



を兩つに割せし青松白沙、一里の晩翠は激澗た  
 在り、傘松の蔭より眺望すれば、與謝の入江  
 いへるごとく、橋立の勝は正にこの山に  
 成相寺あり、松島の勝は富山に在ると  
 の古額あり、社後の成相山に上れば、  
 社殿古雅、小野道風書するところ  
 やがて府中村の籠神社の前に着く  
 立橋の天後丹  
 次第に天の橋立に傍ひて行けば、  
 宮津より舟を借ひて、静かなる與謝  
 の入江を度り、權植て霞の如く網  
 乾せる漁村を左に新濱を右にして、  
 舟の橋立に傍ひて行けば、  
 一字を碧水の上に描く、其の近く大津村文  
 珠に對するところ、洲は宛も斗の如き形  
 となり、橋立神社あり、社廟佳潔なり、



る波光に映じて、黒崎の岬は左に遠く、眺望するところ皆な詩なり、天の橋は近  
く前に在り、立股眼鏡とて、この美景に背きて立ながら身を屈し、股間より窺へば、  
山媚び水笑み、上なるが海か下なるが天か、水中に天あるがごとく又た  
天上に水あるが如く、奇観いふべからず  
天橋を看るに二好處あり、一は橋崎なり、天橋を横一文字に看る、一は  
則ち傘松の下にて、正に天橋を縦一文字に看る、文珠堂は宮津より半里  
ばかり、天橋山智恩寺に在り、此の地原と與佐の宮の社地なりしは、中  
古波路村に在りし文珠菩薩を此に移し、與佐の宮を橋立なる濃松に遷し  
橋立明神と稱すといふ、延喜四年、勅して寺號を賜ひ、莊田を定めらる、  
開基は年曆を詳らかにせず、中興の開山を別源大和尚といふ、堂に掲げ  
たる智恩寺の扁額は、延喜帝の宸筆なり、後一百年を歴て、藤原保昌こ  
の國の守となりし時、再び伽藍を修營し、平重盛、足利義持を始め、當  
國の主、一色、細川、京極の諸侯伽藍を重修せしが、享保明曆の時、朝  
廷より黄金を賜はりしにより、山門を黄金閣と稱せり、山門の正面に佛  
殿あり、乃ち文珠堂是れなり、本尊の文珠菩薩は帝釋化人の作にして脇

士于闐王均提童子は毘首羯磨の作なりと傳ふ、五臺山の額は隠元禪師の  
書するところ、天橋架記五臺山、龍女獻珠擁護、神代降臨七佛祖、獅王  
舉足嘶叫の聯牌は僧無染元の書なり、佛殿の東に法堂あり、方丈あり、  
衆寮、鍾樓門あり、曉雲閣といふ、閣の左に東司禪堂あり、佛殿の西に無  
相堂、塔室鐵盤あり、鐵盤大さ六尺四方、内に銘記あり、正應三年と記せ  
り、經藏あり、標月指の額は即非の書、三重塔、和泉式部の歌塚、芭蕉  
の一聲塚あり、山門の額、海上禪叢は園大納言の書にして樓上に十六羅  
漢を安置す、此地北端を念佛崎と稱し、橋立の濃松と相對せる、切戸  
の渡とは此處なり、文珠堂の南に小灣あり、龍穴と名づけ、岬を臥龍の  
岬といひ、辨財天あり、又た寺後を一念淵といひ、海濱を總稱して千歲  
の浦といひ、山門前一帶の地を夕日の里といひ、浦を夕日の浦といふ、  
浦に旗亭數戸あり、天橋の看め甚だ美なり、思案酒、才覺田樂、智慧の  
餅は此の地の名物、又橋立松の細工物、松根筆文珠貝、等あり

松江

雲州松江○夫道湖○嫁島○松江城趾○潛り戸○杵築の町○出雲大社○松江の客舎の重な



るもの石飛、皆美、岩田、榎戸、富田等あり、今市より杵築の間に乗合馬車あり、杵築の

町は旅箱殊に多し、昔な大社への養詣人を宿泊せしむ

古日本こにほんの王者わうじやの居かませしところ雲州うんしゅうの宍道湖しんぢうこ、五郡ごぐんの村むらを涵たし、六道りくどうの川かを容ゆるれ、煙波えんぱ洗洋せんやうとして十四里じゅうしりに亘わたり、湖うみを環めぐりて勝地しょうち多おほし、東岸とうがんに小島せうじまあり、嫁よめが島しまといふ、全島ぜんじま皆みなな岩い、怪松かいしゅう多おほし、風景ふうけい絶佳ぜつが、夏時かじ游舫ゆうぼうを簇むららす、湖中こちゆう産うするところの魚うな、鱸うなぎ尤もつとも佳か、巨口きゆうくち細鱗さいりんにして四鰓しさいあり、湖こに沿そふて松江まづわし市しあり、松江城まづわしじょう趾し、今尙いまなは天主閣てんしうかくを存ぞんす、島根郡しまねぐんの北きた、加賀村かがむら加賀浦かがうらに潜戸くもりの鼻はなといふあり、日本海にほんかいの大濤だうの觸激しよくげきするところ、其その勝しょう、實じつに伊豆南端いづなんたん石廊いせりゆう、長津呂ながつゆの勝しょうの如ごとしと、而しかも風波かぜなみの嶮惡けんあくなるが爲ためめに、いまた大おほに世よに著あはれず、杵築きづきの町まちは官幣大社くわんぺいたいしや出雲大社いづもたいしやの在あるところ、松江まづわし市しを距まると十一里じゅういちり、今いま町まちを距まること二里半許にほんはんばり、社しやは町まちの北端きたん八雲山やくもさんの麓ふもとに在あり、大國主尊おほくにのみことを奉ほう祀まつす、實じつに古日本こにほんの王者わうじやなり、其その創建きゆうけんは遠とほく神代かみよに在あり、天照太神てんしやうたいじんの勅ちくを奉ほうじて諸神しよしんこれを経營けいゑいす、社殿しやてん頗おほく高嚴かうげんなり、後世ごせい三十二丈造さんじゅうにじゆうさうぞうと稱しょうす、垂仁帝すいじんていの時とき、更さらに本社ほんしやを皇居みかどの如ごとく改造かうぞうし十六丈じゅうろくさうの宮制みやうせいと稱しょうす、後のち巨木きよきあり杵築きづきの浦うらに漂寄ひらきしたるを採とりて、武内宿禰たけうちすくね、本社ほんしやを造營ぞうゑいす、寄

木の御造營ぎごぞうゑいといふ、世漸よとややく亂みだれて社殿しやてんも亦また荒廢こうはいに歸かへせんとせしに、毛利氏もうりしの興おこるに及びて再興さいきゆうし、松江城まづわしじょう主松平直政しゅまづらひなほまさ又またこれを修理しゆりし、明治七年めいしちしちねん、また新たに造營ぞうゑいす、其その神官しんくわんは、實じつに天穗日命あまほひのみことの後裔ごうゑいにして、血統けつとう連綿れんめんとして絶えず、今の千家せや及び北島きたしまの兩家りやうけは其その後昆ごうこんなり、大華表たいかへうを入いり長松ちやうしやう一路いちろの中ちゆうを過すり、更さらに碧銅へきどうの大華表たいかへうを過すぎれば則すなはち社境しやけい、拜殿はいてんあり、結構けつこう壯麗さうれい、拜殿はいてんの後のちに八脚門やくかくもんあり、左右さゆうに廻廊くわうりゆうを環めぐらす、更さらに樓門ろうもんあり、樓門ろうもんの中ちゆう乃すなはち神廟しんべう、天日隅あまひぐみの宮みやなり、繞めぐらすに珠離たまがらを以もつてし、廟宇べうう高潔かうけつ、神威しんゐ巖如いんごとたり、外ほかに境外けいぐわい九社くしやあり、曾かて毛利輝元もうりてるもとの奉ほう進しんしたる巨銅華表きよどうかへう、仆たれて地ちに入る、弘化年こうわねん中國主松平侯ちゆうごくしゅまづらひこう、これを熔解ようげして二礮にぱうを作り、稜威砲りやうゐぱう、神風かみかぜと名なけて八足門やくそくもん内に安置あんちせり、誠まことに本國ほんこく第一だいいちの古靈廟これいべうなり

筑紫の北

門司港もんすこう○香椎宮かすいみや○香椎宮かすいみや○綾杉あやすぎ○仲哀帝古行宮ちゆうあいていこぎやうみや○多々良濱たたらはま○名島の辨天なまのべんてん○帆柱石ふちうぢいし○箱崎神社はこがさきしんぢや  
○敵國降伏てきこくかうふく○千代松原ちよだいまつはら○博多はくた○水城みづしろ○太宰府古趾たさいふこぢ○都府樓とふろう○戒壇院けいたんゐん○觀世音寺くわんぜおんじ○古額こがく○太宰府天滿宮たさいふてんまんみや○飛梅とびうめ○齋齋神事さいさいしんじ○門司もんすには旅箱りよせうに川卵かわたまご、常盤屋とこばんや等らあり福岡ふくおかには高島屋たかしまや、古賀こが



文、海容箱、博多には山城屋、萬里、大和屋、名島には吉巳屋あり、太宰府の旅館には松屋、大野、呼子泉、中村、藤井、三橋、甘木屋等あり

馬關と硯の海を隔て斜めに相對し、喚べばまさに響へんとするものを門司の港となす、九州鐵道の首頭、古の高麗が濱、新羅の濱、文字の關なるもの、九州の咽喉に當りて百貨輻輳す、風光の明媚なるは馬關に譲らす

香椎宮

瀛車の幾多の驛亭を走りて、香椎に近づくや、忽ち松林のうちに入りぬ、景は須磨明石海濱のごとく、唯だ水なきのみ、軟沙に寸塵なく、松の生るや狼藉していまだ老ざるのものなく、清瀨窓より入り來りて人を吹く、既にして瀛車は香椎を過る、香椎の宮あり、途次の景物詩するに堪え畫に上すべし、既にして殘山剩水やうやく盡んとして、荷葉綴をなせる平丘これを受け、野水これを抱きて涓々として流る

一石橋を度れば古松頗ふる異態あり、清陰登石の上に散落し、淨うして寸塵なし、謂ふこれ香椎の宮

更に一石橋を度る、華表あり高きこと數丈、石燈を升れば、神殿、遽然として帳幔を垂れ、廟内幽遠、古香人を吹く、廟前に老杉あり、その年所を知らず、鬱々として大蓋のごとく、地を掩ふこと數十弓、謂ふところの綾杉なるものは

千早振香椎のみやの綾杉は

神のみそぎに立つるなりけり

どの古歌を彫みたる大青石碑立つ、二品熾仁親王殿下の筆を染め給ふところ、朱欄これを繞る、この地、仲哀帝の熊襲を征したまひし時の行宮の在りしところ、その陣中に崩じたまふや神功皇后御柩を香椎の枝に懸けて、哀を發し群臣と盟ふて、自から壁を被り鋭を執りて、三韓を征伐したまひしところ、豊臣秀吉の朝鮮を征するに及びて、麾下の猛將を此に會して、自からこの綾杉の小枝を折り取りてこれを賜ひ、以て其の冑邊に簪さしむ、想ふ當時加藤小西等の將士の各その冑の廂邊に一枝不斷の綠葉を挿み、大刀を横へ長槍を杖きて步趨進退し、北高麗の天を望みて、瞳目張膽して氣を吐くこと蛻のごとくなりしを

更に廟後に至れば、古路鳥啼き露多く、透漣として仲哀帝古宮のところ